

# 千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 6

— 東金市ヲフサ野遺跡・成東町上人塚遺跡 —

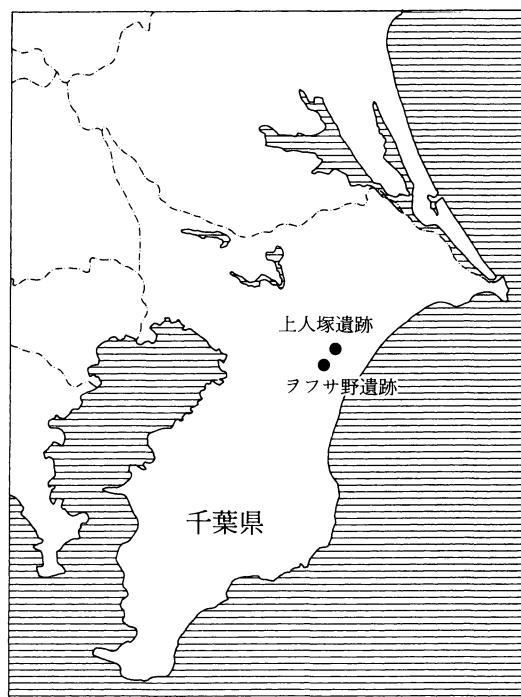
平成12年3月

日本道路公団

財団法人 千葉県文化財センター

# 千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 6

— 東金市ヲフサ野遺跡・成東町上人塚遺跡 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第389集として、日本道路公団の千葉東金道路（二期）事業に伴って実施した東金市ヲフサ野遺跡・山武郡成東町上人塚遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代に始まり縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世にわたっての遺物・遺構が検出され、千葉県山武郡地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土史研究の資料として、さらに埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力を賜りました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 中村好成

## 凡　　例

- 1 本書は、日本道路公団による千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査に伴う報告書の第6冊目である。
- 2 本書に収録した遺跡は、下記のとおりである。

千葉県東金市酒蔵字ヲフサ野192ほか ヲフサ野遺跡（遺跡コード213-011）

千葉県山武郡成東町川崎字上人塚225ほか 上人塚遺跡（遺跡コード404-005）

- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、日本道路公団東京建設局の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、猪俣昭喜、土屋潤一郎が行った。
- 6 報告書内の遺構・遺物等の番号は、調査時のものを原則として用いた。
- 7 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団東京建設局千葉工事事務所、東金市教育委員会社会教育課、成東町教育委員会社会教育課、及び多くの地権者・周辺住民の方々から御指導・御協力をいただいた。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図 「東金」

- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

# 本文目次

I	はじめに	
1	調査の概要	1
2	調査の経緯・経過	1
3	周辺の遺跡と歴史的環境	1
II	ヲフサ野遺跡	
1	遺跡の概要	4
2	検出した遺構と遺物	5
(1)	旧石器時代	5
(2)	縄文時代	9
(3)	奈良・平安時代	22
(4)	その他の時代	23
3	まとめ	25
III	上人塚遺跡	
1	遺跡の概要	26
2	検出した遺構と遺物	26
(1)	旧石器時代	26
(2)	縄文時代以降の遺構と遺物	46
3	まとめ	59
報告書抄録		卷末

# 挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第12図	縄文時代遺構(2)	13
第2図	ヲフサ野遺跡周辺地形図	4	第13図	縄文土器(1)	15
第3図	下層調査状況	5	第14図	縄文土器(2)	16
第4図	第1ブロック出土状況	6	第15図	縄文土器(3)	17
第5図	第3ブロック出土状況	7	第16図	縄文土器(4)	18
第6図	第2ブロック出土状況	7	第17図	縄文時代石器(1)	19
第7図	第3ブロック炭化粒検出状況	7	第18図	縄文時代石器(2)	20
第8図	第1～3ブロック出土遺物	8	第19図	009号跡住居	22
第9図	上層調査状況・遺構配置図(1)	10	第20図	009号跡住居出土遺物	23
第10図	上層調査状況・遺構配置図(2)	11	第21図	グリッド等出土遺物	23
第11図	縄文時代遺構(1)	12	第22図	103号・116号跡シシ穴実測図	24

第23図	上人塚遺跡周辺地形図	27	第38図	B区第10ブロック出土遺物他	41
第24図	上層調査状況	28	第39図	焼土ブロック・炭化材等出土状況	42
第25図	下層調査状況	29	第40図	A・B区ブロック別器種分布	43
第26図	A区第1～3ブロック出土状況	30	第41図	A・B区ブロック別石材分布	43
第27図	A区第1～3ブロック出土遺物(1)	31	第42図	上層遺構配置図	47
第28図	A区第1～3ブロック出土遺物(2)	32	第43図	上層本調査区	48
第29図	A区第4・5ブロック出土状況	33	第44図	陥穴(1)	50
第30図	A区第4・5ブロック出土遺物	34	第45図	陥穴(2)	51
第31図	A区第6・7ブロック出土状況	35	第46図	陥穴(3)	52
第32図	A区第6・7ブロック出土遺物	36	第47図	陥穴・土坑	53
第33図	B区第8・9ブロック出土状況	37	第48図	土坑	54
第34図	B区第8・9ブロック出土遺物	38	第49図	シシ穴	56
第35図	B区第10・11ブロック出土状況	39	第50図	炭焼窯	57
第36図	B区第10～12ブロック出土遺物	40	第51図	縄文土器	58
第37図	B区第12ブロック出土状況	41	第52図	古墳時代遺物	59

## 表 目 次

第1表	旧石器時代石器計測表	9	第3表	石器観察表A区	44
第2表	縄文時代石器計測表	21	第4表	石器観察表B区他	45

## 図版目次

### ヲフサ野遺跡遺構

図版1 空撮、近景、近景  
図版2 第1ブロック、第2ブロック、第3ブロッ  
ク出土石器

図版3 010・026・027号跡陥穴

図版4 009号跡住居、土層断面、カマド

### 上人塚遺跡遺構

図版5 旧石器時代ブロック、旧石器時代焼土ブロ  
ック、009・014・015・016号跡陥穴

図版6 019・047・050号跡陥穴、050号跡陥穴土層  
001・002号跡土坑

図版7 005・006・012・018号跡土坑、シシ穴群

026号跡シシ穴

図版8 035・036・037号跡シシ穴、007・008・020  
号跡炭焼窯、調査風景、遺物出土状況

### ヲフサ野遺跡遺物

図版9 旧石器時代石器・縄文時代石器

図版10 縄文時代石器

図版11 縄文土器

図版12 縄文土器

図版13 縄文土器

図版14 縄文土器、奈良・平安時代土師器

### 上人塚遺跡遺物

図版15 旧石器時代石器

図版16 旧石器時代石器

図版17 旧石器時代石器

図版18 旧石器時代石器

図版19 繩文時代石器

図版20 繩文土器、古墳時代土師器・須恵器

# I はじめに

## 1 調査の概要

日本道路公団は、首都圏一円の慢性的な交通渋滞の解消や、東京への不必要的自動車の流入を制限するために、圏央道の建設を進めているが、その一環として、千葉東金道路を、現在の終点である東金市山田から北東に延長し、横芝町までの16.1kmの区間にわたって、千葉東金道路（二期）建設事業として道路建設を行うこととなった。この際、事業地内における埋蔵文化財の所在の有無が、千葉県教育委員会に照会された。これを受けて千葉県教育委員会は、予定地内の埋蔵文化財の所在の有無を慎重に踏査し、合計39か所<sup>(1)</sup>の包蔵地等が所在する旨の回答をした。この埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で協議が行われ、記録保存の措置が講ぜられることとなった。そして、千葉県教育委員会の指示により、発掘調査機関は財団法人千葉県文化財センターが指名され、日本道路公団と千葉県文化財センターとの間で発掘調査の契約が交わされ、平成4年度から調査が実施されることとなった。平成5年1月から山武郡山武町の栗焼棒遺跡の発掘調査が開始され、これを端緒として平成4年度から平成9年度までの計6年度にわたって調査が行われた。

## 2 調査の経緯・経過

平成4年度の後半から9年度まで続けられた千葉東金道路（二期）建設事業に伴う発掘調査のなかで、上人塚遺跡とヲフサ野遺跡の両遺跡は平成5年度と6年度に発掘調査が行われた。事業の性格上時間的な制約が多く、調査の進捗が図られていたため、平成5年度には11遺跡、6年度には21遺跡という多くの遺跡が調査された時期である。

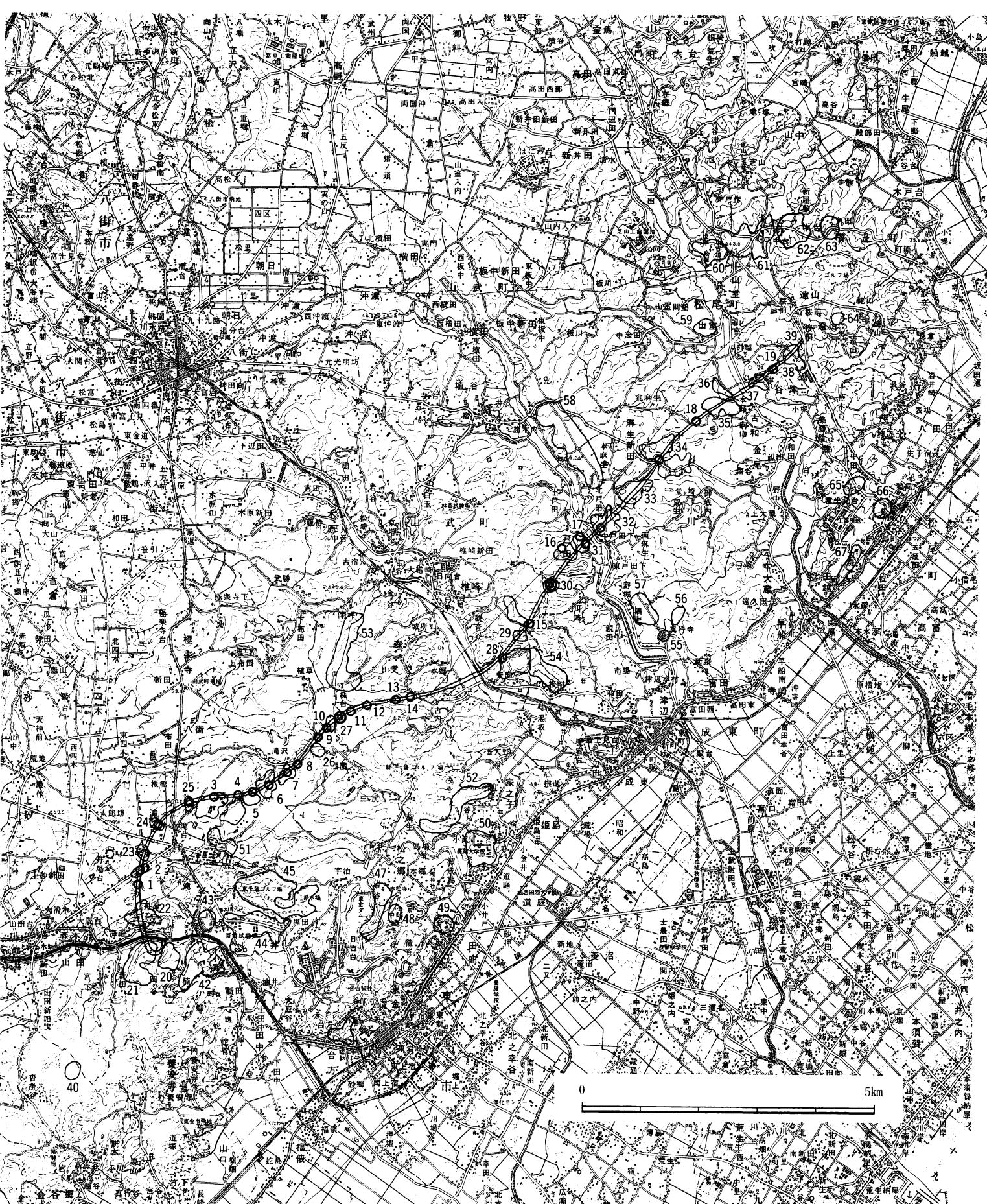
一方、本格的な整理作業も平成7年度から開始されており、平成9年度には栗焼棒遺跡ほか18遺跡の調査報告書を刊行し、翌10年度には小川崎台遺跡の調査報告書を刊行している<sup>(1)</sup>。その一環として、上人塚遺跡及びヲフサ野遺跡も平成11年度に整理作業が行われ刊行することとなった。

本報告書に関連する各年度の事業担当者及び調整者等は以下のとおりである。

平成5年度	調査研究部長	高木博彦	成田調査事務所長	矢戸三男
発掘調査	副所長	豊田佳伸	高田博	係長 川島利道 技師 半澤幹雄
平成6年度	調査研究部長	西山太郎	成田調査事務所長	矢戸三男
発掘調査	副所長	高田博	研究員 平松長寿	主任技師 平野雅一 技師 半澤幹雄
平成11年度	調査部長	沼澤豊	東部調査事務所長	三浦和信
整理作業	研究員	猪股昭喜	土屋潤一郎	

## 3 周辺の遺跡と歴史的環境

千葉東金道路（二期）は東金市小野から横芝町遠山まで、下総台地の南東端部を台地の縁辺に沿って北上、東進する路線長16.1kmの道路である。その事業範囲のなかで、上人塚遺跡は横芝町側から約6km、ヲフサ野遺跡は同側から10kmを超えた位置になる。両遺跡の間は4km以上の距離があり、周辺の環境にも違いが見られる。上人塚遺跡は周辺に古墳時代の遺跡が多く、埴輪を伴う古墳のある小川崎台遺跡、7世紀



1. 大谷台遺跡
2. 丹尾台遺跡
3. 万才樂遺跡
4. 万台遺跡
5. 新堀遺跡
6. 市谷(1)遺跡
7. 油谷(2)遺跡
8. 油谷(3)遺跡
9. 岡田遺跡
10. 岡田山遺跡
11. 鹿穴遺跡
12. 小田山遺跡
13. 原山之神遺跡
14. 道塚遺跡
15. 東嵐山遺跡
16. 里守遺跡
17. 向畠遺跡
18. 櫻谷遺跡
19. 大谷遺跡
20. 尾亭遺跡
21. 羽戸遺跡
22. 前畠遺跡
23. ピンダライ遺跡
24. 滝台遺跡
25. 板橋遺跡
26. 酒藏城跡
27. ヲフサ野遺跡
28. 栗焼棒遺跡
29. 黙ノ塚遺跡
30. 上人塚遺跡
31. 小川崎台遺跡・古墳群
32. 久保谷遺跡
33. 大長作遺跡
34. 一本松遺跡
35. 大山遺跡
36. 赤羽根遺跡
37. 中谷遺跡
38. 千神塚群
39. 四ツ塚遺跡
40. 大網山田台遺跡No.3遺跡(北前野遺跡)
41. 山田水呑遺跡
42. 小野城跡
43. 作畠遺跡
44. 油井古塚原遺跡・古墳群
45. 滝東台遺跡
46. 東金城跡
47. 妙經遺跡
48. 久我台遺跡
49. 平蔵台遺跡
50. 道庭遺跡・古墳群
51. 滝台遺跡(滝沢遺跡)
52. 家之子古墳群
53. 森台古墳群
54. 板附古墳群
55. 真行寺廃寺跡
56. 真行事古墳群
57. 鷺戸(南・北・東)
58. 胡摩手台古墳群
59. 山室城跡
60. 中台古墳群(芝山古墳群・殿塚古墳・姫塚古墳)
61. 中台A遺跡
62. 中台B遺跡
63. 角田遺跡(鴻巣貝塚・角田貝塚)
64. 姥山貝塚(山武姥山貝塚)
65. 蘆木古墳群
66. 松尾台古墳群(大塚古墳群)
67. 大堤古墳群

(国土地理院発行 1:50,000地形図 成田・東金を編集)

第1図 遺跡位置図

初頭に比定される駄ノ塚古墳<sup>2)</sup>、大規模な古墳群を形成する板付古墳群、同時代の集落が存在する栗焼棒遺跡等が見られる。他の時代に目を移すと南東約1.5kmの位置に武射郡衙の推定地とされる成東町嶋戸東遺跡<sup>3)</sup>が存在する。一方、ヲフサ野遺跡周辺には縄文時代早期から後期にかけての遺物包含層と奈良・平安時代の集落遺跡が目立つようになる。小さな谷を挟んで西隣の岡田山遺跡は縄文時代早期の遺物包含層と奈良・平安時代の集落跡である。一方、東に隣接する鹿穴遺跡は、縄文時代早期から後期にかけての遺物包含層と奈良・平安時代の集落跡である。同一台地上に位置するだけに、ヲフサ野遺跡とはかなり類似性が強い。また、南西約2kmの地点に『山邊郡印』が出土し、周辺に山辺郡衙の存在が予想される八街市滝台遺跡<sup>4)</sup>が存在する。

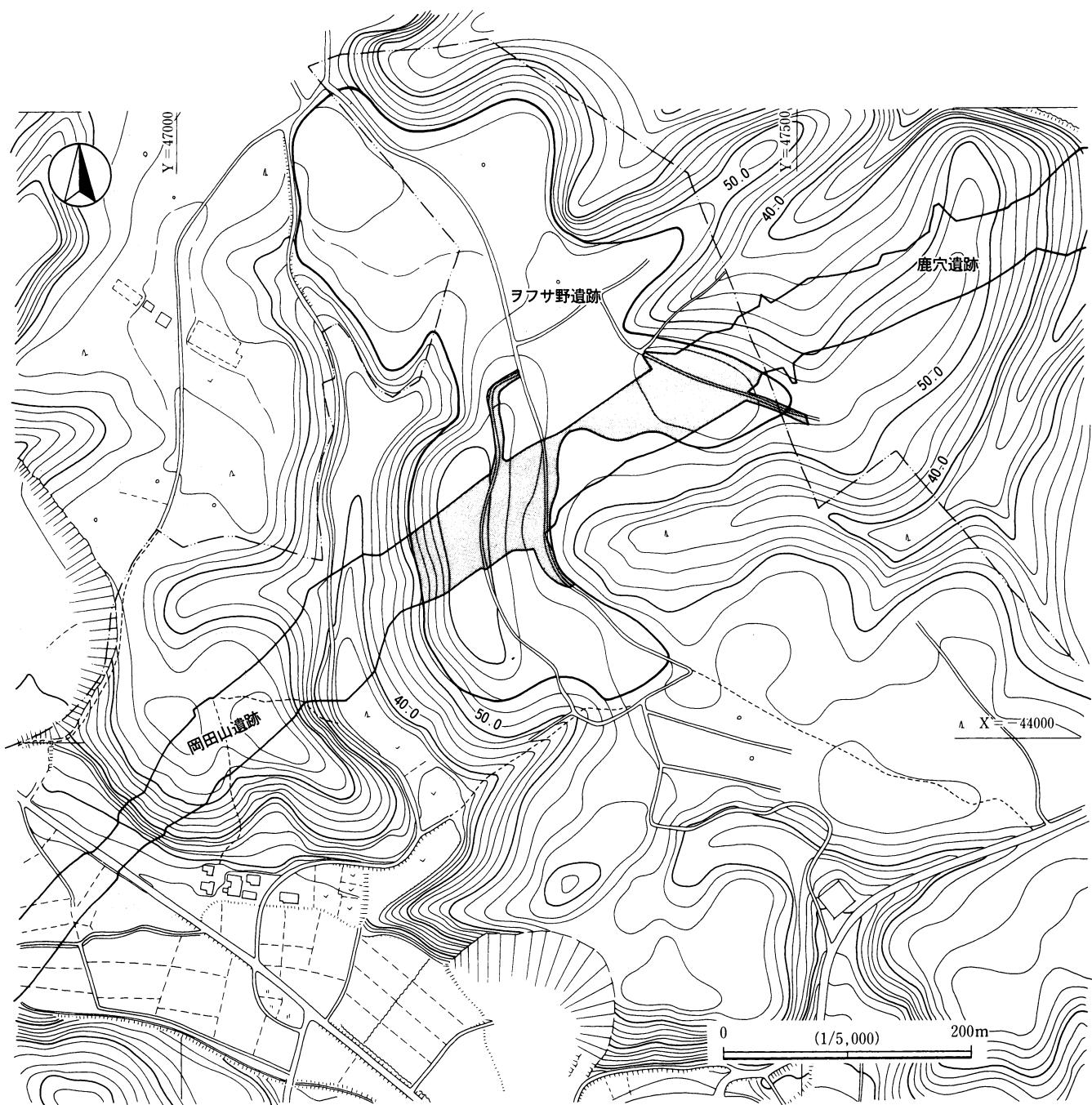
#### 注

- 1) うち、栗焼棒遺跡については、「財団法人千葉県文化財センター 1998『東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 1 一山武町栗焼棒遺跡—』」として、また、大谷台遺跡 丹尾台遺跡 万才楽遺跡 万台遺跡 新堀遺跡 市谷遺跡 油谷遺跡 岡田遺跡 岡田山遺跡 鹿穴遺跡 小山田遺跡 原山之神遺跡 道塚遺跡 東嵐山遺跡 里守遺跡 向畠遺跡 榎谷遺跡 大谷遺跡の18遺跡については、「財団法人千葉県文化財センター 1998『東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 2 一東金市大谷台遺跡他18遺跡—』」として、小川崎台遺跡については「財団法人千葉県文化財センター 1999『東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 3 一山武町小川崎台遺跡—』」として刊行した。
- 2) 国立歴史民俗博物館 1996「千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告」「国立歴史民俗博物館研究報告第65集 東国における古墳の終末《附編》」
- 3) 財団法人山武郡市文化財センター 1994「嶋戸東遺跡」「山武郡市文化財センターヤー報No.9 付編調査報告」  
千葉県教育委員会 1998『成東町嶋戸東遺跡発掘調査報告』  
千葉県教育委員会 1999『成東町嶋戸東遺跡第2次発掘調査報告』
- 4) 丸子 亘 1969「新発見の『山邊郡印』をめぐって」『古代文化』21-1

## II ヲフサ野遺跡

### 1 遺跡の概要（第2図）

本遺跡は、東金市酒蔵字ヲフサ野192ほかに所在し、東側と北側で山武町と境を接する。調査対象面積は15,100m<sup>2</sup>で、うち1,565m<sup>2</sup>について上層の確認調査を行ったところ、平安時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代早期陥穴1基、縄文時代早期遺物包含層9か所、縄文時代後期遺物包含層1か所、中世道路状遺構8条、近世シシ穴跡8基、近世溝状遺構1条が確認された。その結果に基づき、4,060m<sup>2</sup>の上層本調査を実施した。本調査の結果、縄文時代早期陥穴6基、縄文時代早期遺物包含層11か所、縄文時代後期遺物包含層1か所、平安時代竪穴住居跡1軒、近世道路状遺構9条、近世シシ穴22基、近世溝状遺構1条、近世炭焼窯跡6基



第2図 オフサ野遺跡周辺地形図

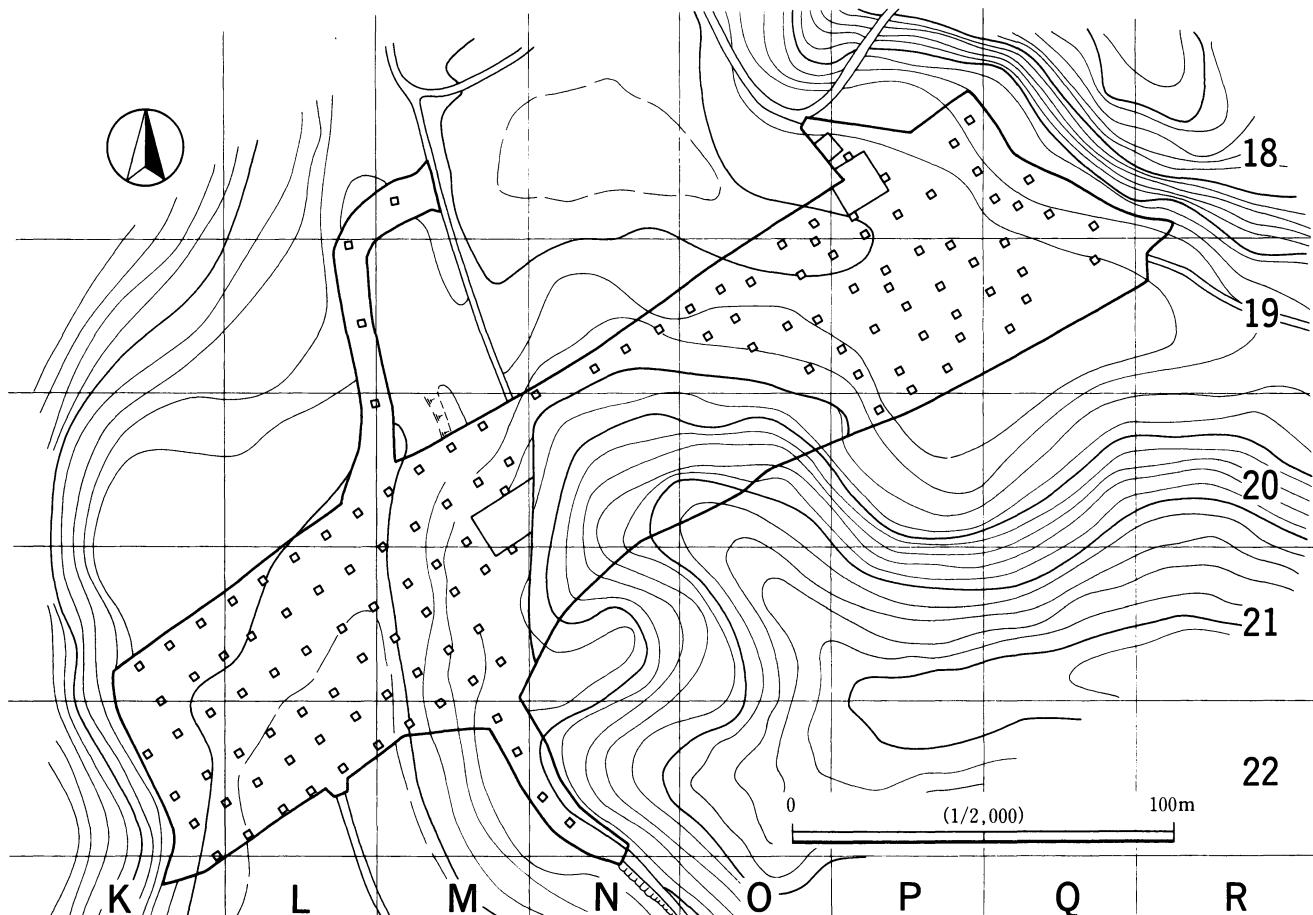
を検出した。下層の確認調査は、604m<sup>2</sup>を実施し、3か所で旧石器時代遺物が検出されたため、288m<sup>2</sup>の本調査を行った。調査期間は、平成5年8月16日から平成5年9月16日までと、平成6年8月22日から平成7年3月30日までであった。

遺跡は、南を九十九里平野を経て太平洋に注ぐ真亀川の上流部、十文字川谷によって、また、北を同じく太平洋に注ぐ作田川の上流部、作田川谷により区切られた極楽寺台の中央部やや南西に位置する。樹枝状に複雑な形状をした狭長な台地上を遺跡範囲とし、東側を鹿穴遺跡と接している。また、十文字川谷滝沢支谷と三ヶ尻支谷の中間あたりから北へ入り込む小支谷を挟んで西に岡田山遺跡が存在する。調査範囲はヲフサ野遺跡南半の一部で、標高は52m～56mであり、中央部分に作田川谷森支谷の最奥部から分岐する谷が入り込み、調査範囲を東西に二分するような形になっている。

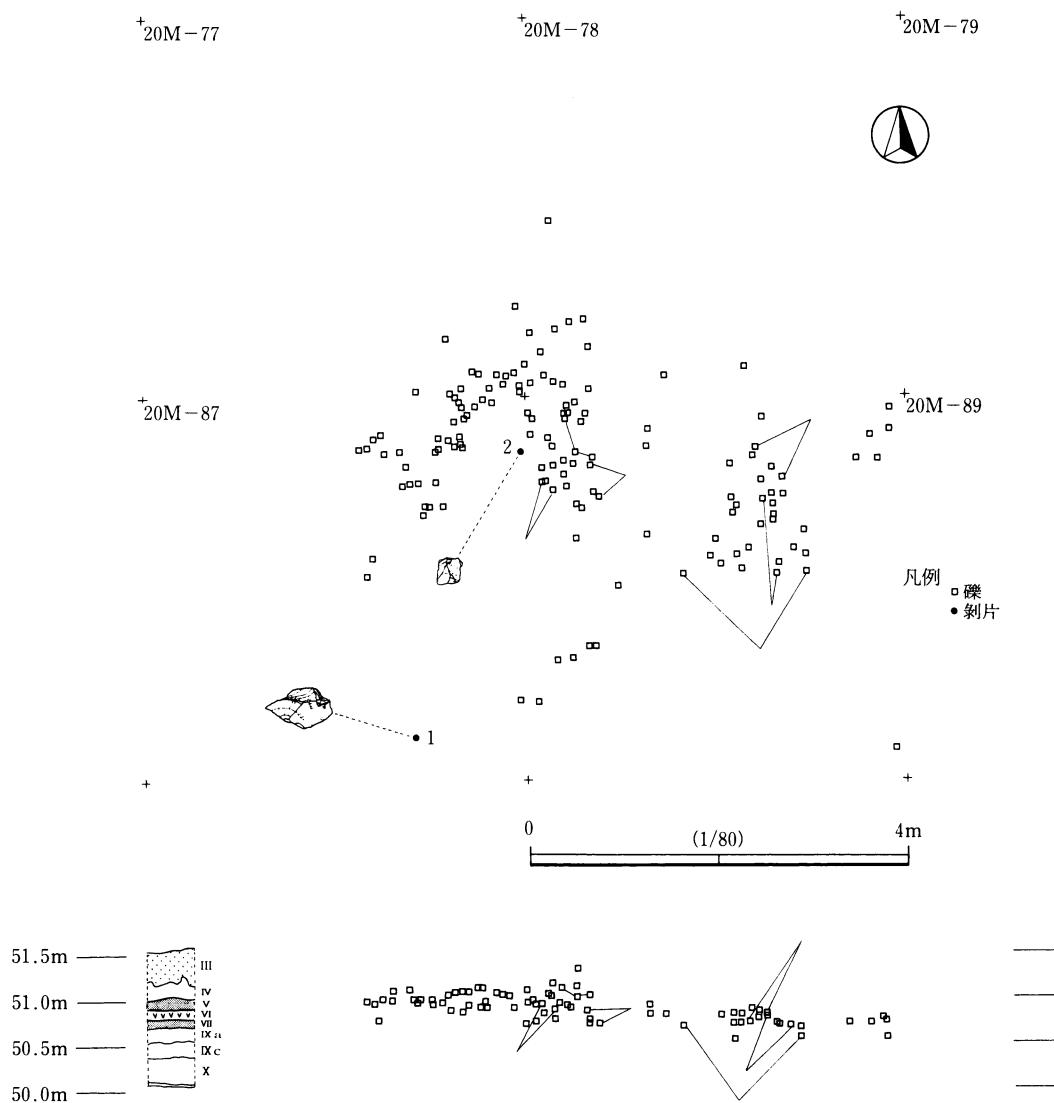
## 2 検出した遺構と遺物

### (1) 旧石器時代

ヲフサ野遺跡での旧石器時代の調査は、15,100m<sup>2</sup>の調査対象面積のうち、288m<sup>2</sup>の本調査を実施した。旧石器時代の遺物等は、調査区の中央部分1地点と東側2地点、合計3地点で3箇所のブロックが検出された。3箇所のブロックは第1ブロック～第3ブロックと呼称する。第1ブロック、第2ブロックは、出土層位がIV～V層（第1黒色帶相当）に位置する。第3ブロックは、出土層位がVII層（第2黒色帶相当）に位置する。



第3図 下層調査状況



第4図 第1ブロック出土状況

**第1文化層 (IV～V層)**

**第1ブロック (第4・8図、第1表、図版9-1・2)**

**分布状況** 20M-88グリットを中心に東西8m、南北6mの梢円形の範囲に比較的緩やかな状態で分布する。

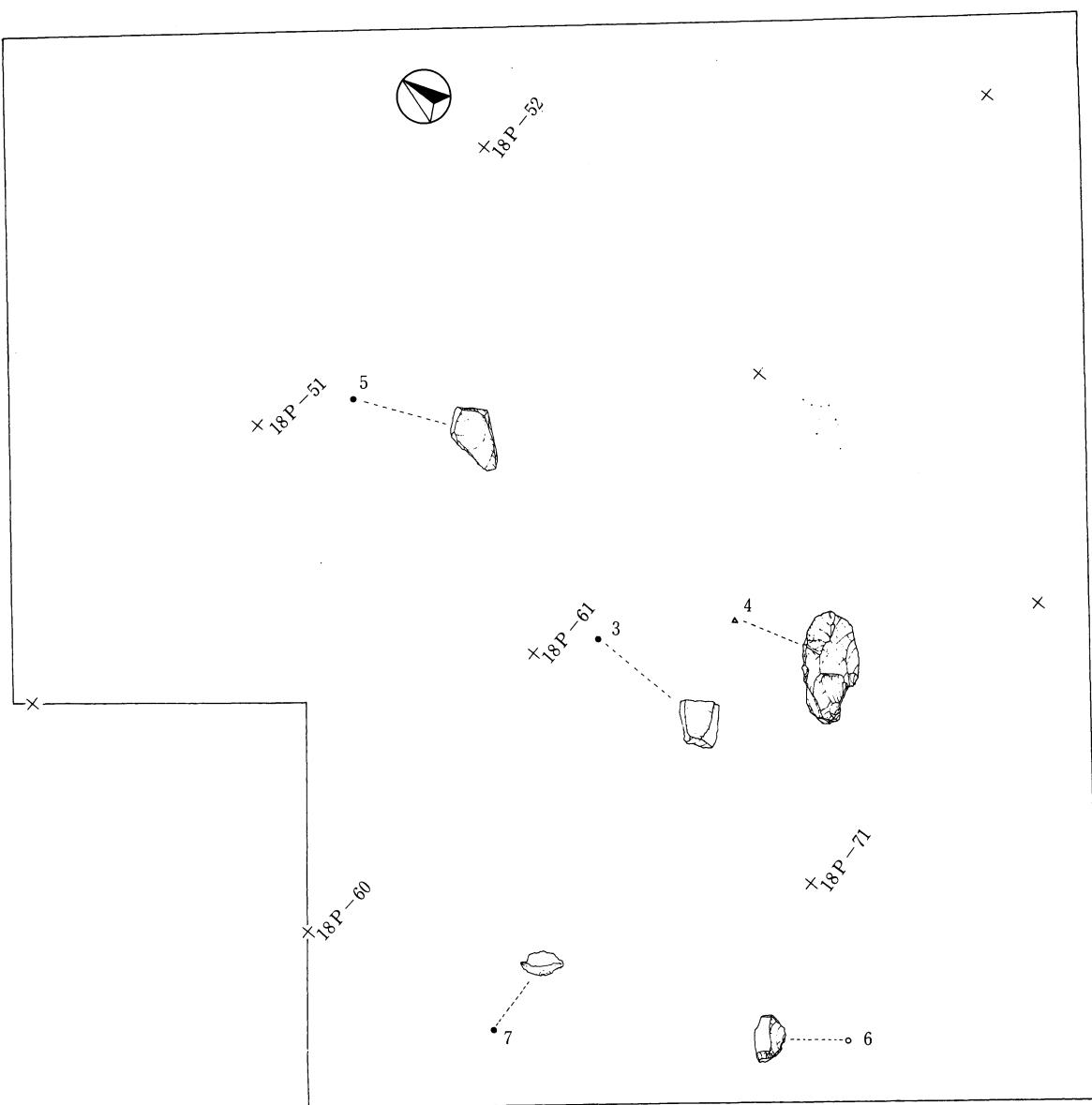
遺物総数は142点である。ただし2点を除いて熱を受けたと思われる赤化した破碎磧で占められている。土層断面の投影ではIV～V層までの範囲で分布している状況が認められる。

**母岩別資料** 安山岩（密度が高くガラス粒が多少見られるもの）1点とホルンフェルス（粒が細かくやや風化しているもの）1点と磧140点で構成される。磧片は数点接合関係が認められる。

**出土遺物** 比較的緩やかにまとまりがある大規模なブロックであり、剝片2点と焼けた磧片140点で構成される。

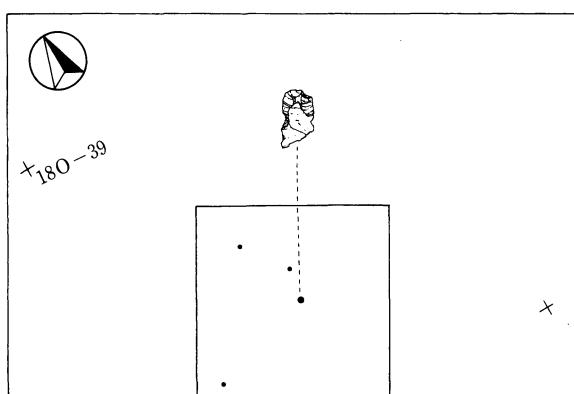
1は安山岩製の剝片である。菱形状の小形の剝片で頭部は段状を呈し、端部は薄く剝がれている。

2はホルンフェルス製の小剝片である。薄く剝がされた小剝片で頭部、端部とも折れている。



第5図 第3ブロック出土状況

0 (1/8) 4m



54.00m  
I  
IIb  
IIc  
IIc'  
III  
IV  
V  
VI

第6図 第2ブロック出土状況

0 (1/40) 2m

第7図 第3ブロック炭化粒検出状況

その他の焼けた礫片は、頁岩や砂岩系の石質のものが多数を占める。礫群が主体のブロックといえる。

#### 第2ブロック（第6・8図、第1表、図版9-8）

分布状況 180-39グリッドを中心にして約1mの範囲で4点出土した。

遺物総数は4点で、剝片1点と碎片3点で構成される。断面分布を見る限りIV層～V層の遺物と思われる。第2ブロックの遺物と全く共通性がないため先後関係は不明である。

母岩別資料 黒曜石（透明度の比較的強く夾雜物も少ないもの）4点で構成される。

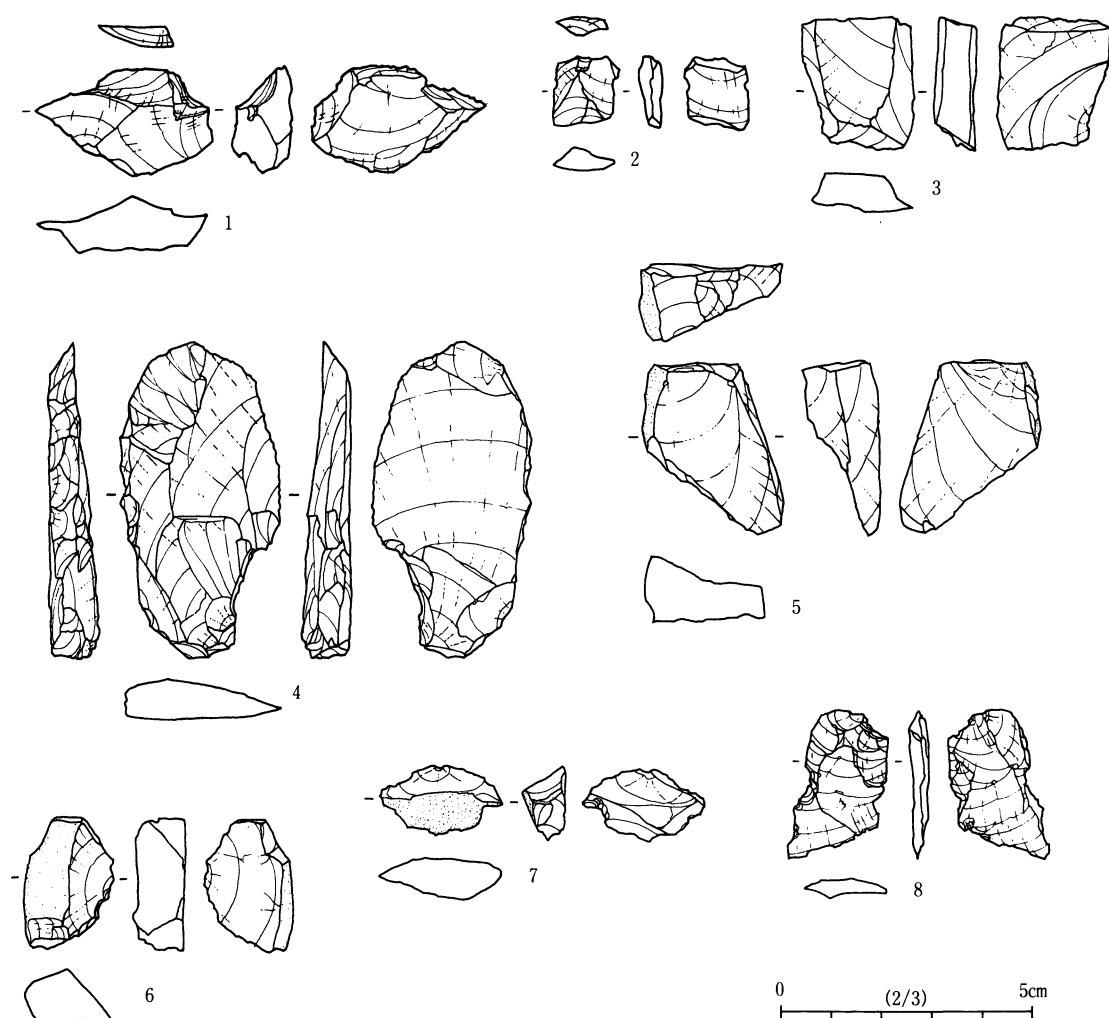
出土遺物 4点がまとめて出土している。

8は黒曜石製の剝片である。非常に薄い剝片で細かな剥離痕も見られるところから使用された可能性も伺われる。

#### 第2文化層（VII層）

#### 第3ブロック（第5・8図、第1表、図版9-3～7）

分布状況 18P-61グリッド付近を中心に非常に広い範囲に散在して分布する。また調査区域内に炭化粒の集中範囲が一箇所確認されている。ナイフ形石器と3mしか離れておらず、関係が深い遺構であるかもしれない。



第8図 第1～3ブロック出土遺物

第1表 旧石器時代石器計測表

捕獲番号	グリッド 遺物 番号	遺物 種	最大長 mm	最大巾 mm	最大厚 mm	重量 g	打角	打面 形状	背面構成						調整角	先端角	調整 部位	打面 部位	末端	母岩番号	接合資料	備 考	層位	標高				
									C	S	H	T	R	L	D	V												
第8図1	20M 87	26	剥片	21.0	34.2	10.5			1		2														第1ブロック	IV～V層	51.052	
第8図2	20M 87	24	剥片	12.9	12.2	4.8			折れ																第1ブロック	IV～V層	51.120	
第8図3	18P 71	3	剥片	24.8	21.8	7.8																			第3ブロック	VII層	53.284	
第8図4	18P 71	4	ナイフ形石器	61.6	31.8	7.9			C		1														安山岩①	VII層	53.356	
第8図5	18P 61	2	剥片	33.4	32.2	14.1			C		1														安山岩②	VII層	53.247	
第8図6	18P 80	2	U・フレイク	26.3	17.4	9.6			C		1	1													チャート	VII層	53.228	
第8図7	W16	1	剥片	13.8	24.4	8.6			1		1														安山岩②	VII層	53.217	
第8図8	W7	2	剥片	30.2	17.2	3.3			L		1														黒暎石	第2ブロック	IV～V層	53.350
	W7	1	碎片																						黒暎石	第2ブロック	IV～V層	53.412
	W7	3	碎片																						黒暎石	第2ブロック	IV～V層	53.298
	W7	4	碎片																						黒暎石	第2ブロック	IV～V層	53.317

遺物総数は5点で、ナイフ形石器1点、使用痕のある剥片1点、剥片3点で構成される。ただし平面分布図、及び出土状況の記載からVII層出土遺物であると思われる。

**母岩別資料** 安山岩①(風化面が白っぽく粒の細かいもの)1点と安山岩②(風化面が黄土色ぽいもの)3点、及びチャート(茶色味がかったガラス質のもの)1点で構成される。石材相互の接合関係は認められない。

**出土遺物** 5点は、出土しているもののブロックというほどのまとまった状況で出土しているとはいいがたい。

3は安山岩②製の剥片である。背面剥離方向に対し右方向から主剥離面が剥離されている。

4は安山岩①製のナイフ形石器である。基部及び刃部以外の側辺部にはしっかりとした刃つぶしが施されている。刃部も先端部分に樋状の剥離が見られる。

5は安山岩②製の剥片である。左側側辺部に一部礫面を残す。全体にやや分厚い印象をもつ。

6はチャート製の使用痕の認められる剥片である。小さくやや分厚い剥片の一部に不規則な細かい剥離が認められる。

7は安山岩②製の小剥片である。背部の中央から端部にかけて礫面を残す。

## (2) 縄文時代

ヲフサ野遺跡の縄文時代についての調査では、6基の陥穴が検出され、包含層等から全部で400点を超える遺物が出土している。

### 遺構

#### 002号跡陥穴（第11図）

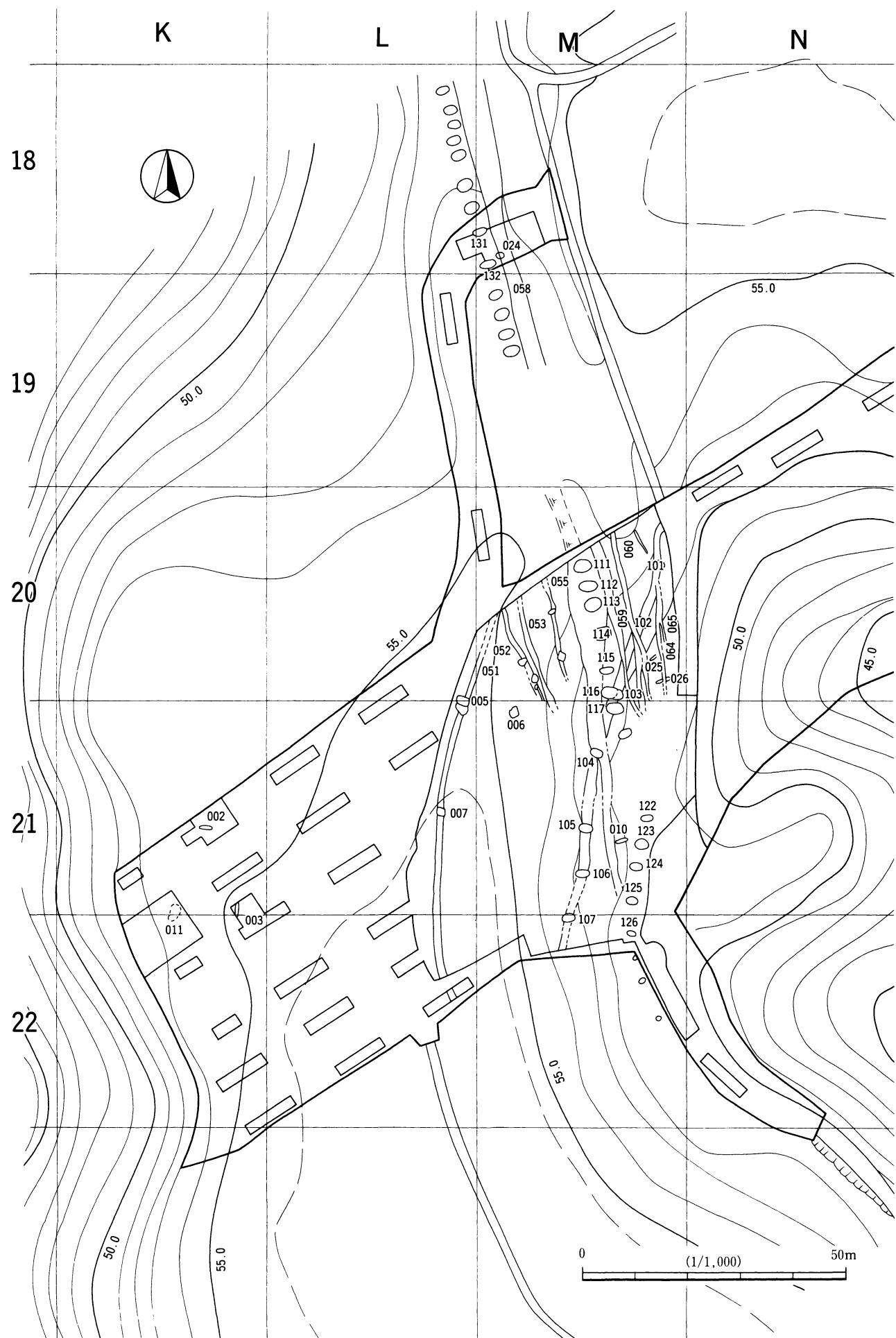
本遺構は、調査区西端部付近に位置し、台地が西に急傾する直前の緩斜面に、長軸を等高線に直交させるように掘られている。長軸方向はN81°Wで、短軸の断面形態は、狭長なY字形を示す。規模は、確認面上で長軸3.3m、短軸0.9m、底面部で長軸3.55m、短軸0.22m、深さ1.2mである。

#### 003号跡陥穴（第11図）

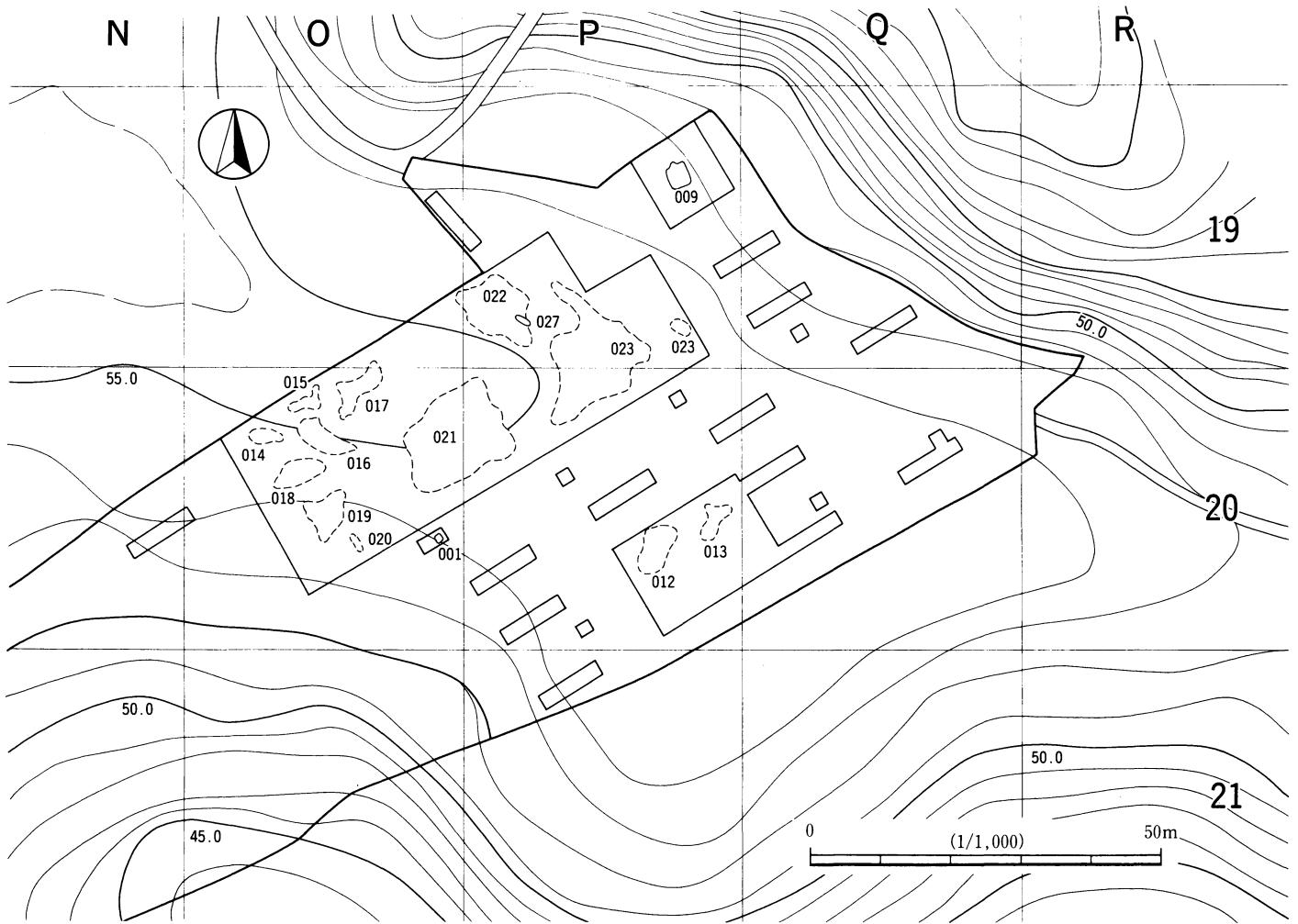
本遺構は、002号跡の15mほど南に位置する。002号跡と同一の緩斜面に、長軸が等高線と平行になるよう掘られている。長軸方向は、N1.3°Wで、ほぼ南北を向き、短軸の断面形態はY字形である。規模は、確認面上で長軸2.9m、短軸0.76m、底面部長軸3.4m、短軸0.2m、深さ1.55mとなる。

#### 010号跡陥穴（第11図、図版3）

本遺構は、調査区中央部に南東から入り込む谷の西側斜面にあり、等高線に直交するように掘られている。長軸方向はN67°Eで、短軸断面は、狭長なY字形である。規模は、確認面上で、長軸2.78m、短軸



第9図 上層調査状況・遺構配置図(1)



第10図 上層調査状況・遺構配置図(2)

0.66m、底部面で長軸2.94m、短軸0.18m、深さ1.55mとなっている。

#### 025号跡陥穴（第12図）

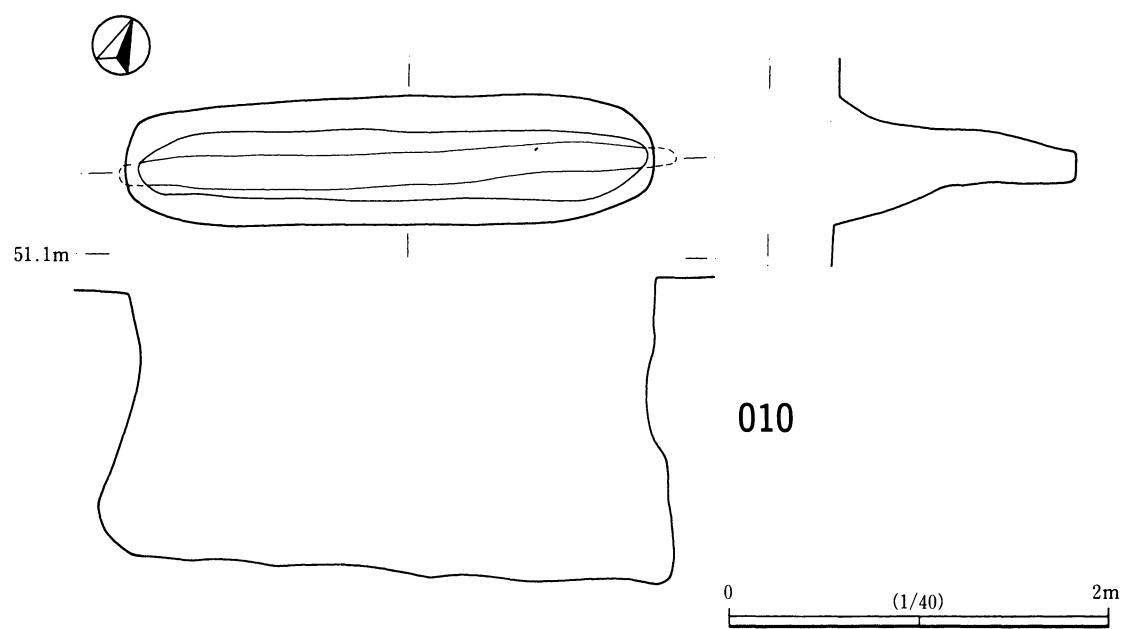
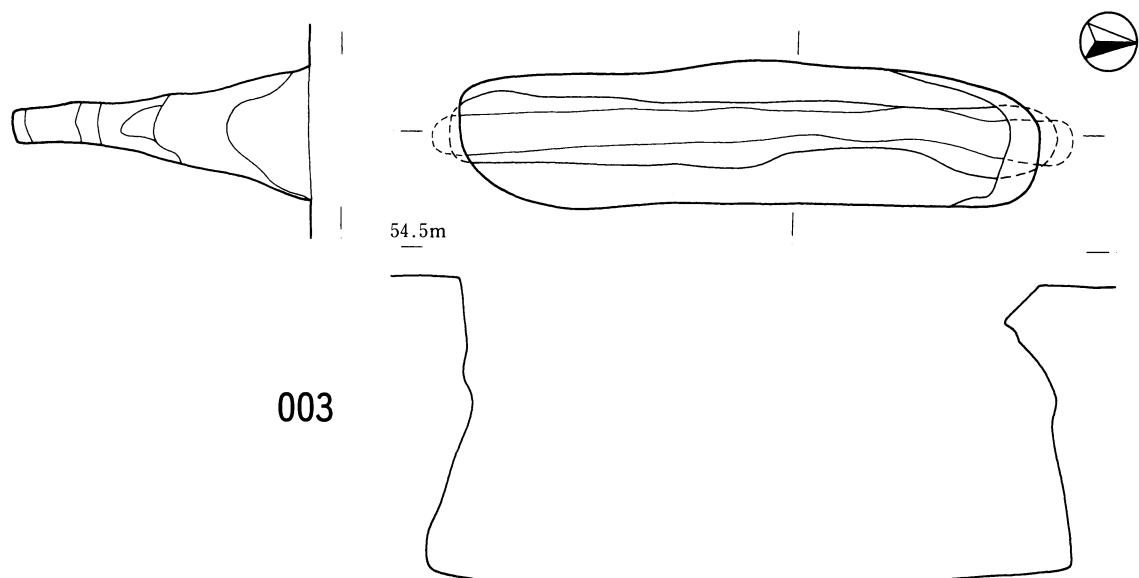
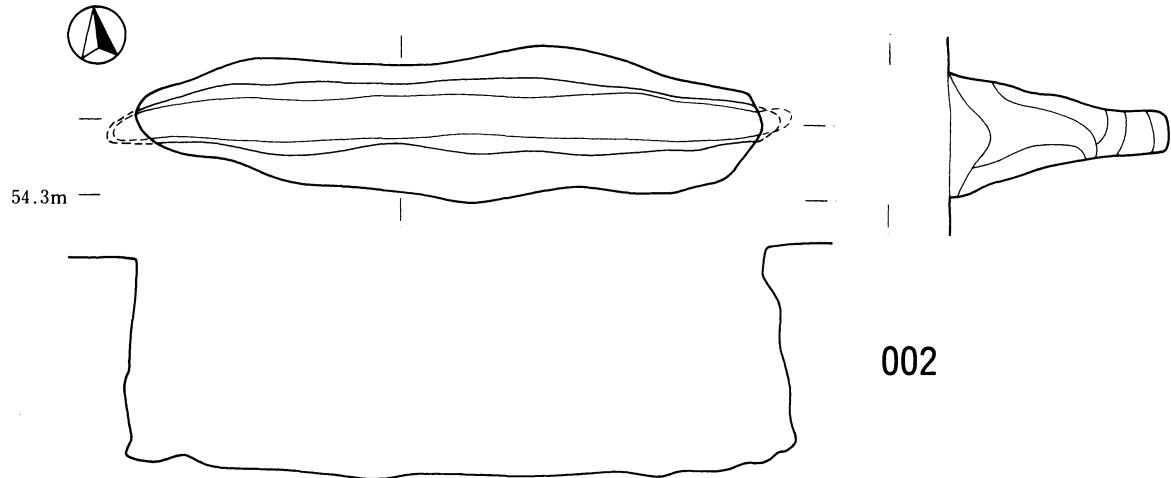
本遺構も調査区中央の谷の西側斜面にあり、どちらかといえば等高線に沿うように掘られている。長軸方向は、N $58^{\circ}$  Eを示している。遺存度が低く底面部の短軸規模しか記述できないが、その数値は0.14mであり、短軸の断面形態は、狭長なY字形をしていたであろう。

#### 026号跡陥穴（第12図、図版3）

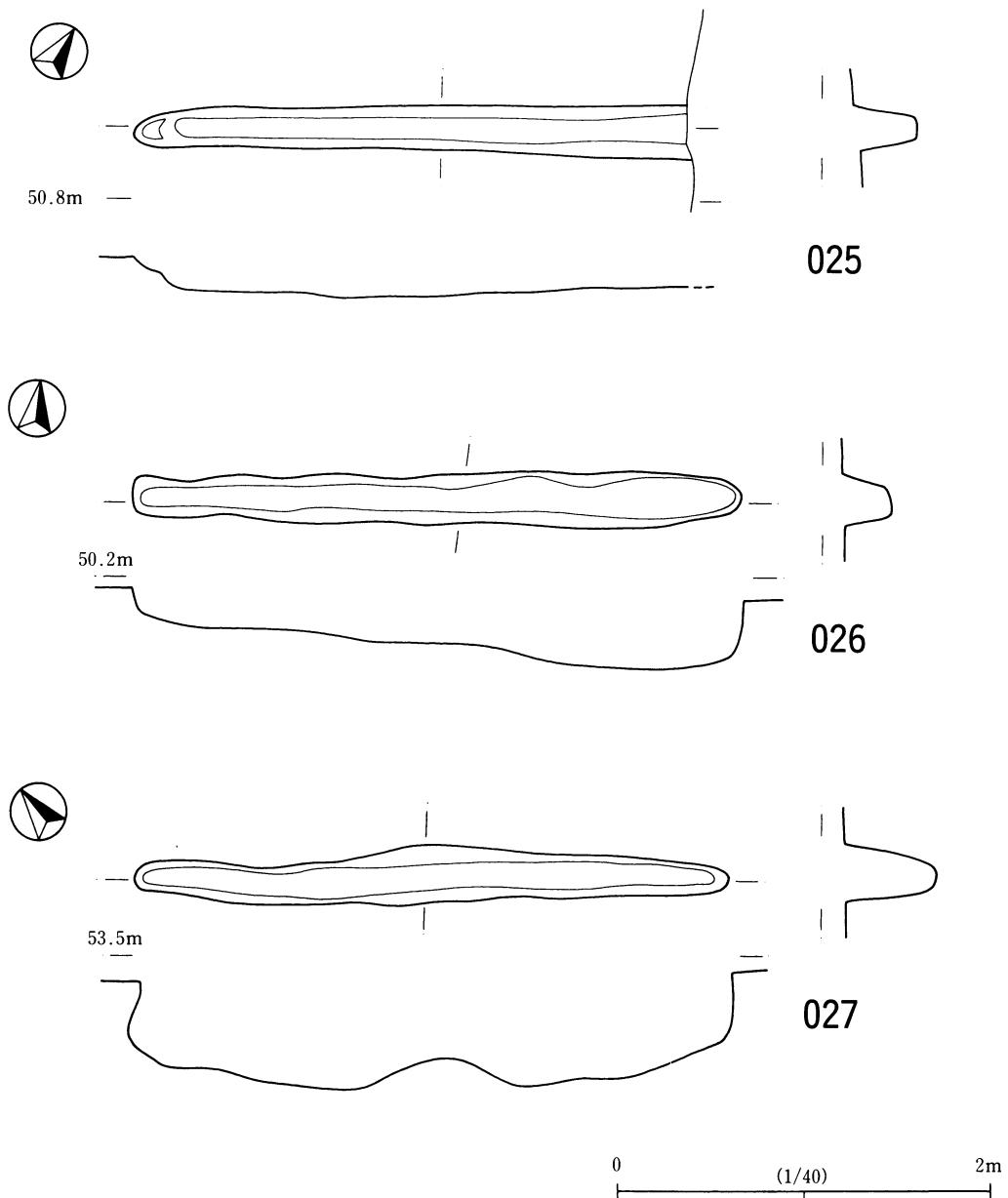
本遺構は、025跡の南4mの位置にあり、等高線に直交するように谷に向かって掘られている。長軸方向は、N $83.5^{\circ}$  Eである。遺存状況が悪いため、規模の記載は底部面のみにとどめるが、長軸3.22m、短軸0.16mとなっている。やはり、狭長なY字形の短軸断面形態をしていたと思われる。

#### 027号跡陥穴（第12図、図版3）

本遺構は、調査区の東部に位置する。隣接する鹿穴遺跡との間に、北から入り込む小さな谷に向かって傾斜が強まる直前の緩斜面に、等高線に平行するように掘られる。長軸方向は、N $52.5^{\circ}$  Wで、底部面の計測値は、長軸3.06m、短軸0.14mである。他の陥穴同様、Y字形の短軸断面形と思われ、底部中央が、やや高まっている。



第11図 繩文時代遺構(1)



第12図 縄文時代遺構(2)

#### 縄文土器（第13図～第16図、図版11～14）

全部で400点を超える遺物が出土しているが、包含層中もしくは後世の遺構から出土したものであり、この時代の遺構に伴うものはない。また、調査した包含層の面積は、2,000m<sup>2</sup>ほどであり、第3図および第4図中の破線で示した部分に遺物が集中している。遺物には早期夏島式の撚糸文土器から、後期終末の安行2式土器まで多期多様なものが見られる。

#### 第Ⅰ群

早期の土器を一括する。

##### 1類

早期撚糸文系夏島式に比定される土器である。

#### a種（1～6、10、11、16）

縄文を施文されたものである。1～6は口縁部片で、口縁は僅かに外反し、直下から縄文が施される。10、11、16は胴部片で、16は底部に近い。

#### b種（7～9、12～15）

主に撚糸文を用いたものである。7～9は口縁部片で、7、9では口縁直下から縦に施文される。8は口縁部下に無文帯を持つもので、花輪台式の様相も感じさせる。12～15も胴部片で、細い撚糸が用いられている。17、18は尖底で、丸みを帯びた砲弾型を示す。

#### 2類（23）

平坂式の土器である。出土したのは、23の深鉢のみである。口縁が僅かに内湾気味に直立し、全体に縦方向の擦痕文が施され、口縁付近に横方向の削り整形が見られる。

#### 3類（17～22）

田戸下層式の土器で、いずれも縦方向の沈線を文様として用いている。17と21は単一の沈線で、19、20は2本の沈線を一組みとし、18と22は細い3本の沈線をひとつの単位とした文様構成をあらわす。

#### 4類（24～26）

茅山下層式の土器で、条痕文を施す。24は口縁で、貝殻条痕文を器面の内外に施している。25・26は胴部片で、外面に貝殻条痕文を施す。いずれも胎土に纖維を混入している。

### 第II群

前期の土器を一括する。

#### 1類（27～33）

諸磯b式に属する土器である。27・28は口縁部付近でやや内湾して開く深鉢で、同一の個体であり、竹管の押し引きにより施文されている。29～32は波状を示す口縁部片で、やはり同一個体である。口縁直下に竹管の刺突が連続し、その下に数条の平行する沈線による山形文を巡らせ、さらにその下を平行沈線間に櫛状工具による刺突を施す文様で飾っている。やや砂質感のある精製された胎土で、裏面はきれいに磨かれる。29には補修孔が見られる。33は口縁部がやや外反して開く深鉢である。口縁直下に半裁竹管の押し引き文が見られ、その下にいわゆる肋骨文が施される。やや古い時期に置かれる土器である。

#### 2類（34～43）

浮島式に比定される土器で、施文具に貝殻を用いることが特徴である。34～36は貝殻押捺文を用いている。37は口縁外周に細かな縦位の刻みを付け、直下に貝殻腹縁文を密に施している。38・39は地文に縦位の貝殻腹縁文を用いたもので、口唇部に刻みが見られる。40・41は沈線により幾何学的な文様を創り、三角の区画内に貝殻腹縁文を充填している。42は波状貝殻文を施すものである。43は結節回転文を施す胴部片で、前期末葉のものと考えられる。

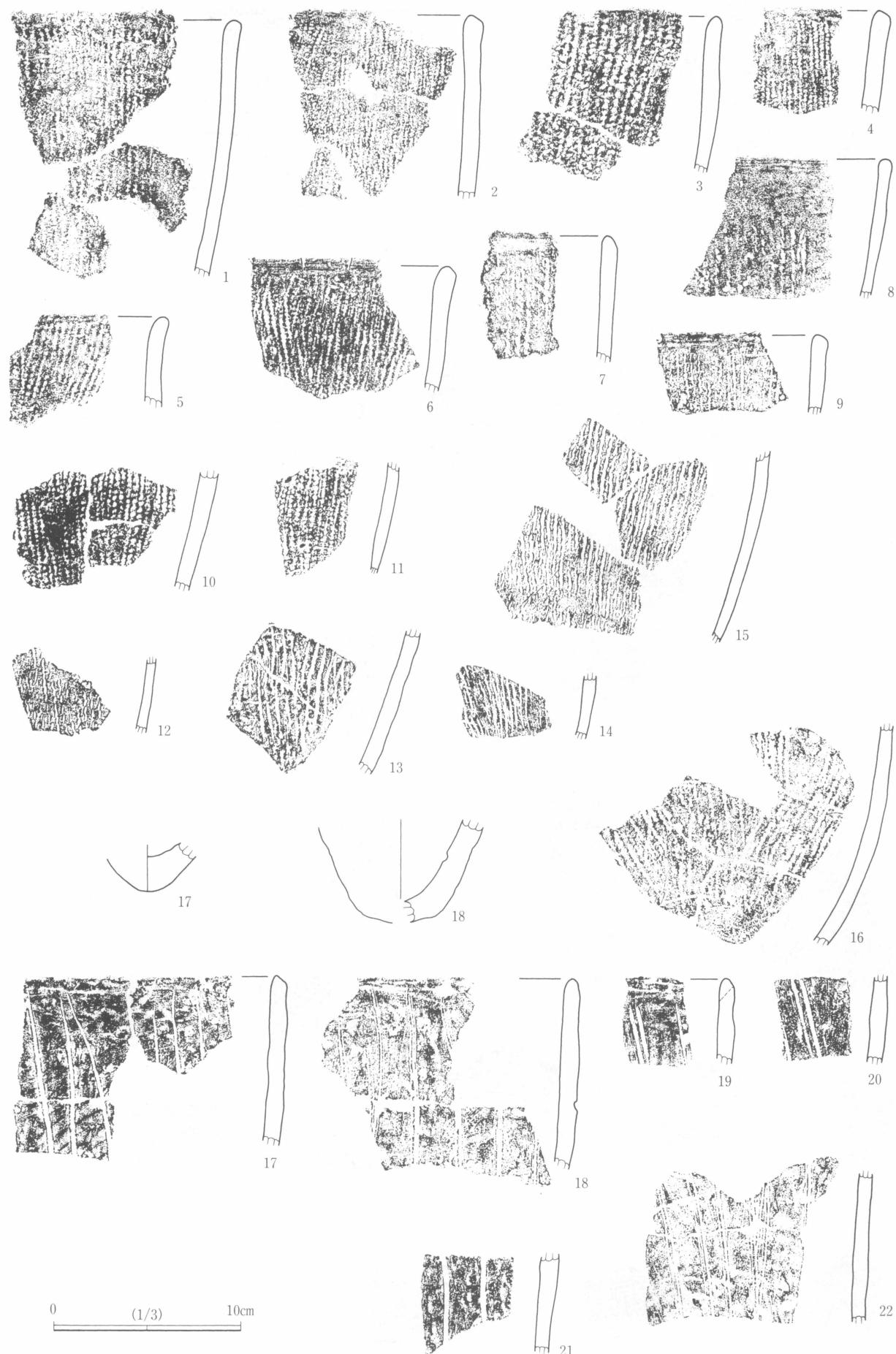
### 第III群（44・45）

中期の土器を一括するが、本遺跡から出土したこの時期の土器は44・45の2点のみである。いずれも加曾利E III式に比定されるもので、強く内湾した口縁部である。

### 第IV群

後期の土器を一括する。

#### 1類（46～61）



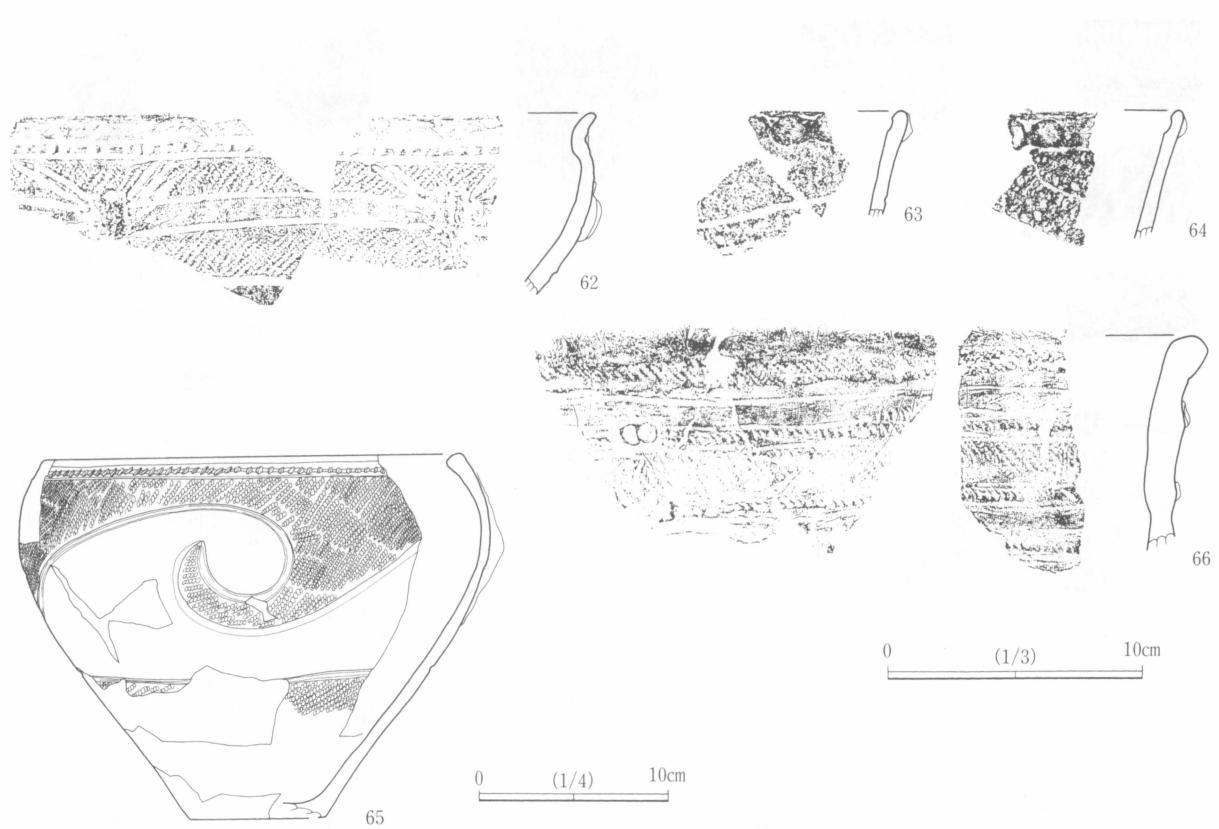
第13図 縄文土器(1)



第14図 繩文土器(2)



第15図 縄文土器(3)



第16図 繩文土器(4)

堀之内式1式土器をあてる。

#### a種 (46~60)

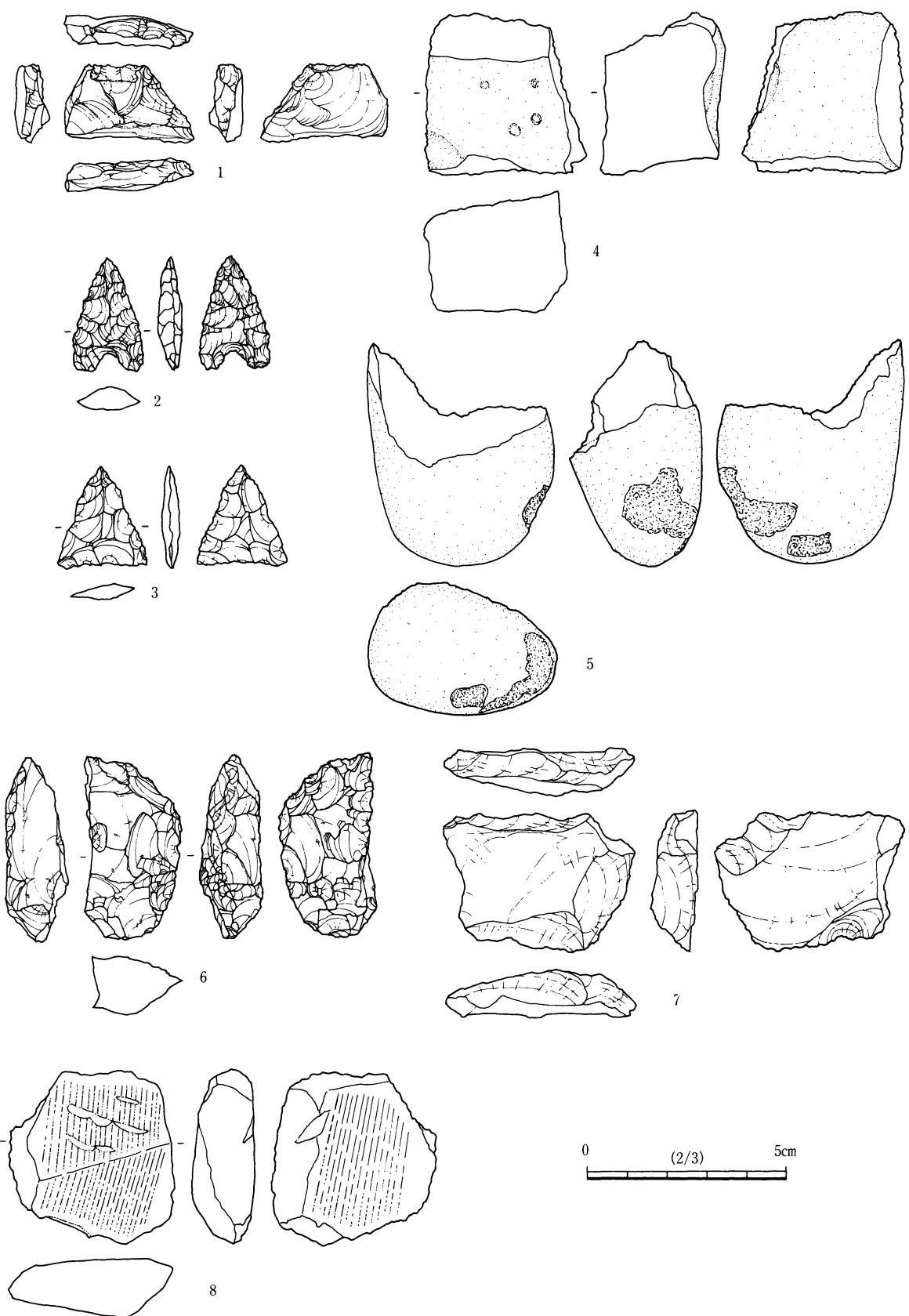
地文に縄文を施した後、沈線を用いて文様を描いているものである。46~58は胴部上位にくびれをもつ深鉢で、口縁部はゆるい波状を示す。くびれ部に2組4条の平行沈線を巡らせ、施文部分の区画をしている。波頂部からその沈線下まで刻みを付けた細い粘土紐を貼り付け、粘土紐の下端に同心円状の沈線を刻む。これにより縦位の区画を行い、その間を多条の沈線で施文している。59は施文具に半裁竹管を用いている。60は口縁部に単沈線を巡らし、直下から縦位に2条の単沈線により区画した中を蛇曲線文状の沈線で飾っている。

#### b類 (61)

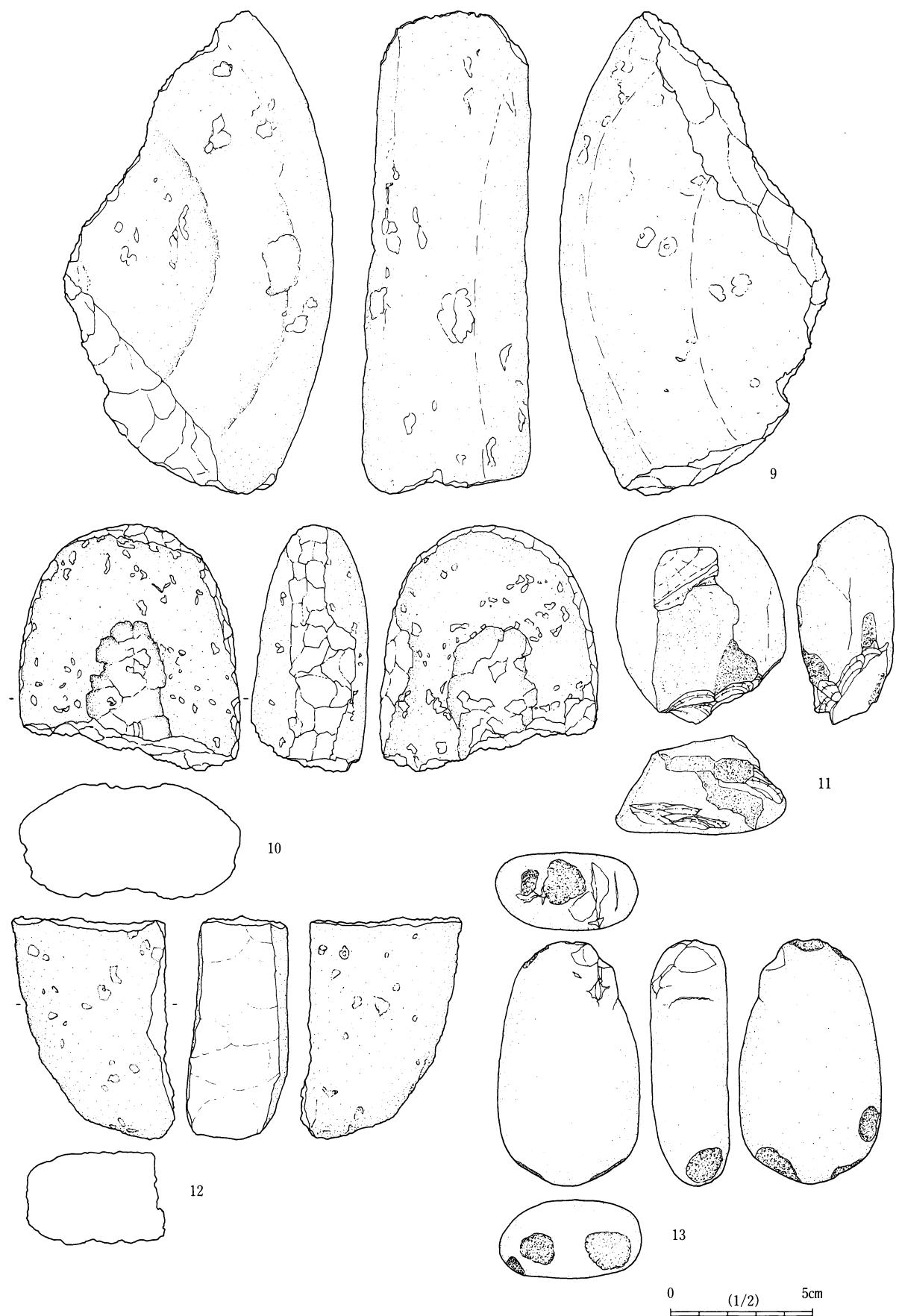
縄文を用いないもので、61がこれにあたる。口縁部に無文帯をもち、くびれ部以下には、櫛状工具を用いた条線を整然と施している。

#### 2類 (62~65)

加曾利B1式に比定される土器をあてる。62は大きく内湾する胴部と外反する口縁部を持つ鉢形土器である。口縁部下から数条の沈線を横位に巡らせ、沈線間にヘラの連続刺突による刻み目、縄文、磨消縄文、縄文といった横帶文を形成する。磨消縄文帯には小突起が貼り付けられ、突起の上下に竹管の刺突が施されている。63・64は深鉢形土器である。口縁部に隆帯が貼り付けられ、指による刺突が連続している。65は口縁部まで内湾する鉢形土器である。口縁部に2条、胴部中位に1条の沈線を巡らせ文様を区画している。口縁部には刻みを巡らせ、胴上半には2本の弧線を用いた「の」の字文を4単位施している。さらにそれぞれの「の」の字の中心部分を突出させている。胴下半は上部に縄文が残り、以下は磨消されている。



第17図 縄文時代石器(1)



第18図 繩文時代石器(2)

### 3類 (66)

安行2式の土器である。本遺跡出土の土器でこれに該当するのは66のみである。66は口辺部に帶縄文が見られ、以下隆起手法により造りだした隆帯に刻文を巡らせ上下の文様を区画している。また、刻文帯には二つの凹みを持つ小突起を貼り付け、上下の突起同士を沈線で結んでいる。

### 縄文時代以降の石器 (第17・18図1~13、第2表、図版9~9~11・図版10)

縄文時代及びそれ以降の時代の石器についても調査区域内で若干出土しているので以下に説明する。

1は黒曜石製の剝片である。平面形は台形を呈する。細かな刃こぼれも見られることから使用されたものかもしれない。

2は黒曜石製の石鏸である。薄目の剝片を使用して両面とも丁寧に仕上げてある。脚部は凹基を呈する。

3は安山岩製の石鏸である。両面とも比較的大きめの調整で仕上げてある。平面形は三角形でいわゆる平基鏸と呼ばれるものである。

4、9は安山岩製の石皿片である。特に9は全体の四分の一程遺存しており使用された跡が良好に観察される。

5は安山岩製の敲石片である。約二分の一遺存している。片側側片部分に打痕が観察される。

6は黒曜石製のスクレイパーである。分厚い横剥ぎの剝片の片側側片部分に刃潰し加工を行い石器に仕上げてある。

7は粘板岩製の打製石斧片である。上半分が折れているため全体の形状は不明。

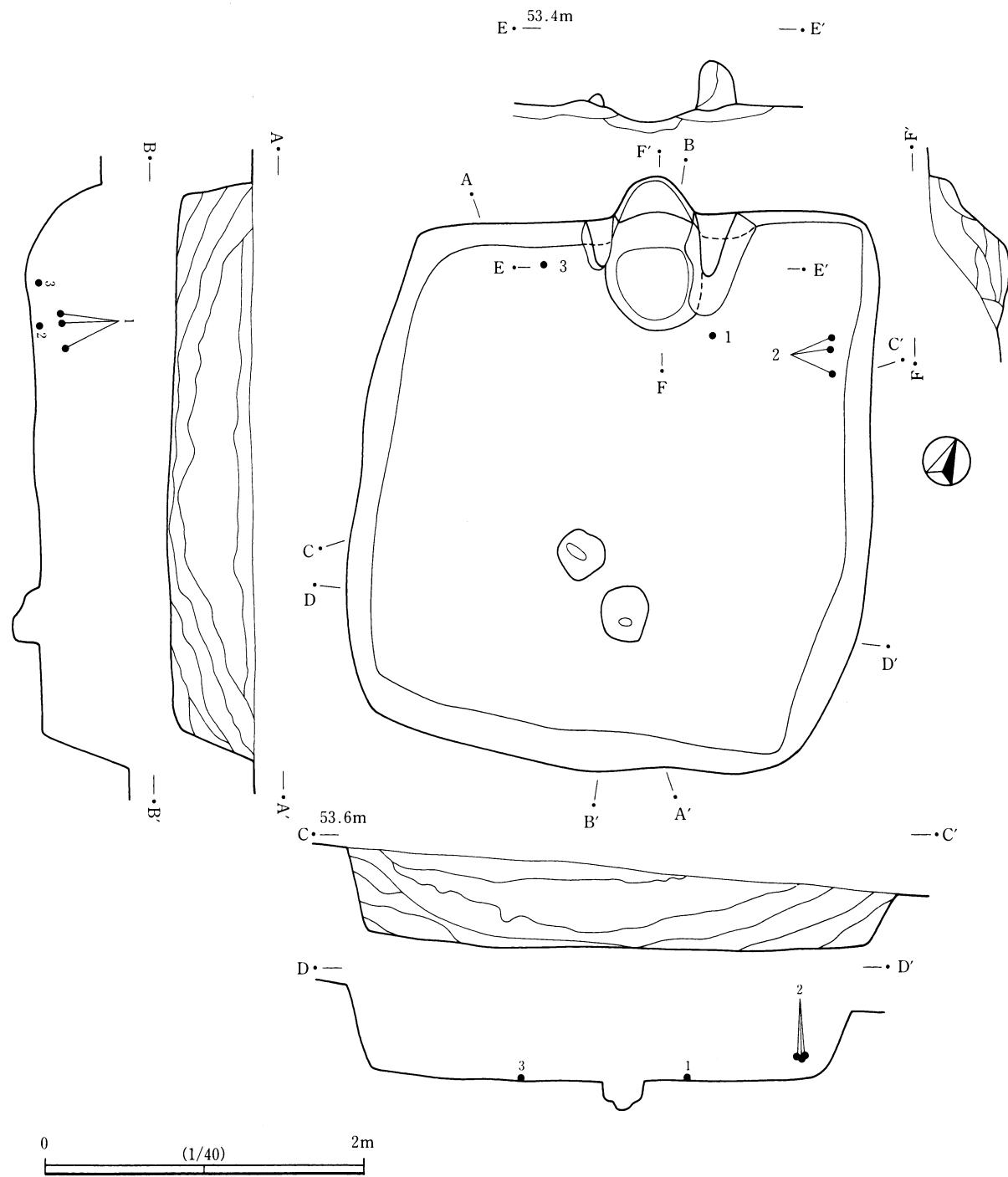
8は凝灰岩製の砥石である。両面ともに使用された面が観察される。

10、12ともに安山岩製の磨石である。特に10については約半分しか残っていないが、中央部の打撃によるくぼみも観察できる良好な資料である。

13は珪質頁岩製の敲石である。石器の上下両端部分に使用による加撃痕が観察できるものである。

第2表 縄文時代石器計測表

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	最大長 mm	最大巾 mm	最大厚 mm	重量g	石材	備考欄
第17図1	13	25	剝片	19.3	32.8	7.2	3.604	黒曜石	
第17図2	23	51	石鏸	27.9	18.0	5.5	2.104	黒曜石	
第17図3	22N-09	1	石鏸	25.0	22.4	4.1	1.670	安山岩	
第17図4	21	5	石皿片			27.6	58.936	安山岩	
第17図5	9	9	敲石	59.0	45.8	32.6	77.660	安山岩	
第17図6	12	43	スクレイパー	45.9	25.8	15.6	17.189	黒曜石	
第17図7	13	22	打製石斧片	33.6	48.6	10.8	20.654	粘板岩	
第17図8	58	4	砥石	43.3	41.6	15.2	31.697	凝灰岩	
第17図9	20N-05	5	石皿			58.2	1150.0	安山岩	
第17図10	20N-46	1	磨石			39.6	366.476	安山岩	
第17図11	15	17	敲石	73.2	59.2	32.8	174.850	硬砂岩	
第17図12	19P	61	磨石			33.8	174.968	安山岩	
第17図13	E4	1	敲石	84.4	50.2	27.0	179.495	珪質頁岩	



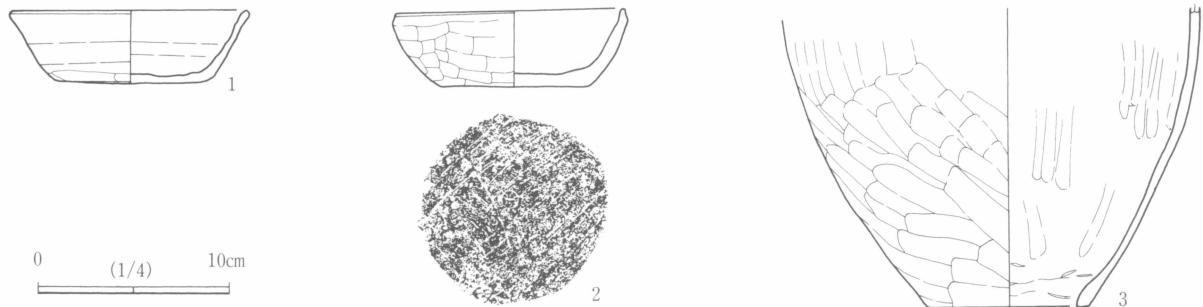
第19図 009号跡住居

### (3) 奈良・平安時代

#### 009号跡竪穴住居 (第19・20図, 図版4・14)

本遺構は、調査区東端の台地縁辺部に位置する。調査区域内に存在する竪穴住居跡はこの1軒のみである。北壁中央にカマドをもち、規模は、東西方向が3.3mであるが、北側壁は、南側壁と平行にならず、結果的に西壁長3.1m、東壁長3.5mとなり、平面形態はカマド側壁が傾く台形を示す。掘り込みの深さは、0.6mほどあるが柱穴や周溝は検出されず、中央ややや南よりのところに浅い小ピットが存在する。

カマドは、もともと構築体に用いた砂や粘土の割合が低かったようである。左袖の遺存状況もあまり良



第20図 009号跡住居出土遺物

くない。

出土した遺物は少ない。1・2は土師器の杯である。1はカマド前部の床面直上から出土している。口径12.2cm、底径7.6cm、器高3.9cmである。ロクロ成形され、外面は、底部全面および体部下端に手持ちヘラケズリが施される。暗褐色の器面に白色微粒子がやや目立つ。2は東側壁際の床面上10cmほどの位置から出土した。口径11.9cm、底径7.7cm、器高4.0cmである。偏平な底部から、体部は内湾して立ち上がり、口縁部が直立する。外面は、底部および体部の全面を手持ちヘラケズリしている。内面は、器面の剥離が著しく調整は不明である。黄褐色の器面に大粒の砂礫が若干量見られる。外面底部中央に直径7mmの円状の線刻が施されている。また、灯明皿として使用されたらしく、口唇部に少量の油煙が付着している。3は土師器の甌である。カマド左袖付近の北壁際床面から出土した。一部に頸部の括れを残すが、上半部はほぼ欠損している。底径8.5cm、現存高15.2cmである。外面は、頸部にヨコナデが見られ、胴部上位は縦位ヘラケズリ、中位以下に斜位ヘラケズリ、底縁付近に横位ヘラケズリを施す。内面は、丁寧なヨコナデ後粗いタテナデが施され、底縁付近に粘土の接合痕を残している。

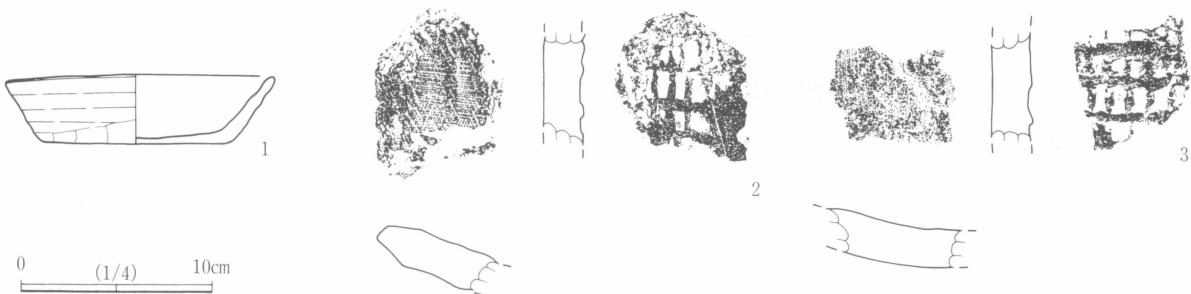
#### グリッド等出土遺物（第21図）

1は土師器の杯であり、19P-11グリッドから出土している。口径14.3cm、底径10.0cm、器高3.6cmである。口径と底径の比が小さく、器径に比べ器高が低い。ロクロ成形され、底部を静止糸切り離し後、周縁部及び体部下端を手持ちヘラケズリしている。内外全面に赤彩を施す。2・3は格子叩き平瓦の破片である。

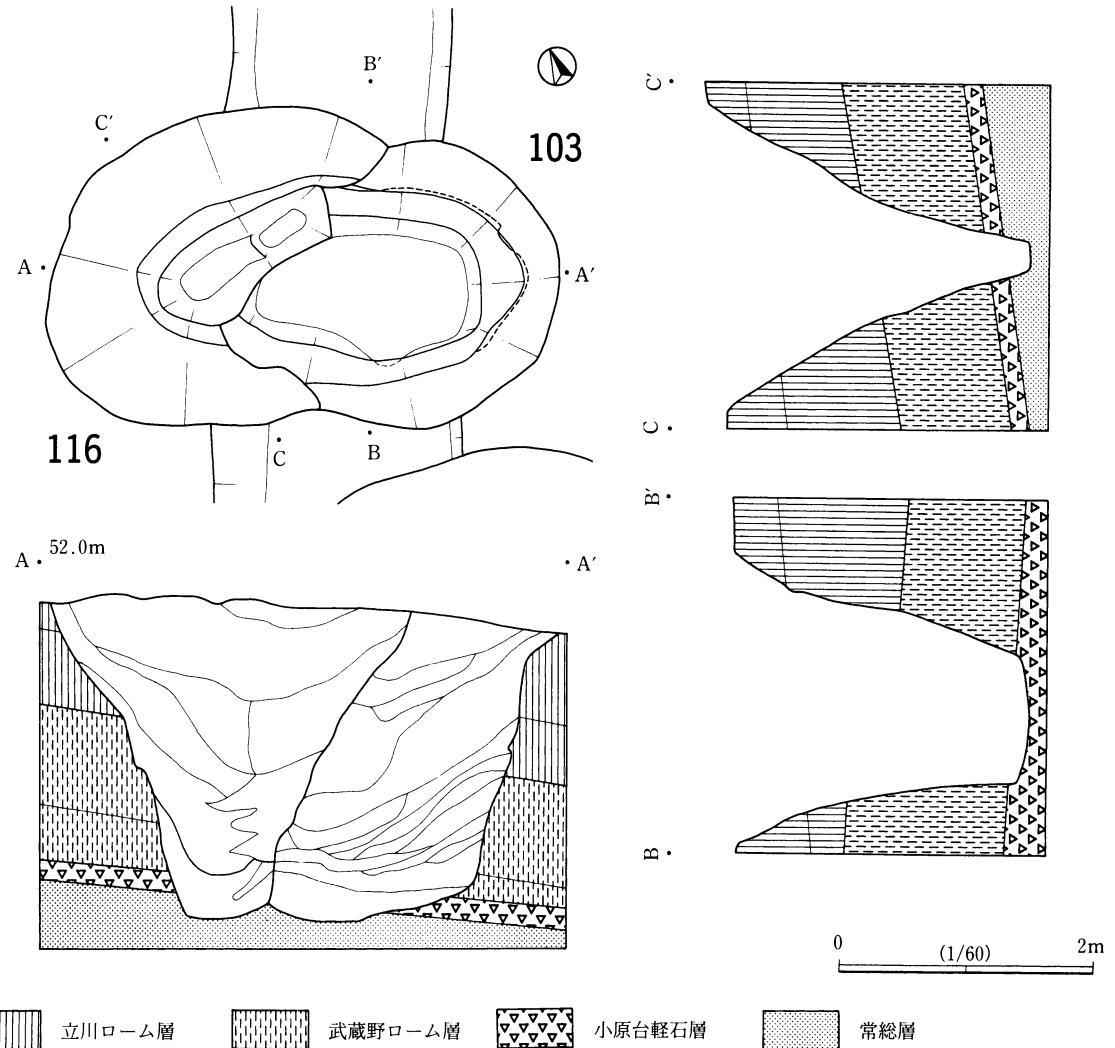
#### (4) その他の時代

##### シシ穴遺構

本遺跡においては、22基のシシ穴が検出されている。それぞれは、南北方向に延びる2列のシシ穴群を



第21図 グリッド等出土遺物



第22図 103号・116号跡シシ穴実測図

形成しており、西側調査区中央付近で交差し、103号跡と116号跡は重複関係を持つ。また、シシ穴は、西側調査区の南北で現地表から確認することができ、北側調査区でも2基のシシ穴と道路状遺構を検出している。

#### 103号跡シシ穴（第22図）

本遺構は、北西部を116号シシ穴によって切られており、長軸長は3.10mと推定され、短軸2.22m、底部の長軸1.66m、短軸0.72mである。深さは最大2.50mを測り、白色粘土層まで達している。平面形態は前述したように116号シシ穴に切られており不明瞭であるが小判形を呈していたものと考えられ、底部の形態は隅丸長方形を呈している。壁面全体が深さ1.00mのあたりで抉られるように崩落しているが、断面形態は長軸、短軸共に逆台形を呈していたものと考えられる。なお、シシ穴の短軸方向両側には062号溝状遺構が検出された。

#### 116号跡シシ穴（第22図）

本遺構は、前述のとおり103号シシ穴と重複関係にあり、覆土の堆積状態から103号シシ穴より新しいことが確認されている。長軸長3.10m、短軸2.42mで橢円形の平面形態を呈していたと思われる。底部は東

側1/3が10cm程低くなっているが長軸1.11m、短軸0.28mの短冊形を呈している。断面形態は、長軸方向がすり鉢形を呈していたと考えられ、短軸方向はY字形を呈している。

#### 溝状遺構および道路状遺構（第9図）

本遺跡西側調査区においては、9条の道路状遺構と2条の溝状遺構が検出された。051号跡溝状遺構は現道に沿って続くもので、時代の新しさを感じる。062号跡溝状遺構は、調査区を南北よりやや東に振れて縦断している。101号シシ穴に代表される7基のシシ穴は、この溝上に列をなして長軸を溝に直交するように掘られており、062号溝とシシ穴列の関係の深さを窺わせる。9条の道路状遺構はすべて、南北から若干西に傾けた方向で検出され、ひとつの道路の時間的な変遷をあらわしているものと考えられる。この道路跡に沿って111号シシ穴を代表とするシシ穴列が続いている。その位置関係から考えて、シシ穴列と道路が同時に存在したか、或いは連続した時期に使用されたものであろう。

また、北側調査区に続く058号溝状遺構内に存在する024号土坑は、覆土の状態から、比較的新しい時代の遺構と思われる。

### 3 まとめ

#### (1) 旧石器時代

本遺跡では3地点3箇所のブロックが検出された。いずれも小規模なブロックであるが、第1ブロックは焼け礫群を伴うものであり、第3ブロックでは炭化粒の集中部分を伴って検出されており、遺構を伴うブロックとして認識される。また、本遺跡では点数は少ないもののIV層～V層、VII層の2時期に生活面が確認された。

ヲフサ野遺跡の旧石器時代のブロックのあり方としては、剥片剥離作業に伴う多量の石核、剥片、碎片等が殆どみられないことから一時的なキャンプサイトとして使用されたことが考えられる。

#### (2) 縄文時代

この時代の遺構は、陥穴のみであり、調査区域全体に広く分布している。すべての陥穴が狭長な平面形状をしており、規模も大差のないものである。遺物は、包含層からのものが主体をなしている。その包含層は、殆どが調査区東半の台地上に集中しており、細分すると13の集中地点に分けられる。中でも早期撲糸文系の土器は、012・013・023号跡遺物集中地点から特に多く出土しており、特徴的である。しかし、当時の人々の生活の中心となった場所ではなかったようである。

#### (3) 奈良・平安時代

本遺跡におけるこの時期の遺構は、009号跡住居のみである。しかし、周辺の遺跡をみると、東に隣接する鹿穴遺跡に3軒、西の岡田山遺跡に6軒の竪穴住居跡が検出されている。鹿穴遺跡では、須恵器の鉄鉢形鉢と灯明皿が、岡田山遺跡では、灯明皿と「前寺 □」の墨書土器が注目され、周辺地区に寺院の存在を想定する根拠とされたが、本遺跡の009号跡住居からも灯明皿として使用された土師器の杯が出土している。また、溝状遺構内等から格子叩き平瓦片が数点出土しており、これらの資料が近隣に寺院の存在する可能性をさらに強めたといえるであろう。

### III 上人塚遺跡

#### 1 遺跡の概要

はじめ、平成5年8月9日から1か月の予定で調査対象面積5,700m<sup>2</sup>の1%の確認調査が行われたが、調査の結果、旧石器時代石器出土地点2ブロック、土坑2基等が検出されたため、千葉県教育委員会の指導により、引き続き上層9%下層3%の確認調査が行われた。その結果、旧石器時代石器出土地点3ブロック、土坑3基が新たに検出された。そこで、関係諸機関と協議の上、本調査対象範囲を上層940m<sup>2</sup>下層980m<sup>2</sup>とした。本調査は、平成6年4月1日から同年7月12日まで実施され、その結果、旧石器時代石器出土地点9ブロック、縄文時代陥穴12基、土坑5基、炭焼窯6基、シシ穴26基等が検出された他、旧石器時代石器類、縄文土器（前・後期）、古墳時代土師器、須恵器が出土した。また、旧石器時代石器出土地点の1ブロックから石器の他に焼土及び炭化物が出土した。

上人塚遺跡は、山武郡成東町川崎字上人塚225ほかに所在する。この地域は九十九里平野に向かっていくつもの中小の河川が流れ、それに伴って小支谷が複雑に形成されており、分断された台地上にはいくつもの遺跡が分布している。作田川と境川もそのひとつで、平野に流れ込んだところで合流して太平洋に注いでいる。その上流の、作田川谷と境川谷にはさまれて形成された椎崎台のやや北寄り、標高約45mから47mの台地上に位置しているのが本遺跡である。上人塚の名のとおり、調査区の西側に隣接して塚が存在する。

#### 2 検出した遺構と遺物

##### (1) 旧石器時代

上人塚遺跡での旧石器時代の調査は、5,700m<sup>2</sup>の調査対象面積のうち、980m<sup>2</sup>の本調査を実施した。旧石器時代の遺物等は、調査区のほぼ中央付近の2地点で併せて12箇所のブロックが、検出された。12箇所のブロックは、以下に説明するとおり第1ブロック～第12ブロックと呼称する。第1ブロック～第11ブロックは、出土層位がIX層（第2黒色帯下部）に位置する遺物と考えられる。また、第2ブロックと同じ範囲で同時期のものと思われる焼土ブロック、炭化材、炭化粒集中地点が検出されている。第12ブロックについては、出土遺物の共通性がないためVI層より新しい時期のものである可能性が高い。他に出土地点の不明なIII層中の遺物と考えられる石核が、1点検出されている。

##### 第1文化層

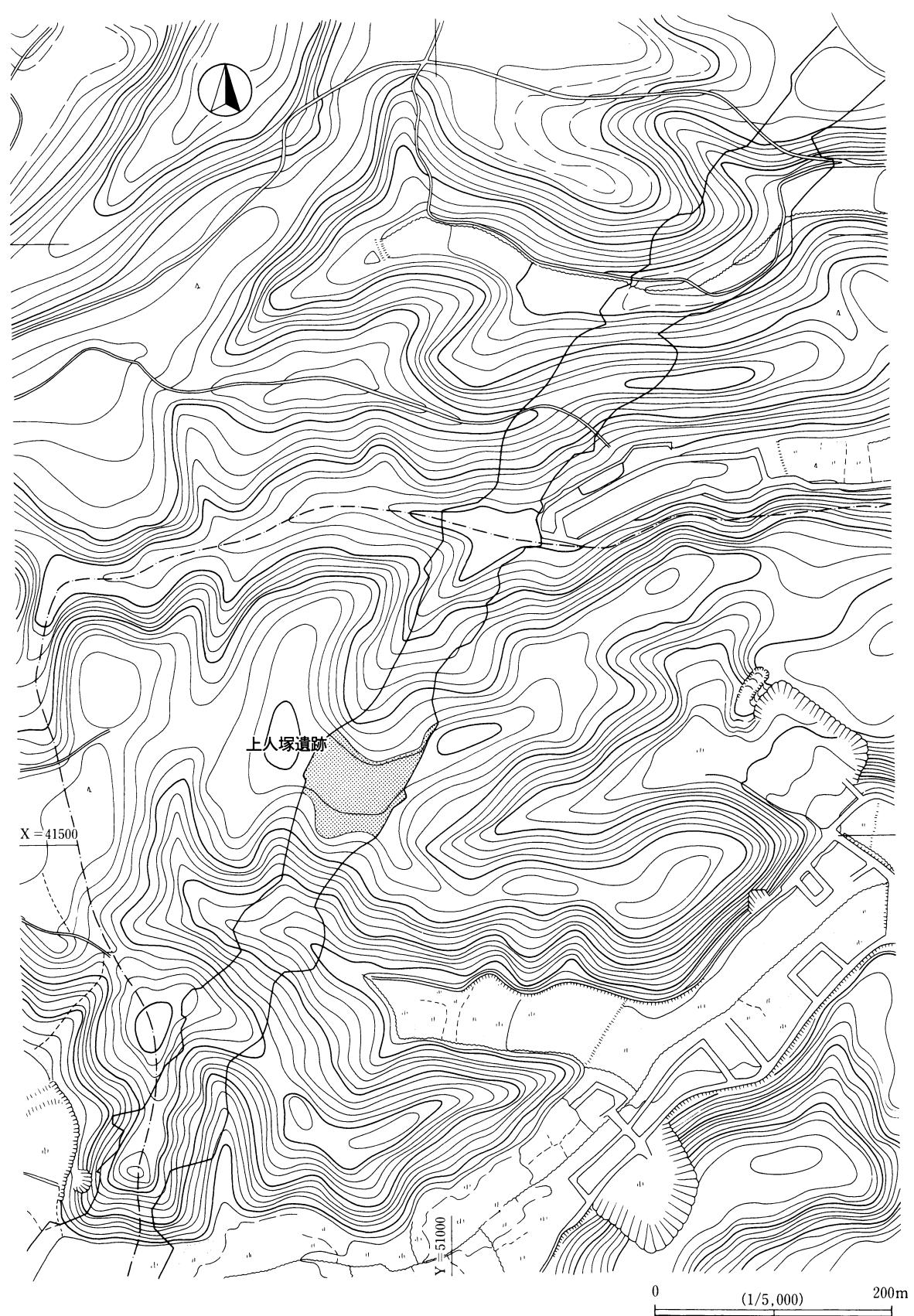
###### 第1ブロック（第26・27図1～4、第3表、図版15）

**分布状況** 6G-32グリットの北側1mを中心にして南北2m、東西1mの範囲に比較的密集した状態で分布する。なお、南側に隣接して第2ブロックがある。

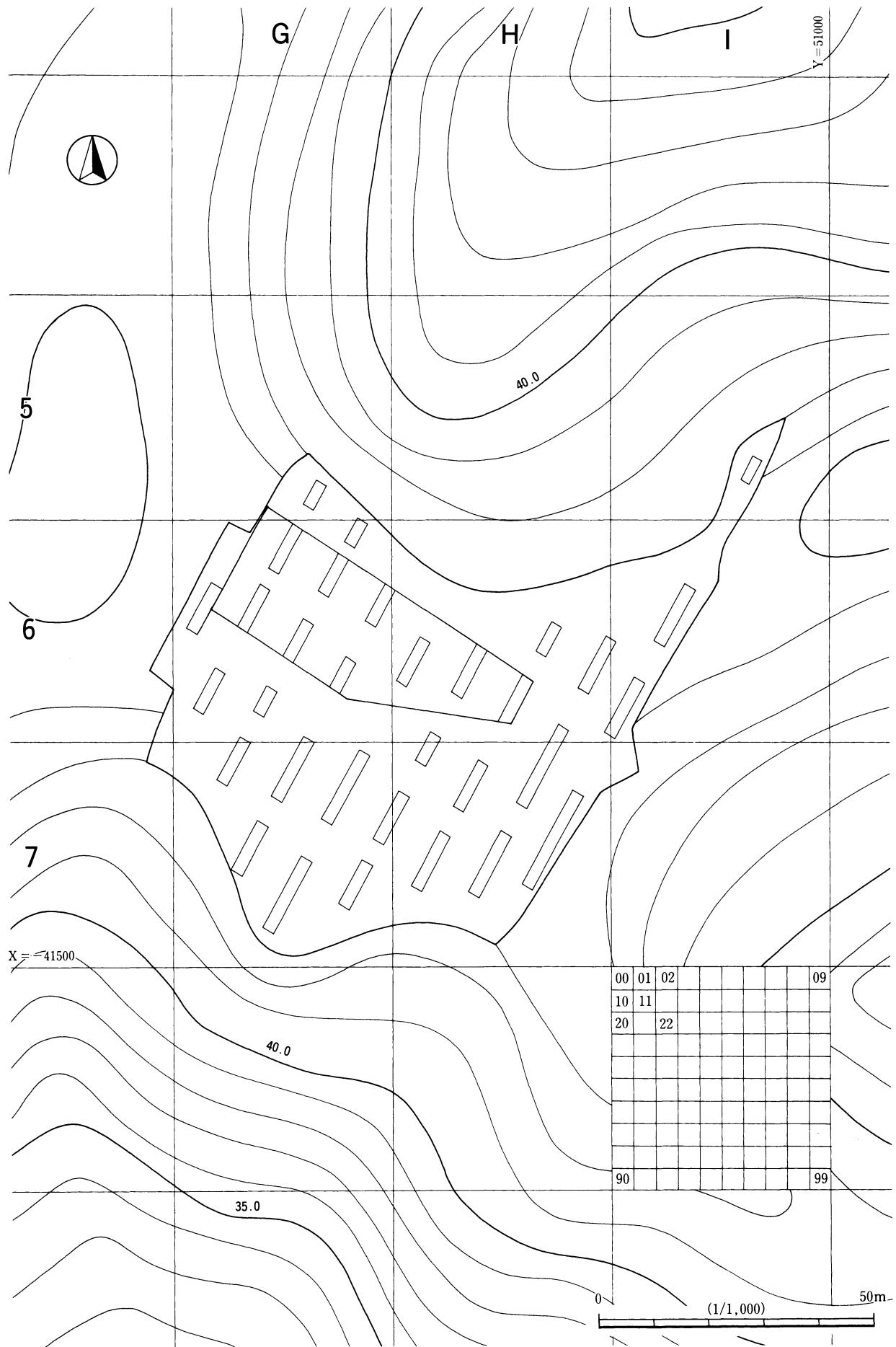
遺物総数は、13点である。土層断面の投影では、VI層～IX層までの範囲で分布している状況が認められる。これらの遺物の主体は、IX層にあると思われる。

**母岩別資料** 安山岩a（密度が高く黒みの強いもの）12点と安山岩b（風化が著しくトロトロのもの）1点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

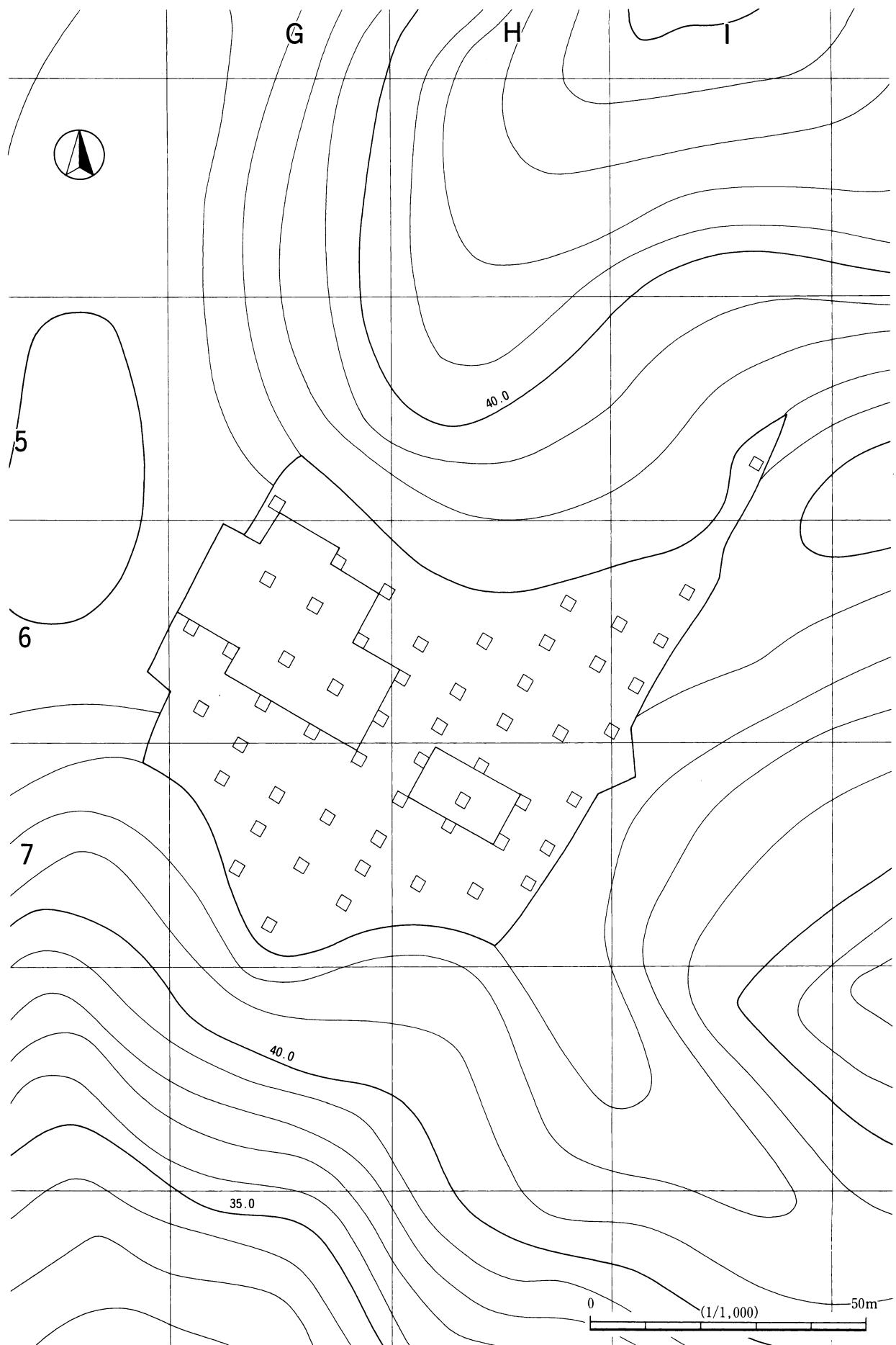
**出土遺物** まとまりのある小規模なブロックであり、石核1点、リタッチ・ド・フレイク2点、剥片5



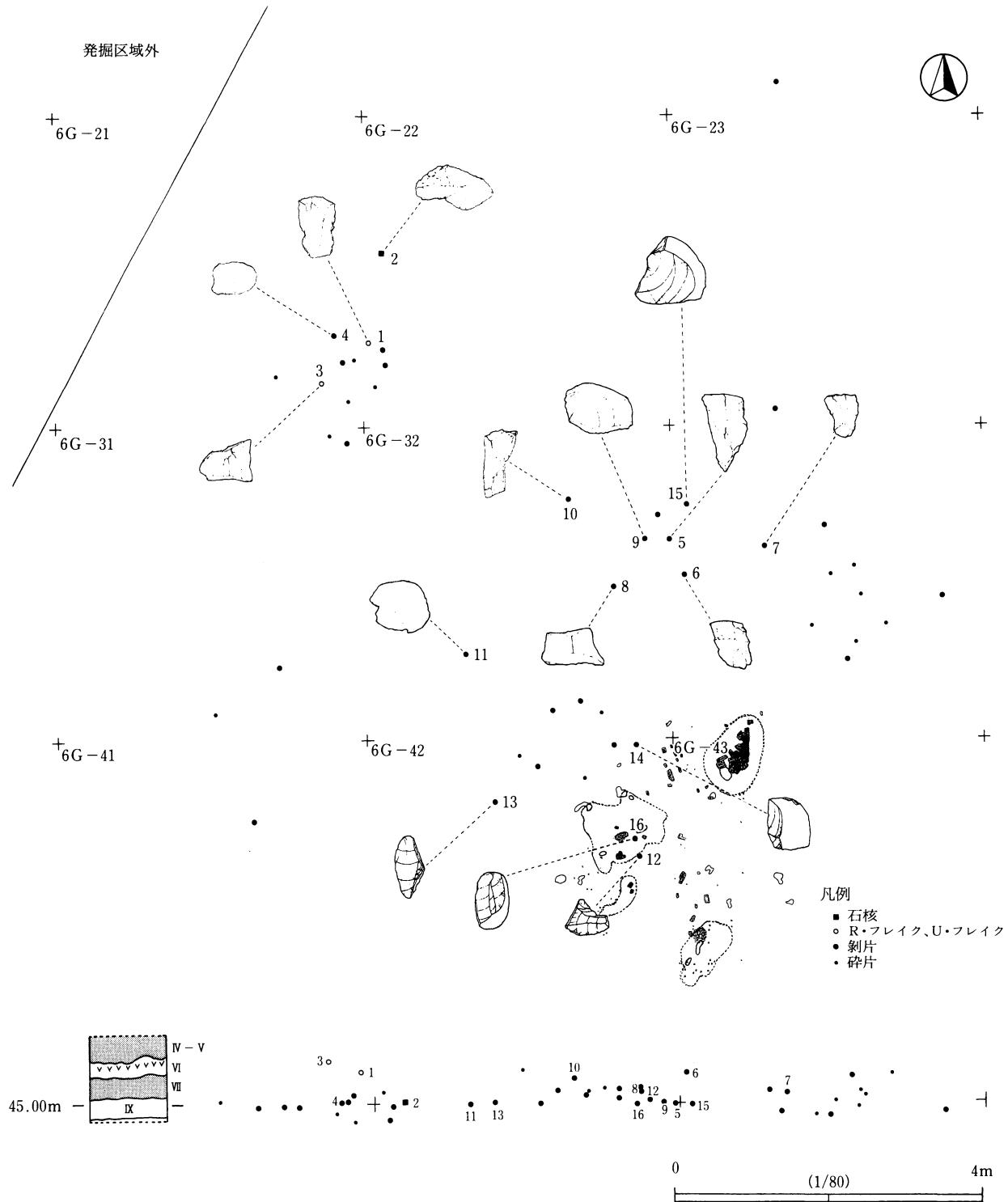
第23図 上人塚遺跡周辺地形図



第24図 上層調査状況



第25図 下層調査状況

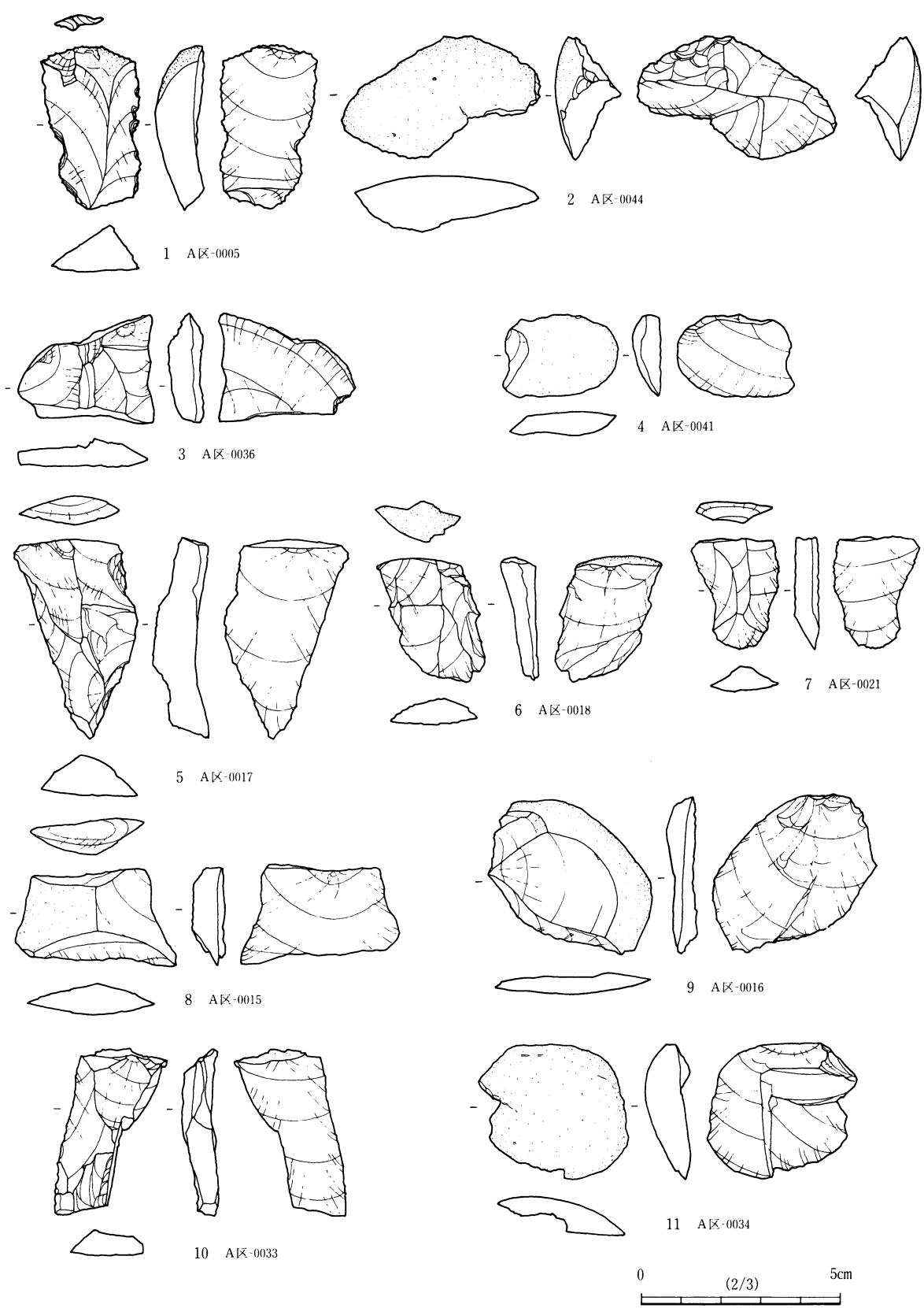


第26図 A区第1～3ブロック出土状況

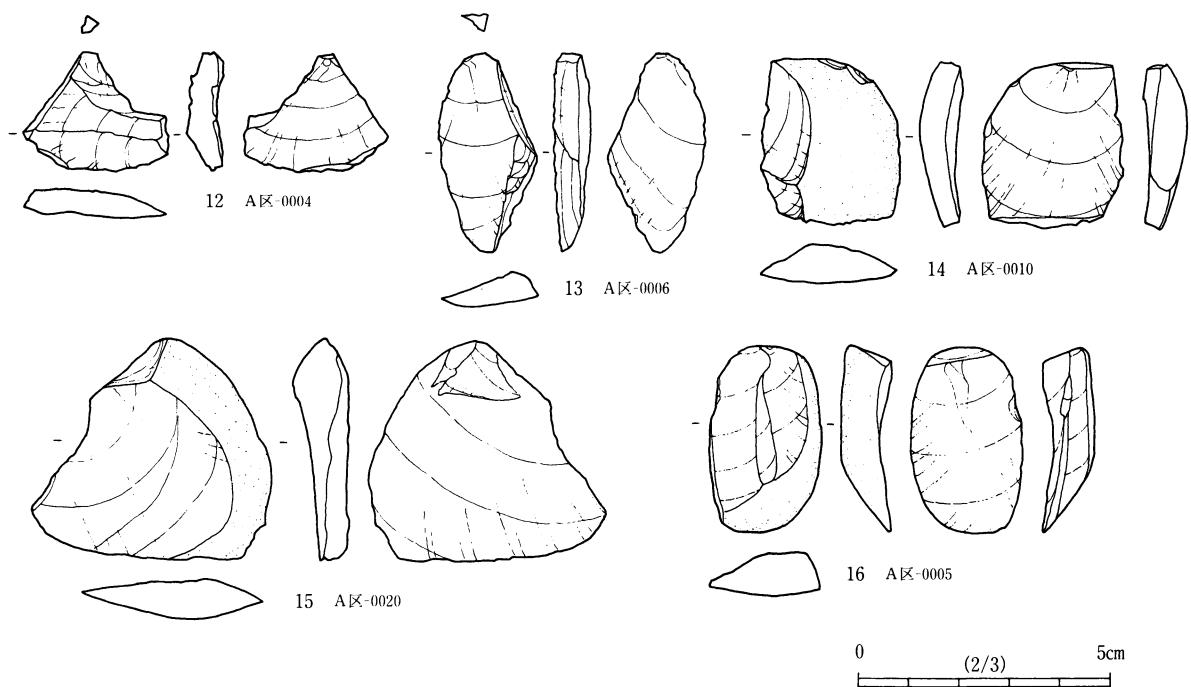
点、碎片5点で構成される。安山岩aの石材が主体のブロックである。

1は安山岩a製のリタッチ・ド・フレイクである。長さほぼ4cmの小形の石刃の両側辺にやや不規則の大きな剥離がみられる。頭部には礫皮面を残す。端部は剥片剥離した際に折れたものとみられる。

2は安山岩a製の石核である。背面は礫皮面で覆われている。主剥離面は4面以上の剥離面で構成される。ほぼ最終段階のものと思われるが、当該ブロック及び他のブロックの遺物と接合関係は、全く認められない。



第27図 A区第1～3ブロック出土遺物(1)



第28図 A区第1～3ブロック出土遺物(2)

3は安山岩a製の不整剝片を使用したリタッチ・ド・フレイクである。背面は3面以上の同方向からの剝離面で構成される。主剝離面は、それとは逆方向の剝離が施されている。また、片側の縁辺部分には大きな剝離で調整が、施されている。

4は安山岩b製の剥片で背面に一部剝離面は窺われるもののほぼ礫皮面で覆われる。打面調整された面が頭部にみられる。

#### 第2ブロック (第26～28図5～16、第3表、図版15・16)

**分布状況** 6G-33グリッドから6G-43グリッドを中心に東西10m、南北6mの範囲で橢円状に緩やかに分布する。なお、北側4mの位置に第3ブロックが存在する。また、北東と南西方向にやや密度の濃い分布範囲が認められる。また、ブロックの南部分に濃密な焼土と炭化材、炭化物、白色粘土ブロックの検出範囲がみられる。

遺物総数は32点である。土層断面の投影ではVI層～IX層までの範囲で分布している。第1ブロック同様に遺物の主体はIX層にあると思われる。

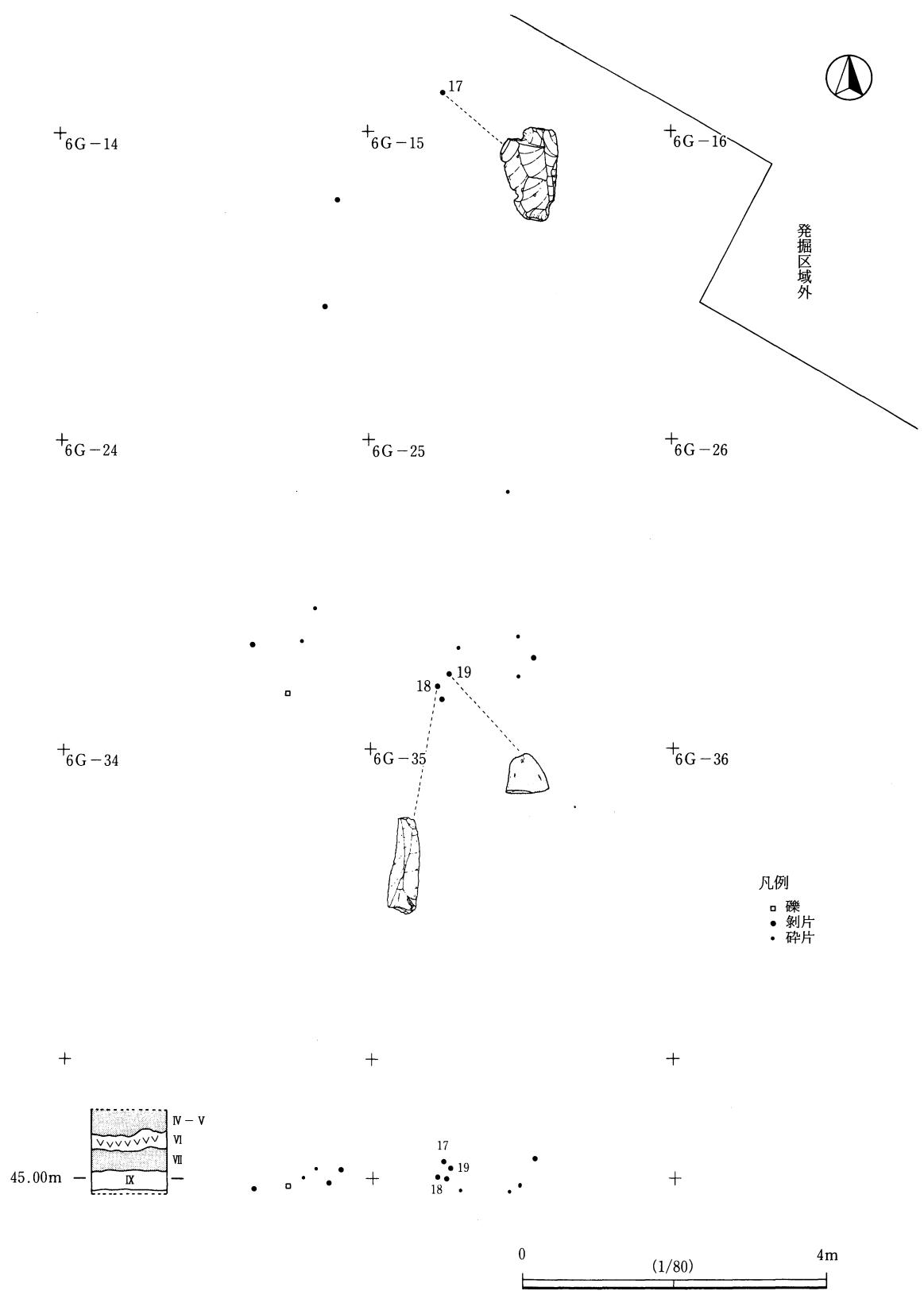
**母岩別資料** 安山岩a (密度が高く黒みの強いもの) 29点と安山岩b (風化が著しくトロトロのもの) 3点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

**出土遺物** 全体がやや散漫に広がるブロックで定型的な石器はみられず、剥片23点、碎片9点で構成される。第1ブロック同様に安山岩aの石材が主体のブロックである。

5～14は安山岩a製の剥片である。主剝離面と異なる複数の剝離方向を持つ背面構成のものや礫皮面を残す剥片が多い。また、比較的小さな石核から剥がされたものが多いのも特徴である。

15～16は安山岩b製の剥片である。両者とも礫皮面を残した背面を持つ。特に16は、刃器状の縁辺をもつのが特徴である。

#### 第3ブロック (第26・28図、第3表、図版16)

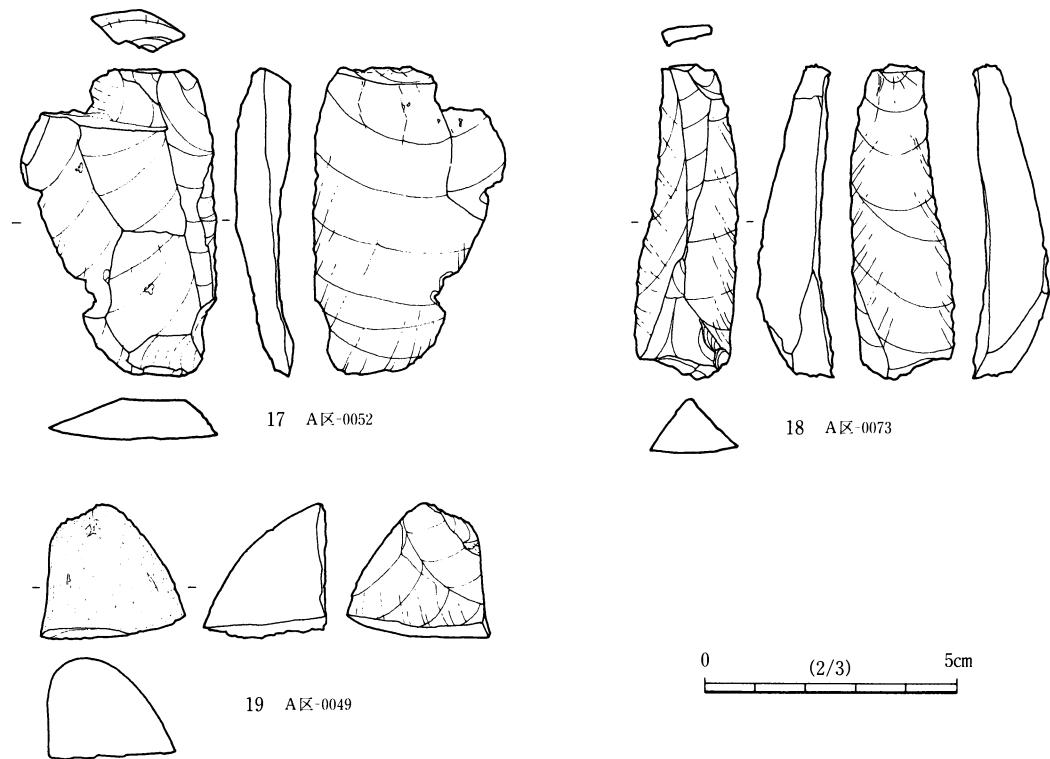


第29図 A区第4・5ブロック出土状況

分布状況 6 G-23グリッドのほぼ東2mに位置する。

遺物総数は1点である。

母岩別資料 安山岩a（密度が高く黒みの強いもの）1点のみで構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。



第30図 A区第4・5ブロック出土遺物

**出土遺物** 安山岩a製の剥片1点のみで構成されるブロックである。

**第4ブロック** (第29・30図17、第3表、図版16)

**分布状況** 6G-15グリッドを中心に南2m、北東1m程の範囲で散漫に広がっている。なお、南7mの位置に第5ブロックが広がる。

遺物総数は3点である。土層断面の投影では調査区の北側に位置するためVI層下部に位置するが、他のブロックと同様IX層の遺物と思われる。

**母岩別資料** 安山岩a（密度が高く黒みの強いもの）2点と安山岩b（風化が著しくトロトロのもの）1点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

**出土遺物** 3点のみで構成される小規模なブロックである。剥片3点で構成される。

17は安山岩b製の縦長の比較的大きな剥片で主剥離面と同方向の複数の剥離面を持つ背面構成である。

**第5ブロック** (第29・30図18・19、第3表、図版16)

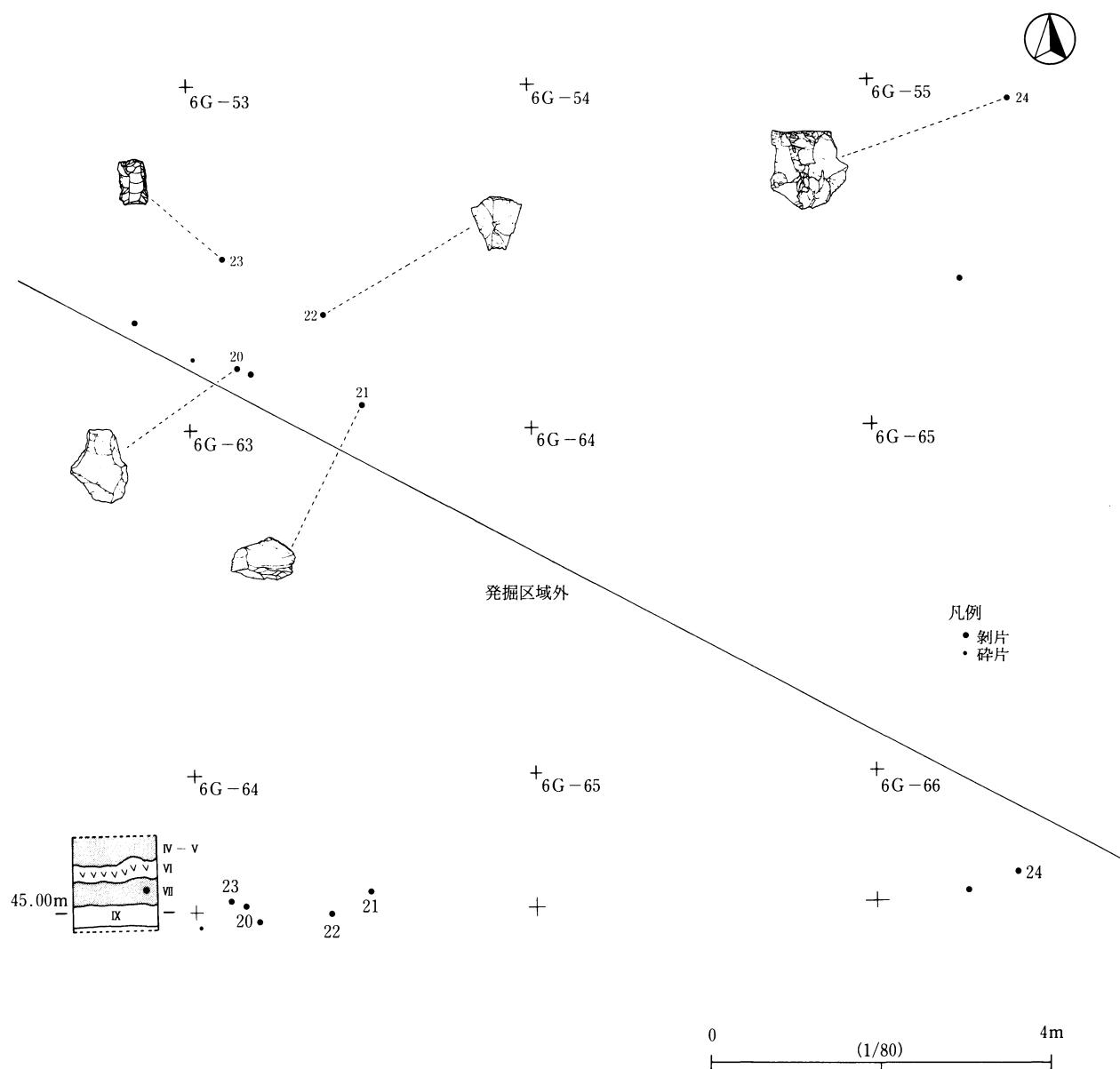
**分布状況** 6G-35グリッドの北側約1mを中心に南北2m、東西4mで橢円形の範囲にやや散漫に広がる。

遺物総数は12点である。土層断面の投影ではVII層～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と思われる。

**母岩別資料** 安山岩a（密度が高く黒みの強いもの）10点、珪質頁岩（焦げ茶色でガラス質のもの）1点、礫（ホルンフェルス）1点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

**出土遺物** 剥片5点、碎片6点、礫1点で構成される。

18は安山岩a製の刃器状を呈する縦長の剥片である。使用痕等の刃こぼれは観察できなかった。背部は



第31図 A区第6・7ブロック出土状況

3面以上の同方向からの剥離と主剥離面には同方向の剥離があり、大形の石核から剥離されたことが解る。

19は安山岩a製の不整な剥片で背面は礫皮面で覆われている。18とは違って小さな礫を石核としている。

#### 第6ブロック（第31・32図20～23、第3表、図版17）

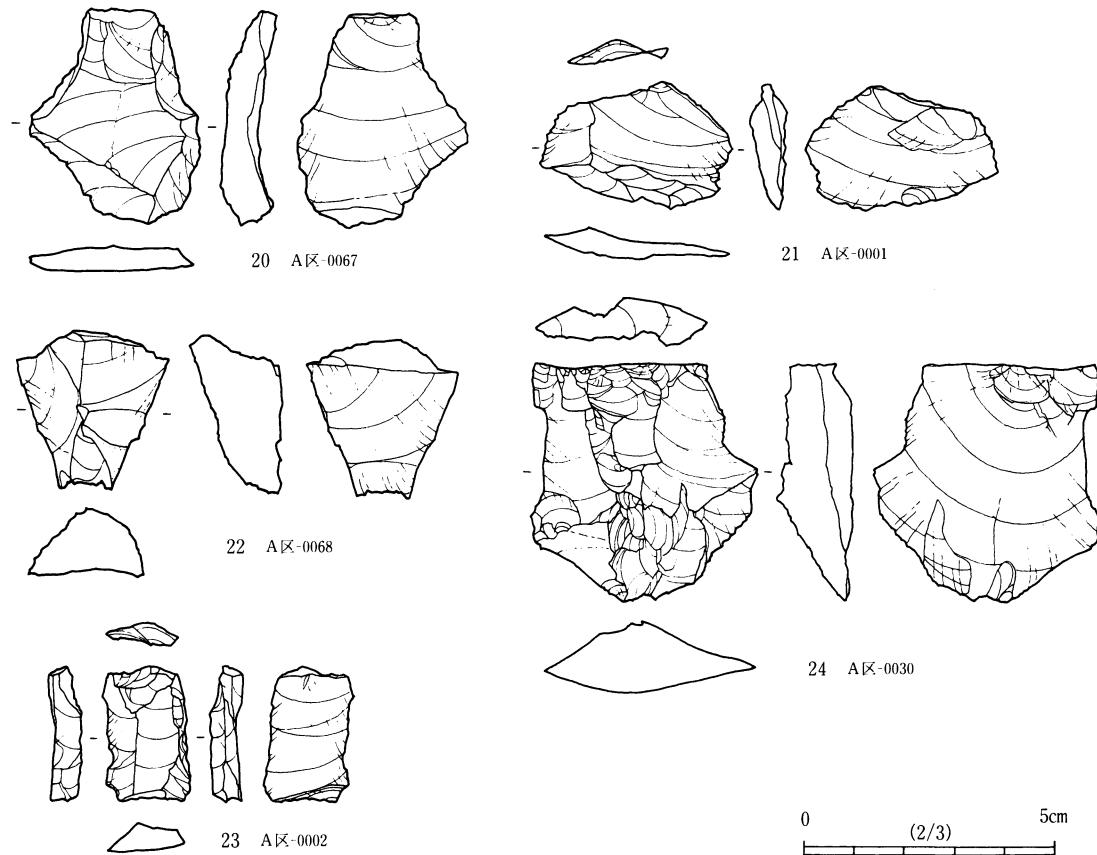
**分布状況** 6G-63グリッドの北側1mの位置で径3m程の範囲に緩やかに広がっている。

遺物総数は7点である。土層断面の投影ではVII層～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と思われる。

**母岩別資料** 安山岩a（密度が高く黒みの強いもの）6点、メノウ（黄色味が強くガラス質のもの）1点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

**出土遺物** 剥片6点、碎片1点で構成される。

20～22は安山岩a製の剥片である。20は比較的薄めの縦長剥片である。22はやや不整な剥片で横位の剥



第32図 A区第6・7ブロック出土遺物

離を背部に持つものである。

23はメノウ製の刃器状の剝片である。端部は剥離時に折れたものと思われる。使用痕等の刃こぼれは観察されない。

#### 第7ブロック（第31・32図24、第3表、図版17）

**分布状況** 6 G-55グリッドの南西2m程の位置に2点分布している。

遺物総数は2点である。土層断面の投影ではVII層～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と思われる。

**母岩別資料** 珪質頁岩（焦げ茶色でガラス質のもの）1点、珪質凝灰岩（乳白色でややざらざら感のあるもの）1点で構成される。ブロック内外での接合関係は認められない。

**出土遺物** 剥片2点で構成される。

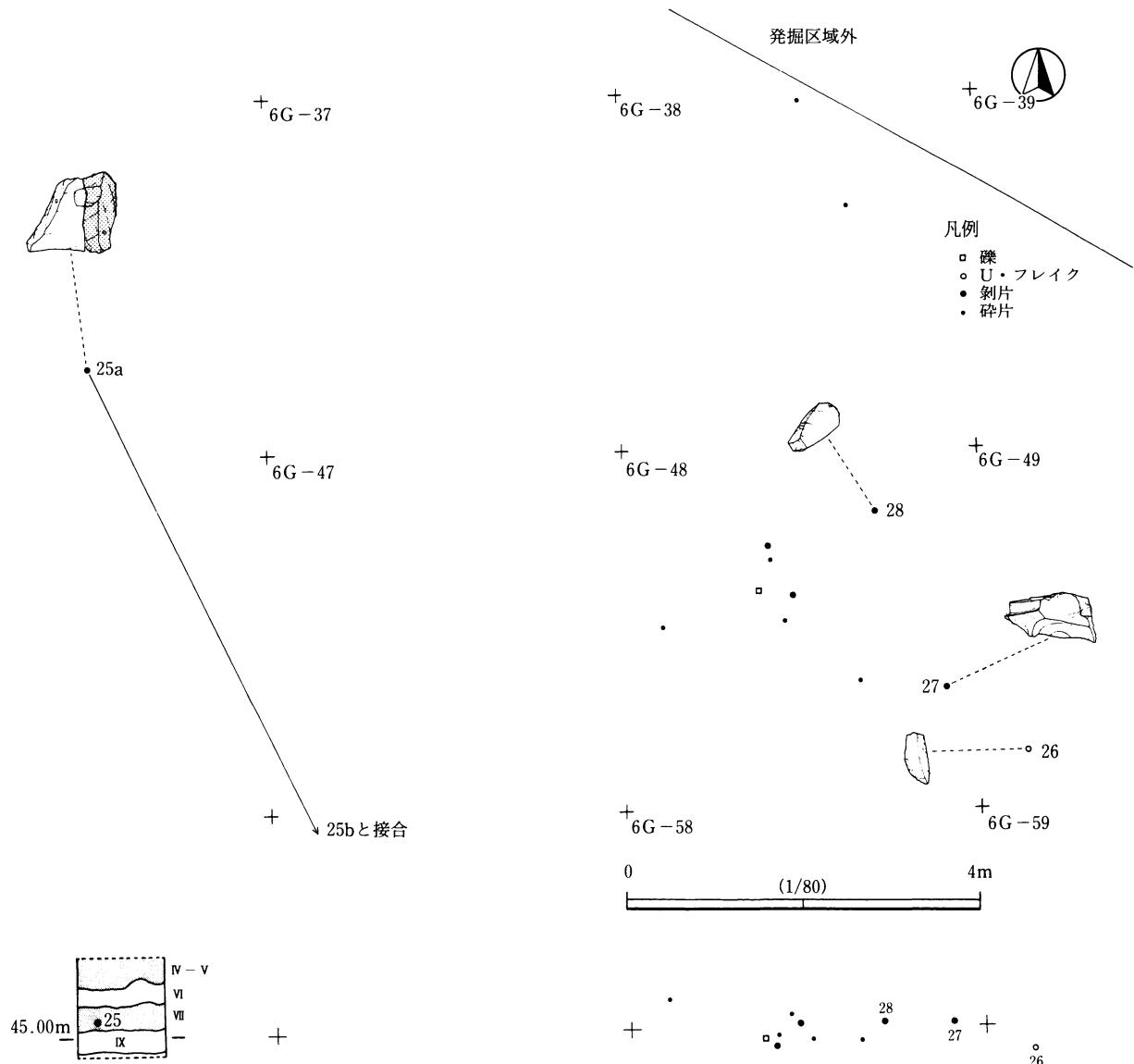
24は珪質頁岩製の剝片で背部に主剥離面と同方向の複数の剥離面を持つ。両側縁は鋭く刃器として十分使用に耐えると思われるが、著しい刃こぼれ等は観察されない。

#### 第8ブロック（第33・34図25a、第4表、図版17）

**分布状況** 6 G-46グリッドの北東1m程のところに位置する。

遺物総数は1点で構成される。土層断面の投影ではVII層にあたるが、第11ブロックの剝片と接合するためIX層の遺物と考えられる。

**母岩別資料** 珪質凝灰岩（乳白色でややざらざら感のあるもの）1点で構成される。第11ブロックから



第33図 B区第8・9ブロック出土状況

出土した25bと接合して1個の大きな剥片となる。

**出土遺物 剥片 (25a)** 1点で構成される。

25は珪質凝灰岩製の横広の剥片で縁辺部分は比較的鋭いが使用痕等は観察されない。分割されて再利用された可能性がある。

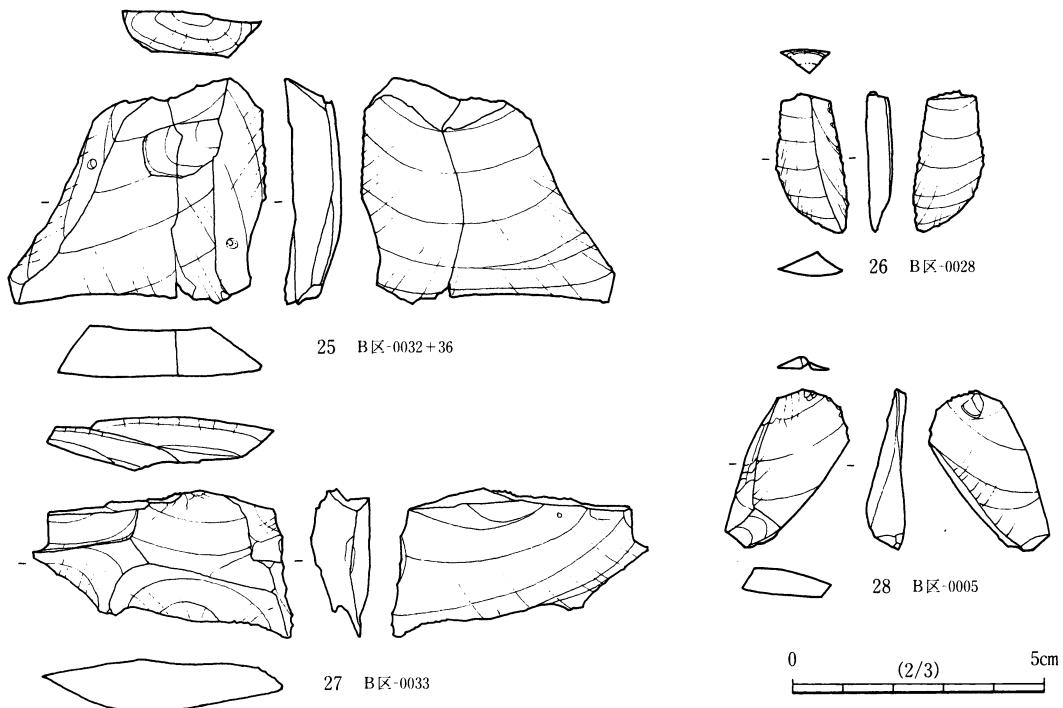
**第9ブロック (第33・34図26~28、第4表、図版17・18)**

**分布状況** 6G-48グリッドから南2m、東2mを中心に南にやや密に北に散漫に広がる。

遺物総数は11点で構成される。土層断面の投影ではVI層下部～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と考えられる。

**母岩別資料** 硅質頁岩（焦げ茶色でガラス質のもの）8点、硅質凝灰岩（乳白色でややざらざら感のあるもの）2点、磚（硅質頁岩）1点で構成される。ブロック内外での接合は認められない。

**出土遺物** 使用痕のある剥片1点、剥片4点、碎片5点、磚1点で構成される。



第34図 B区第8・9ブロック出土遺物

26は珪質頁岩製の小さな刃器状の剝片で縁辺部の両側縁に細かな刃こぼれが多数観察できる。

27は珪質凝灰岩製の横広剝片で背面には多方位の剝離面をもつ。打面は剝離時に折れたと思われる。

28は珪質頁岩製の縦長の小剝片である。端部は剝離時点の逆方向の小剝離痕がみられる。

#### 第10ブロック（第35・36図29～34、38、39、第4表、図版18・19）

**分布状況** 6G-57から南2m、東2mに位置し径3m程度の範囲に比較的散漫に広がる。

遺物総数は17点で構成される。土層断面の投影ではVI層下部～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と考えられる。

**母岩別資料** 硅質凝灰岩（乳白色でややざらざら感のあるもの）12点、硅質頁岩（焦げ茶色でガラス質のもの）3点、砂岩（敲石）1点、凝灰岩（台石）1点で構成される。32のスクレイパーが第11ブロックの31のスクレイパーの片割れと接合する。

**出土遺物** スクレイパー1点（片割れ）、使用痕のある剝片1点、敲石1点、台石1点、剝片5点、碎片8点で構成される。

29は珪質凝灰岩製のやや肉厚の縦長の剝片である。背部にはやや不規則な細かな剝離痕がみられる。

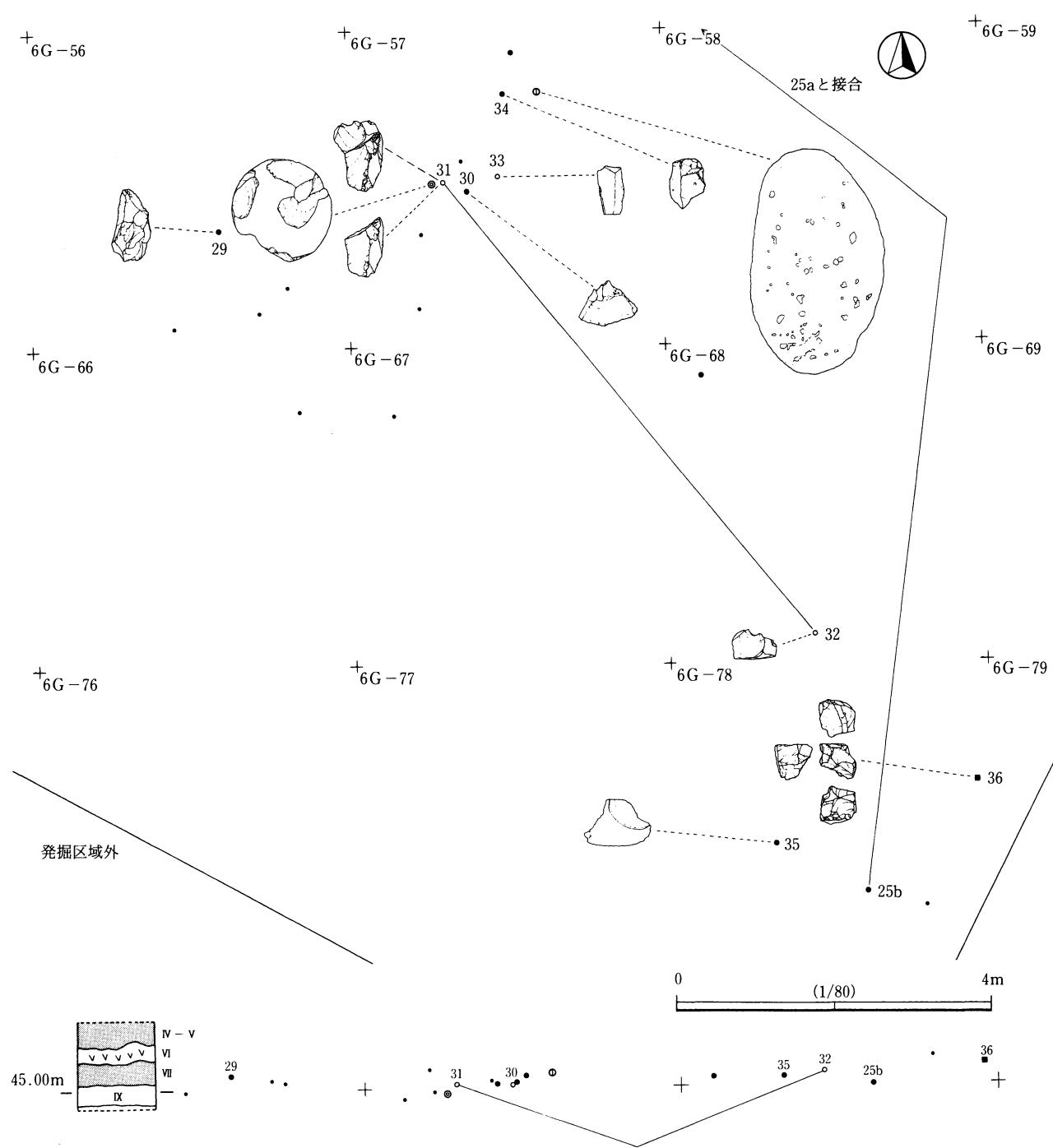
30は珪質凝灰岩製の横広な剝片で三角形を呈する。

32は31と接合して元々1つの石器となるスクレイパーである。硅質頁岩製である。分割されてから使用されたと考えられる。

33は珪質凝灰岩製の使用痕のある剝片である。刃器状の剝片で背部は主剝離面と逆方向の剝離が2条みられる。両側縁は鋭く細かな使用痕が多数観察される。

34は珪質凝灰岩製の剝片である。背面には主剝離面と同方向の剝離が複数みられる。縁辺部は鋭く刃器として使用も可能である。

38は凝灰岩製の台石である。



第35図 B区第10・11ブロック出土状況

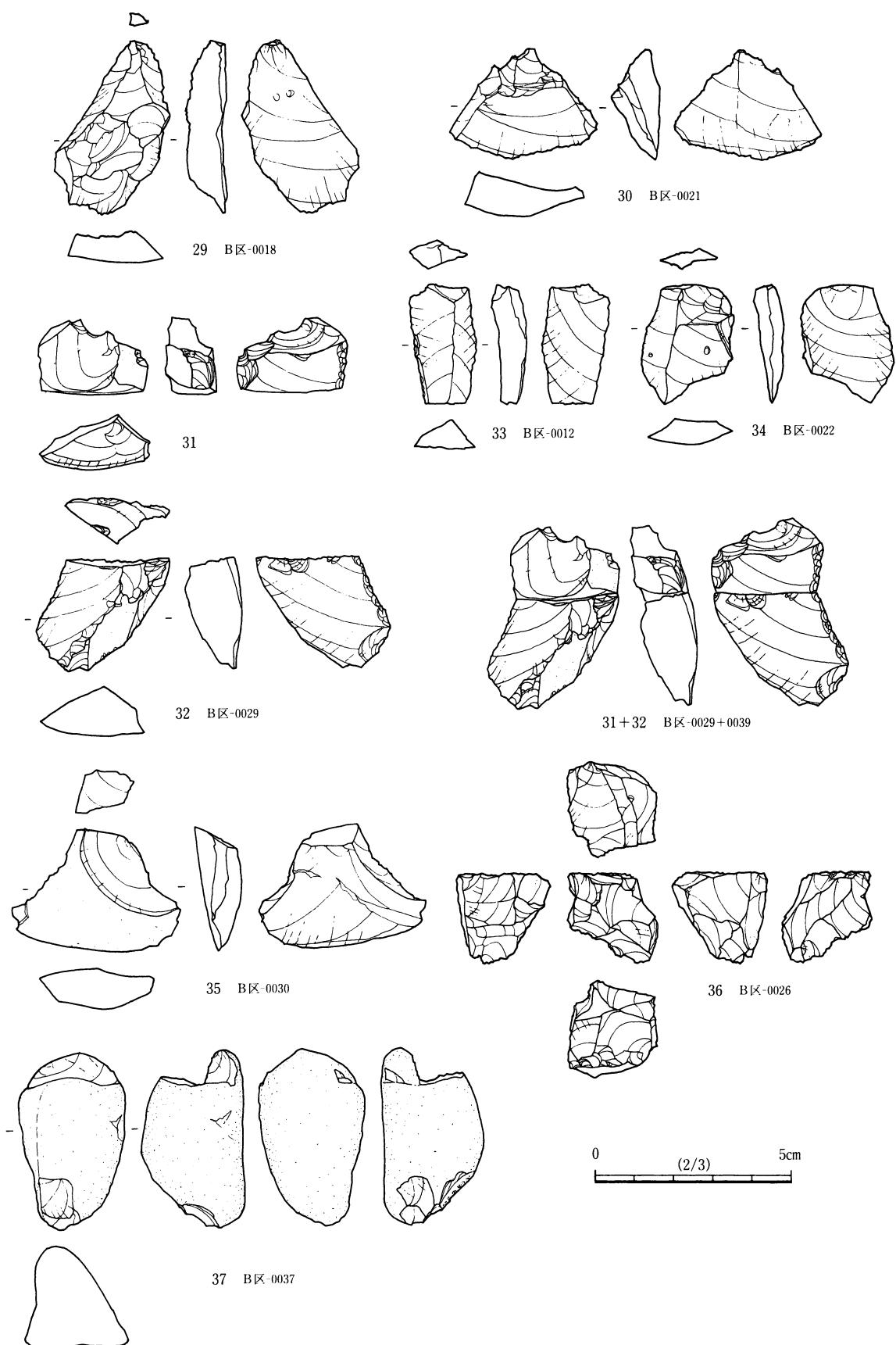
39は砂岩製の敲石である。円礫に多方向からの打痕と打撃による剝離がみられる。

#### 第11ブロック (第35・36図、第4表、図版18・19)

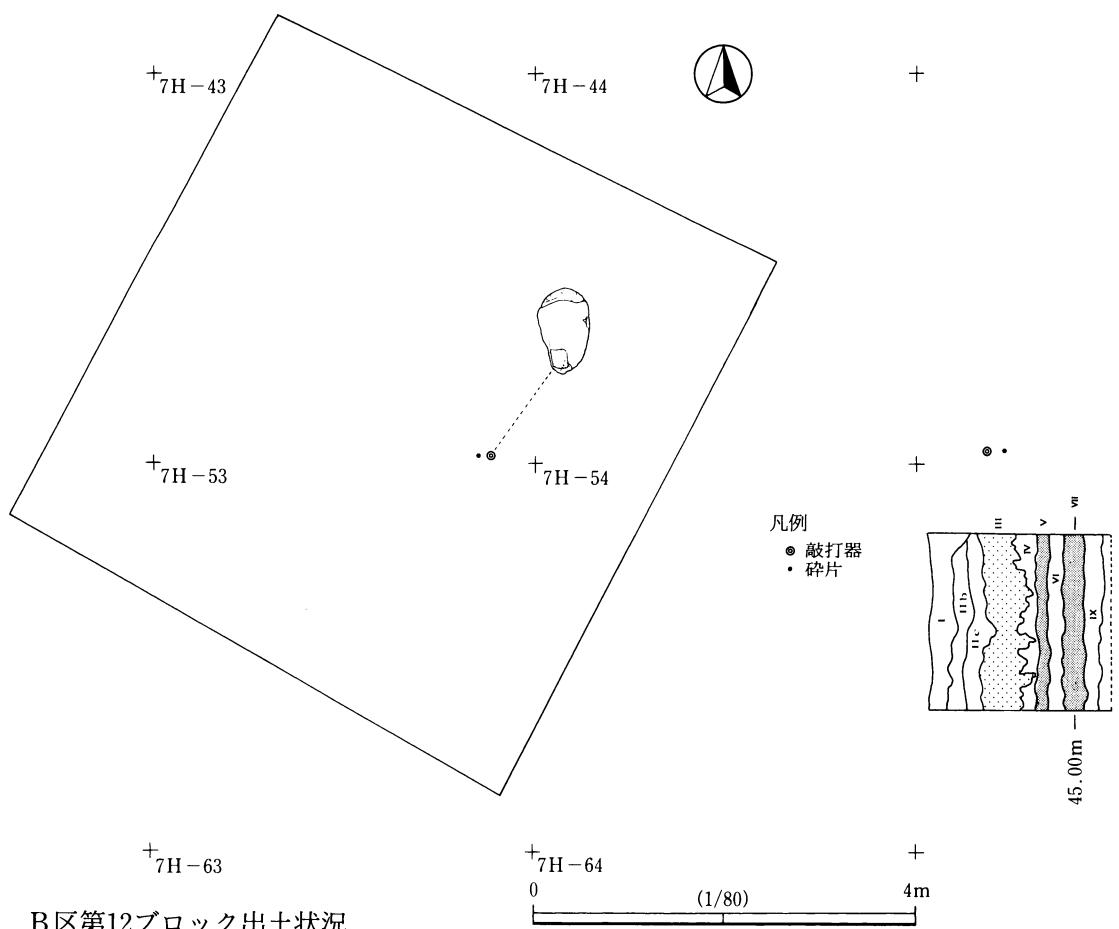
**分布状況** 6 G-78グリッドより南3m、東3mを中心に径2mの範囲に緩やかに分布している。

遺物総数は5点で構成される。土層断面の投影ではVI層下部～IX層にかけて分布しているが、他のブロック同様IX層の遺物と考えられる。

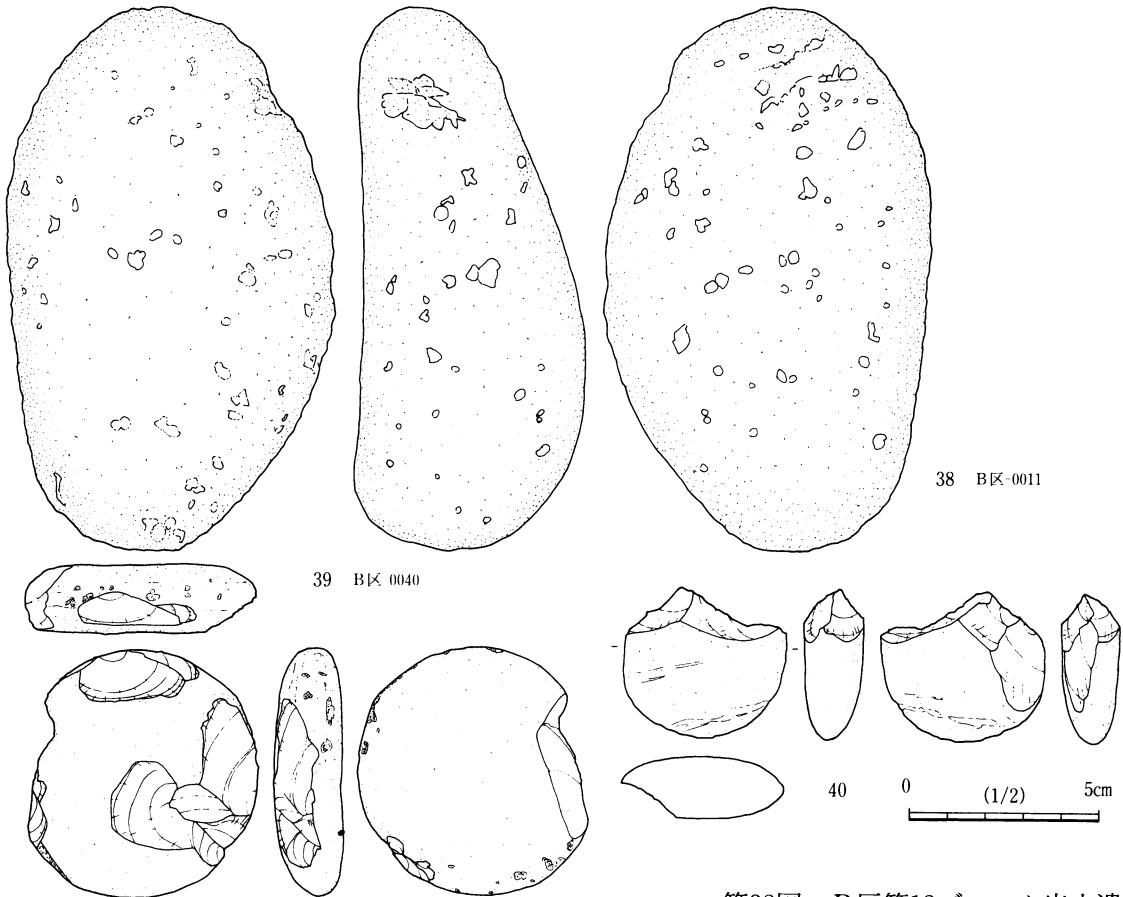
**母岩別資料** 珪質凝灰岩 (乳白色でややざらざら感のあるもの) 2点、珪質頁岩 (焦げ茶色でガラス質



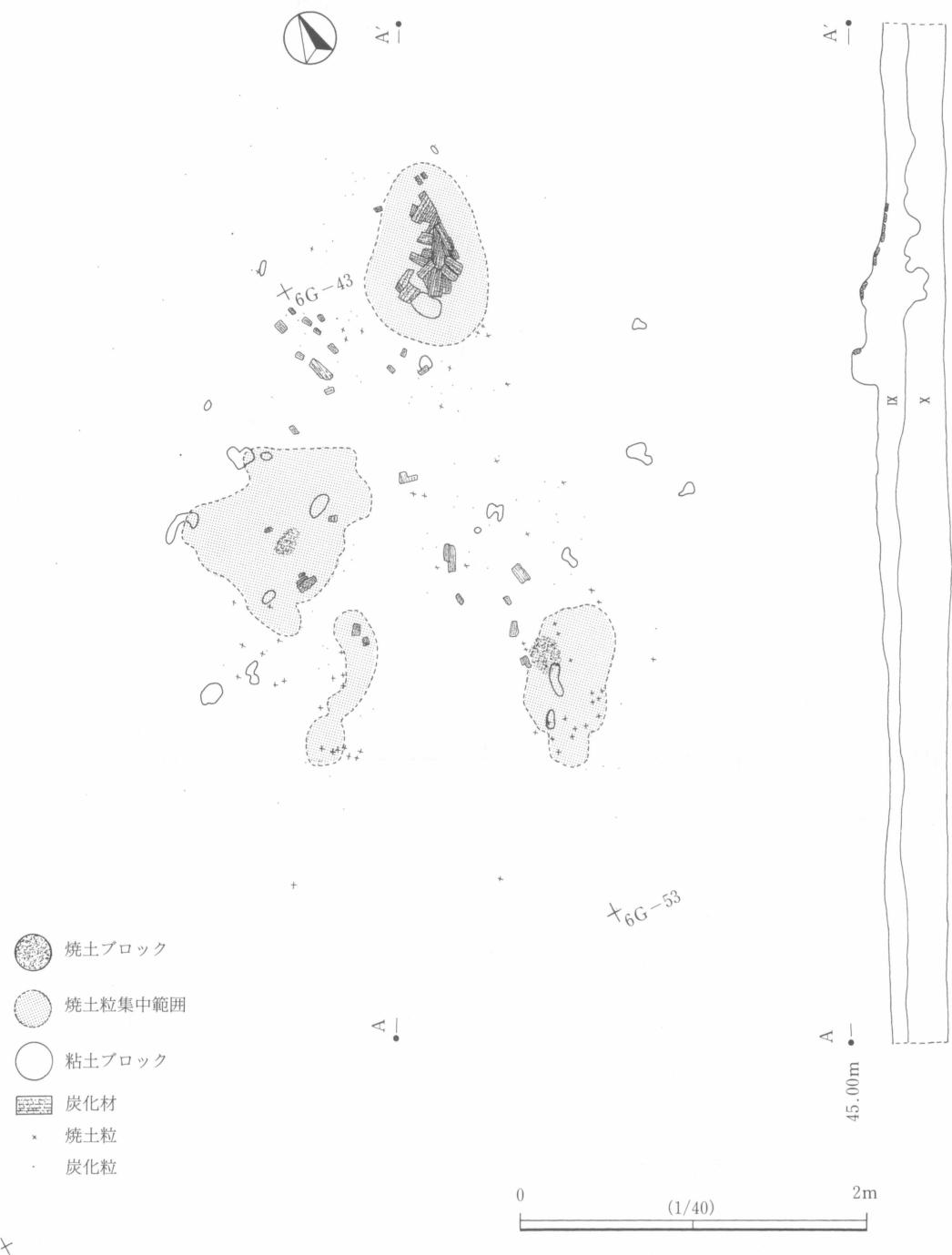
第36図 B区第10~12ブロック出土遺物



第37図 B区第12ブロック出土状況



第38図 B区第12ブロック出土遺物他



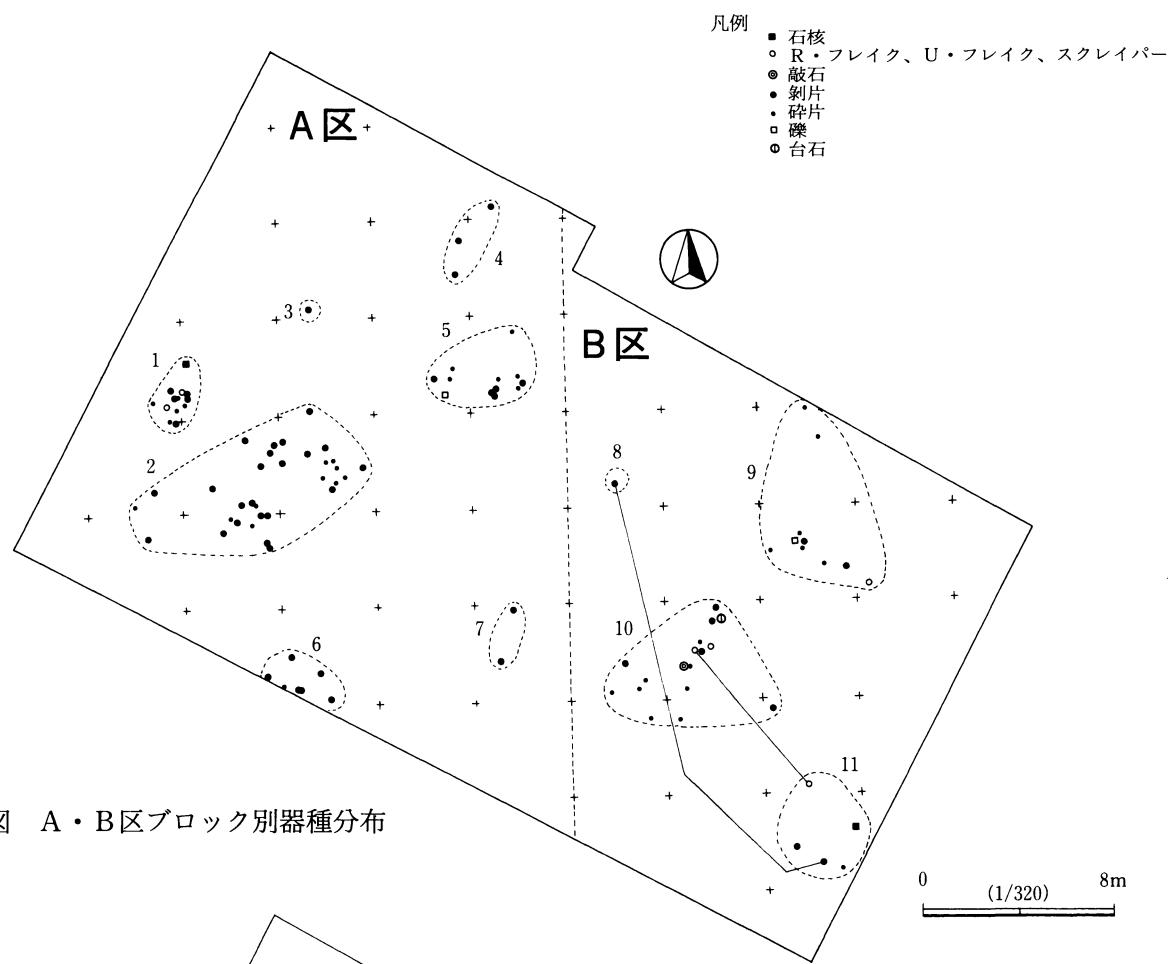
第39図 焼土ブロック・炭化材等出土状況

のもの) 2点、チャート(青みがあり縞模様の多いガラス質のもの) 1点で構成される。25bの剝片が第8ブロックの25aと接合する。32のスクレイパーが第10ブロックの31のスクレイパーと接合する。

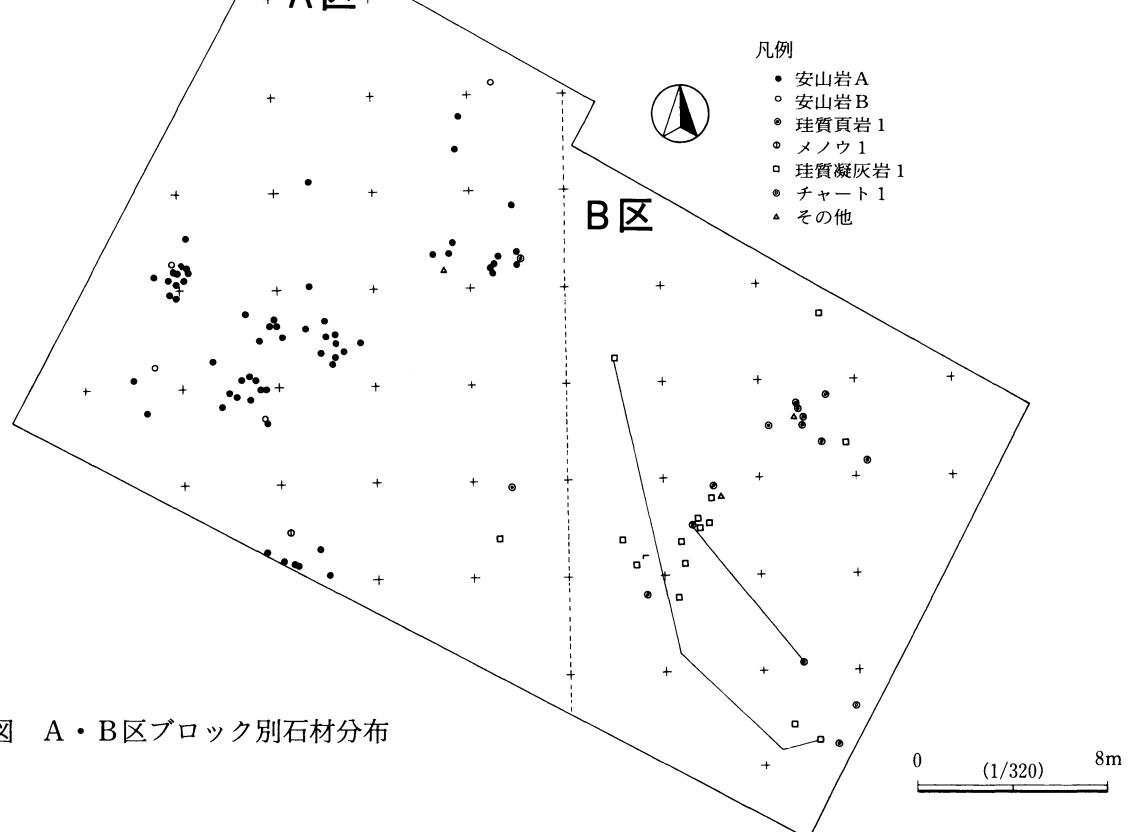
**出土遺物** スクレイパー1点(片割れ)、石核1点、剝片(片割れ)1点、剝片1点、碎片1点で構成される。

25bは珪質凝灰岩製の剝片で第8ブロックの25aの剝片と接合し1つの大きな剝片になる。ただ分割して使用した跡は明白ではない。

32は珪質頁岩製のスクレイパーで第10ブロックの31と大きなスクレイパーとなるが分割後も使用したと



第40図 A・B区ブロック別器種分布



第41図 A・B区ブロック別石材分布



第4表 石器観察表 B区他

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	最大長mm	最大巾mm	最大厚mm	重量g	打角	打面形状	背面構成						調整角	先端角	調整部位	打面部位	末端	母岩番号	接合資料	備考	層位	標高		
										C	S	H	T	R	L	D	V										
第34図25a	B区	32	剥片	44.6	48.2	9.4	21.97			○																	
第34図25b	B区	36	(剥片)																								
第34図26	B区	28	使用痕のある剥片	28.3	12.9	4.5	1.55	1		2																	
第34図27	B区	33	剥片	25.7	50.1	10.2	13.40	1		3	1																
第34図28	B区	5	剥片	25.5	28.0	6.8	3.25	L																			
第36図29	B区	18	剥片	44.7	28.0	9.5	10.48	1		○																	
第36図30	B区	21	剥片	29.6	22.7	6.1	3.65	1		4																	
第36図31	B区	39	スクレイパー	28.0	34.0	14.0	16.79	L	1	1	1	1															
第36図32	B区	29	スクレイバー	19.1	27.8	12.8	16.79	L																			
第36図33	B区	12	使用痕のある剥片	30.1	15.6	7.8	3.83	2		2																	
第36図34	B区	22	剥片	29.6	22.7	6.1	3.65	1																			
第36図35	B区	30	剥片	32.1	42.4	28.5	10.26	1		○																	
第36図36	B区	26	石核	21.9	22.5	21.0	11.64																				
第36図37	B区	37	敲打器	44.2	26.2	25.5	31.18																				
第38図38	B区	11	台石	138.8	84.2	64.0																					
第38図39	B区	40	敲打器	63.6	57.8	17.6	99.47																				
第38図40	B区	不明	石核																								
	B区	1	碎片																								
	B区	2	碎片																								
	B区	3	剥片	15.3	19.6	4.8	15.20	1			3																
	B区	4	碎片																								
	B区	6	碎片																								
	B区	7	碎片																								
	B区	8	剥片	21.8	7.8	1.52	2.64	1		2																	
	B区	9	礫																								
	B区	10	剥片	20.8	15.3	13.7	4.16	1		2																	
	B区	13	碎片																								
	B区	14	碎片																								
	B区	15	碎片																								
	B区	16	碎片																								
	B区	17	碎片																								
	B区	19	碎片																								
	B区	20	碎片																								
	B区	23	いも石片																								
	B区	24	碎片																								
	B区	25	遺物なし																								
	B区	27	碎片																								
	B区	31	碎片																								
	B区	34	遺物なし																								
	B区	35	剥片	25.5	21.2	13.3	7.13	1	1	3																	
	B区	38	碎片																								

思われる。両側縁に比較的大きめの剥離が多数みられる。

35は珪質凝灰岩製の剥片で背部に礫皮面を多く残す比較的肉厚の剥片である。

36はチャート製の小形の石核である。多方面から小さな剥片を剥がしたことが窺われるが当該ブロック群には全く同一石材が存在しない。

### 第1焼土ブロック及び炭化材、粒集中出土地点（第39図、図版5）

**分布状況** 6 G-43グリッドのほぼ南側に4箇所大きなブロックで検出されている。第2ブロックの東側の石器の分布と一部重なる。垂直分布的に判断するとやや遺物の分布より下位に位置すると思われるが、IX層の遺構になると思われる。なお、調査時にほぼ同じ箇所に粘土ブロックが分布している。これらの範囲は比較的広範囲に局地的に偏在した状態で分布しているのが確認されている。併せて何らかの遺構になると考えられる。

### 第2文化層

#### 第12ブロック（第36・37図、第4表、図版19）

**分布状況** 7 H-54グリッド付近に2点検出されている。第1ブロック～第11ブロックの検出範囲から南側の離れている部分から出土している点と遺物の石材の共通性がみられないことからIX層の遺物とは思われない。土層断面投影から検討してもやや新しい時期のVI層下部～VII層の時期に比定される。

**母岩別資料** 頁岩1点とホルンフェルス1点で構成される。

**出土遺物** 頁岩製敲打器1点とホルンフェルス製碎片1点で構成される。37は頁岩製の敲打器である。上下両端に大きな剝離痕を残す。

**その他の遺物** (第38図、第4表、図版19)

**III層の遺物** 調査区域内のIII層中からホルンフェルス製の石核が1点出土している。小円礫の片側からの剝離で三分の一程度を残す。詳細な地点は不明である。

## (2) 縄文時代以降の遺構と遺物 (第42図)

東西にのびる狭長な尾根上に遺構が展開する。各時代の遺構とも、尾根の頂上部の平坦部分から、北側の斜面の縁辺部分まで広がっている。出土した遺物は、少量である。

### 遺構

#### 009号跡陥穴 (第44図、図版5)

調査区北部ほぼ中央6G-69グリッド付近に位置している。規模は約2.2m×0.9mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向は北西を向き、検出面からの深さは約1.1mで、短軸方向からみるとTピットと呼ばれる形を呈している。検出面より約0.5mほど掘り下げたあと、わずかに袋状にひろがっており、ふくらみは最大5cmほどである。覆土は上層部は固くしまっており、下にいくほど軟弱になってくる。遺物は検出されなかった。

#### 011号跡陥穴 (第48図)

調査区北部の中央やや西寄り6G-66グリッドに位置する。規模は約2.0m×0.6mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向は北東を向き、検出面から約0.5mの部分までを確認した。覆土は固くしまっており、遺物は確認されていない。

#### 013号跡陥穴 (第44図)

調査区北部の中央やや西寄り6G-47グリッドに位置している。規模は約4.0m×0.6mで、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向はほぼ北を向き、検出面からの深さは最も深いところで約0.7mある。遺物は検出されていない。

#### 014号跡陥穴 (第44図、図版5)

調査区北部の西寄り6G-26グリッド付近に位置する。規模は約4.3m×0.9mで、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向は北西を向き、検出面からの深さは約1.8mで、縦断面は両端とも急角度で落ち込んでいる。短軸方向からみると、Tピットと呼ばれる形をしており、遺物の検出はなかった。

#### 015号跡陥穴 (第45図、図版5)

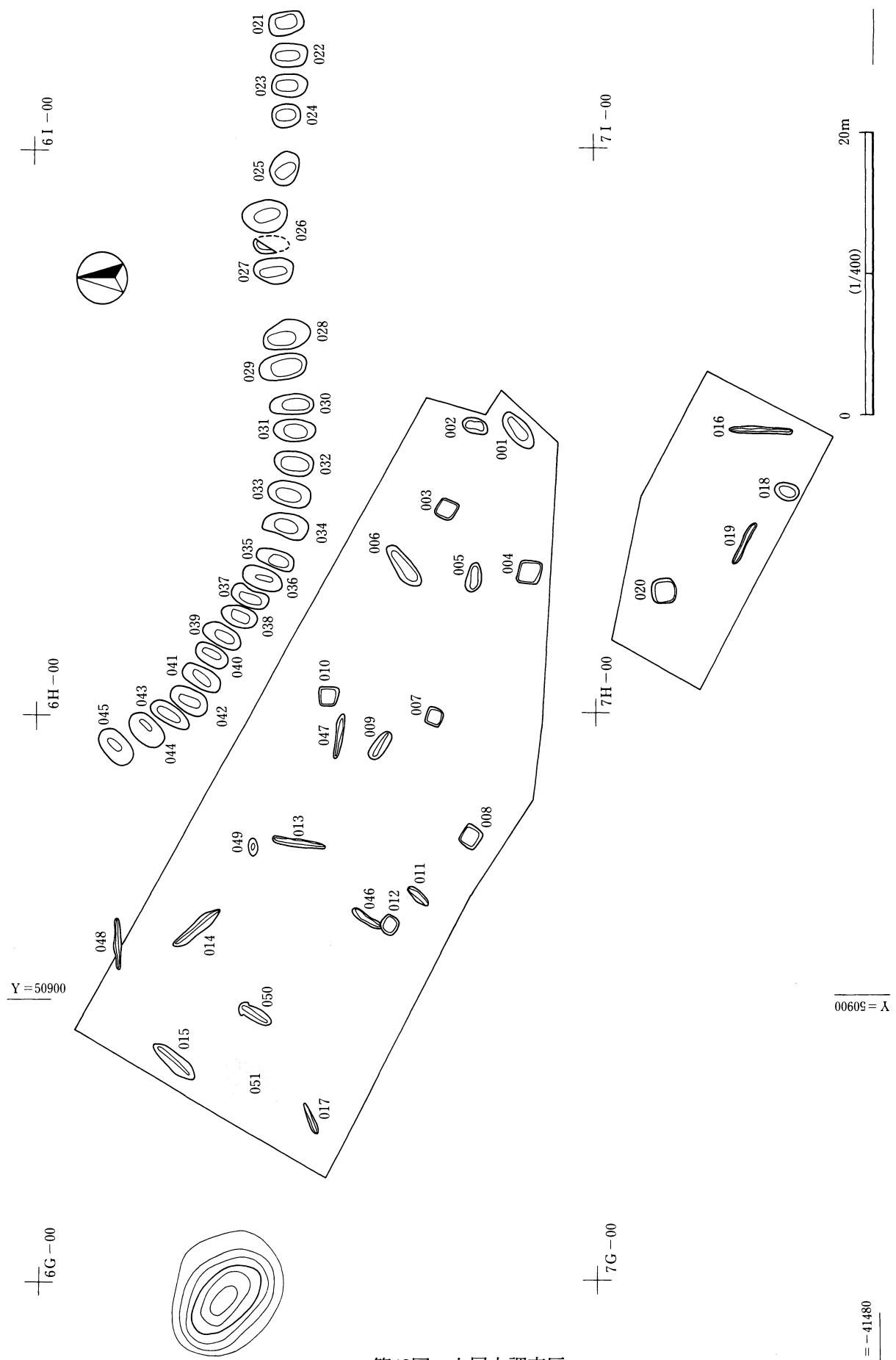
調査区北部の西寄り6G-23グリッド付近に位置する。規模は約3.2m×1.1mで、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向は北東よりやや北に傾いている。検出面からの深さは約1.8mで、縦断面両端は急角度で落ち込んでいる。短軸方向からみると、Tピットと呼ばれる形をしているが、北東の壁面が崩れ落ちてやや広がっている。遺物の検出はなかった。

#### 016号跡陥穴 (第45図、図版5)

調査区北部の東寄り7H-35グリッド付近に位置する。規模は約4.5m×0.5mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向はほぼ北を向く。検出面からの深さは約0.3mであるのは、底の部分のみが残ったた



第42図 上層遺構配置図



第43図 上層本調査区

めであり、本来は014号や015号と同じくTピットの形をなしていたものと推測される。遺物の検出はない。

#### 017号跡陥穴（第45図）

調査区北部の西寄り6G-42グリッド付近に位置する。規模は約2.6m×0.3mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向は東北東に向く。検出面から約0.9mの深さまで確認したが、縦断面は南側が0.5mほど掘り下げた後、袋状に17cm程度ふくらんでいる。短軸方向からみるとほぼ垂直に落ち込んでいるが、本来はTピットの形をしていたと推測される。遺物の検出はない。

#### 019号跡陥穴（第45図、図版6）

調査区北部の東寄り7H-22グリッド付近に位置する。規模は約3.4m×0.6mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向は北北東に向く。検出面からの深さは約0.6mで、縦断面は約0.4mほど掘り下げた後、やや袋状にふくらんでいる。短軸方向からみるとほぼ垂直に落ち込んでいるが、本来はTピットの形をしていたものと推測される。遺物の検出はない。

#### 046号跡陥穴（第46図）

調査区北部のやや西寄り6G-56グリッド付近に位置する。規模は約2.1m×0.5mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向は北東に向く。検出面からの深さは約1.0mで、縦断面は約0.4mほど掘り下げた後、袋状にふくらんでいる。短軸方向からみるとほぼ垂直に落ち込んでいるが、本来はTピットの形をしていたものと推測される。

#### 047号跡陥穴（第46図、図版6）

調査区北部のほぼ中央6G-59グリッドに位置する。規模は約3.2m×0.5mで、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向は西北西を向き、検出面からの深さは約0.7mである。短軸方向からみるとほぼ垂直に落ち込んでいるが、本来はTピットの形をしていたと推測される。

#### 048号跡陥穴（第46図）

調査区北部の西寄り6G-15グリッド付近に位置する。規模は約3.6m×0.5mで、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向はほぼ東北東を向き、検出面からの深さは約1.2mである。短軸方向からみるとほぼ垂直に落ち込んでいるが、本来はTピットの形をしていたものと推測される。遺物の検出はない。

#### 050号跡陥穴（第47図、図版6）

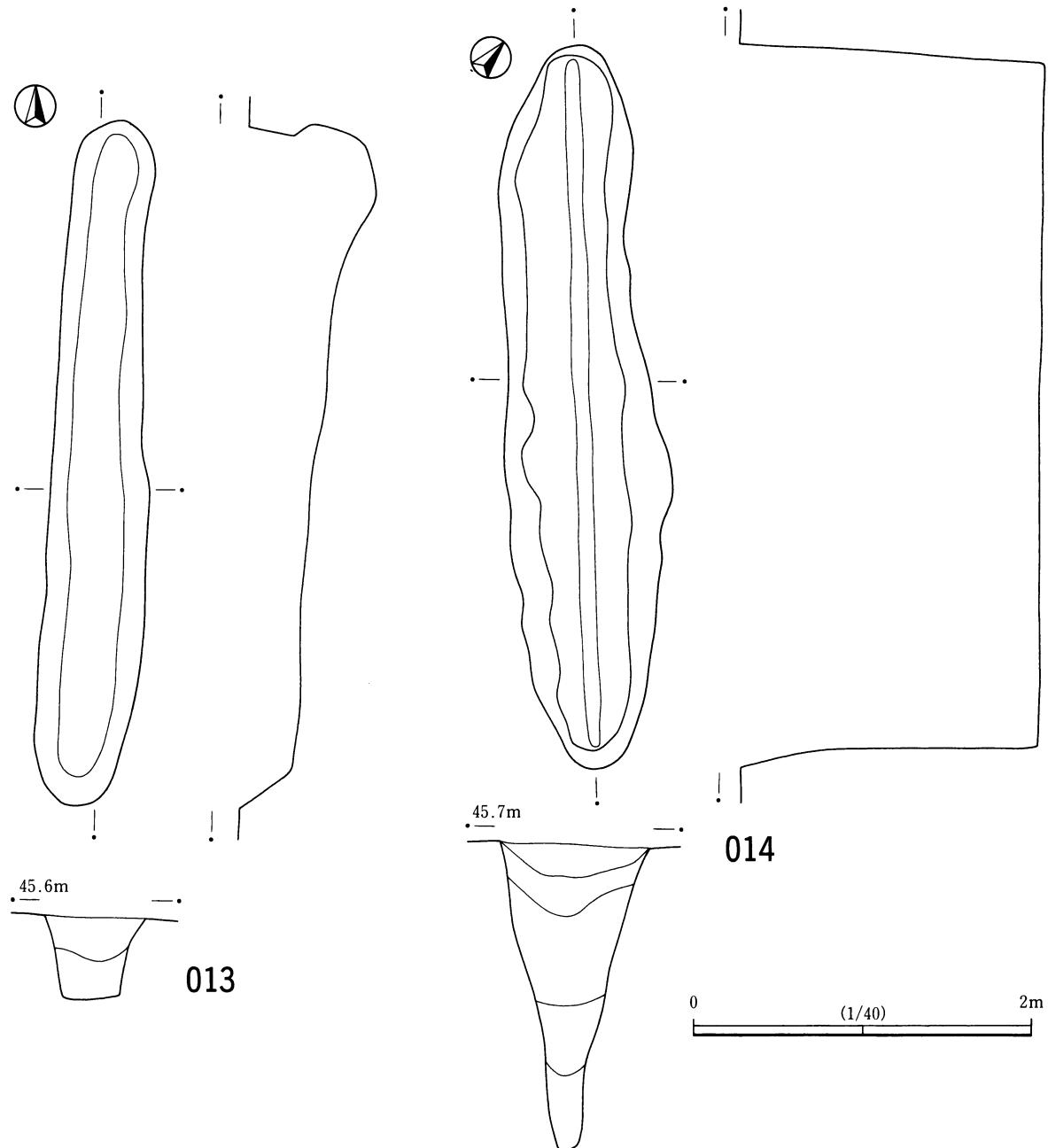
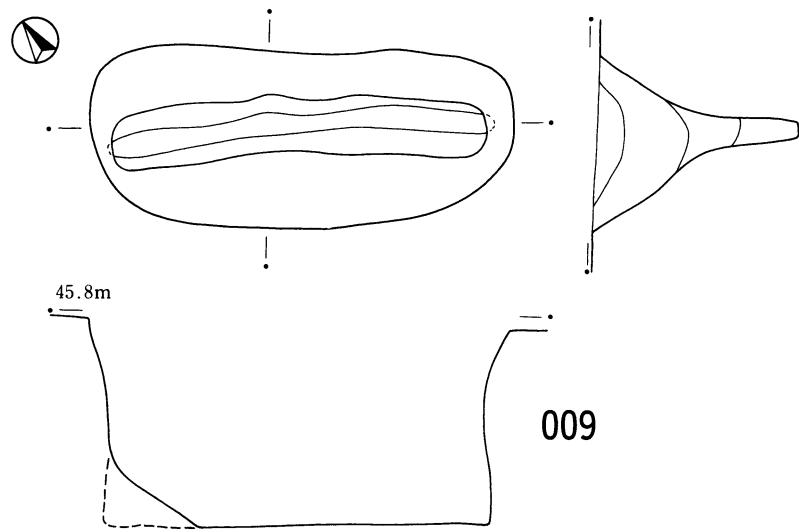
調査区北部の西寄り6G-34グリッド7付近に位置する。規模は約2.5m×1.0mで、平面形は長楕円を呈する。長軸方向は北東よりやや北に向く。遺構の北東部分にベルトが通っていたために検出面に高低ができるが、最も深いところで約1.8mである。両壁面とも崩れ落ちたために広がっているが、短軸方向からみると、本来はTピットの形をしていたものと推測される。遺物の検出はなく、形状からみて縄文時代早期の陥穴とした。

#### 001号跡土坑（第47図、図版6）

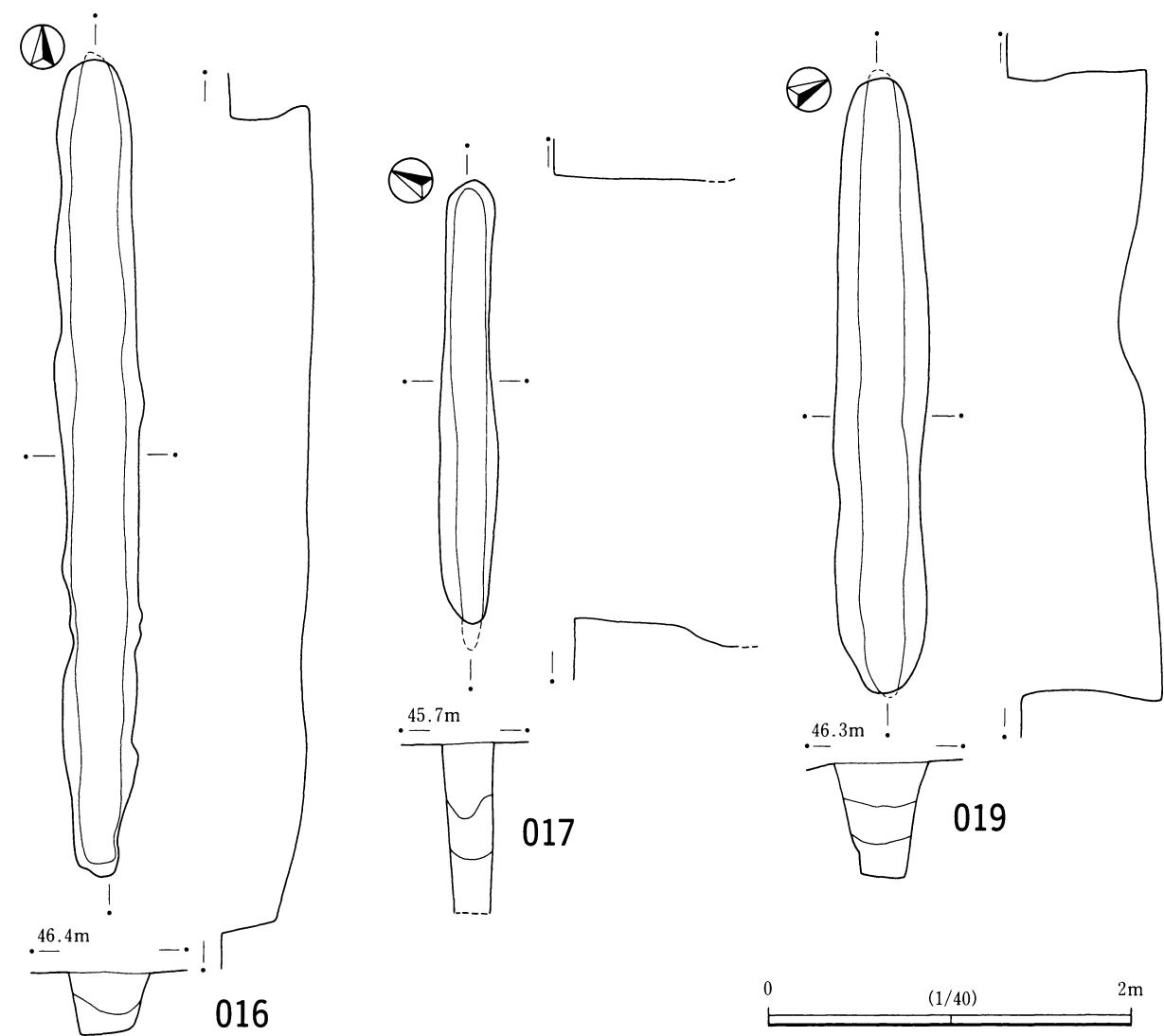
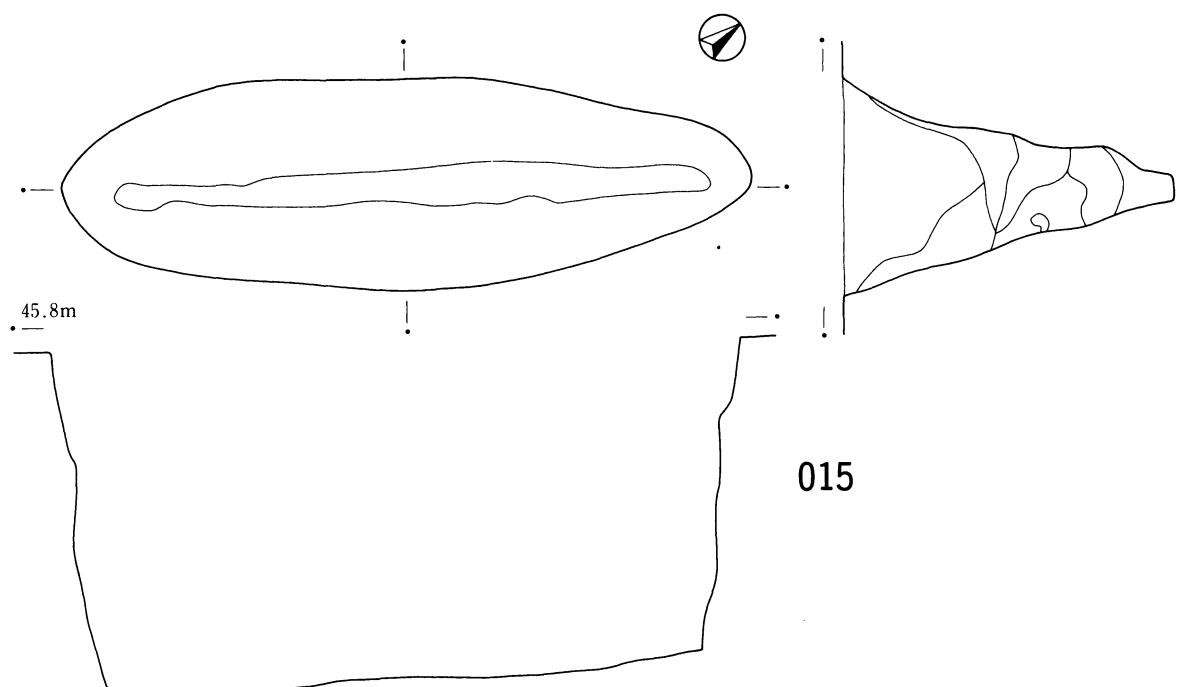
調査区北部の中央やや東寄り6H-85グリッド付近に位置している。規模は約2.9m×1.4mで、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向はほぼ北東を向き、検出面からの深さは、最も深いところで約0.5mとやや浅い。底面の形状も2.0m×0.6mの長楕円形を呈する。覆土の上の部分より炭化粒をわずかに確認したが、遺構の形状からみて土坑とした。

#### 002号跡土坑（第47図、図版6）

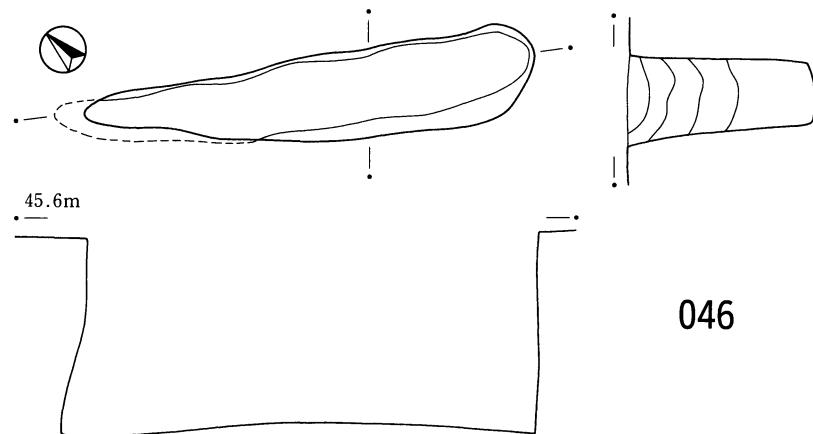
調査区北部の中央やや東寄り6H-75グリッド付近に位置し、001号土坑の北隣りにあたる。規模は約1.9



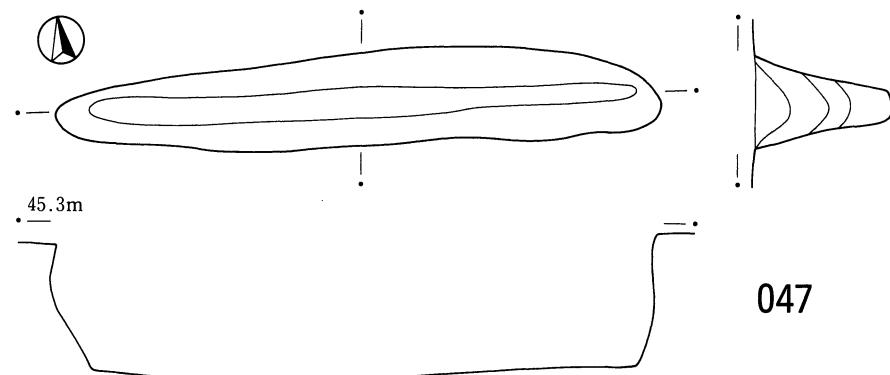
第44図 陥穴(1)



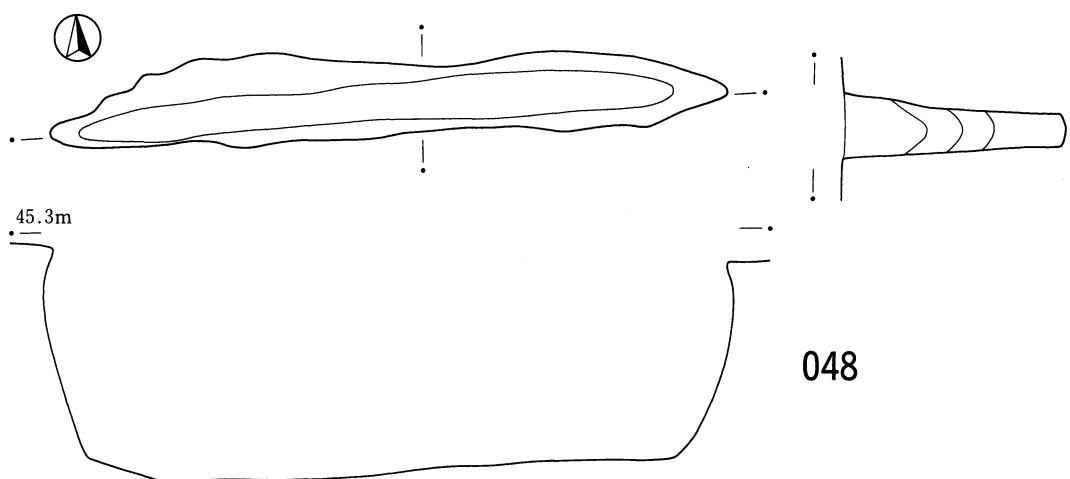
第45図 陥穴(2)



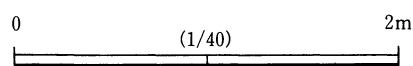
046



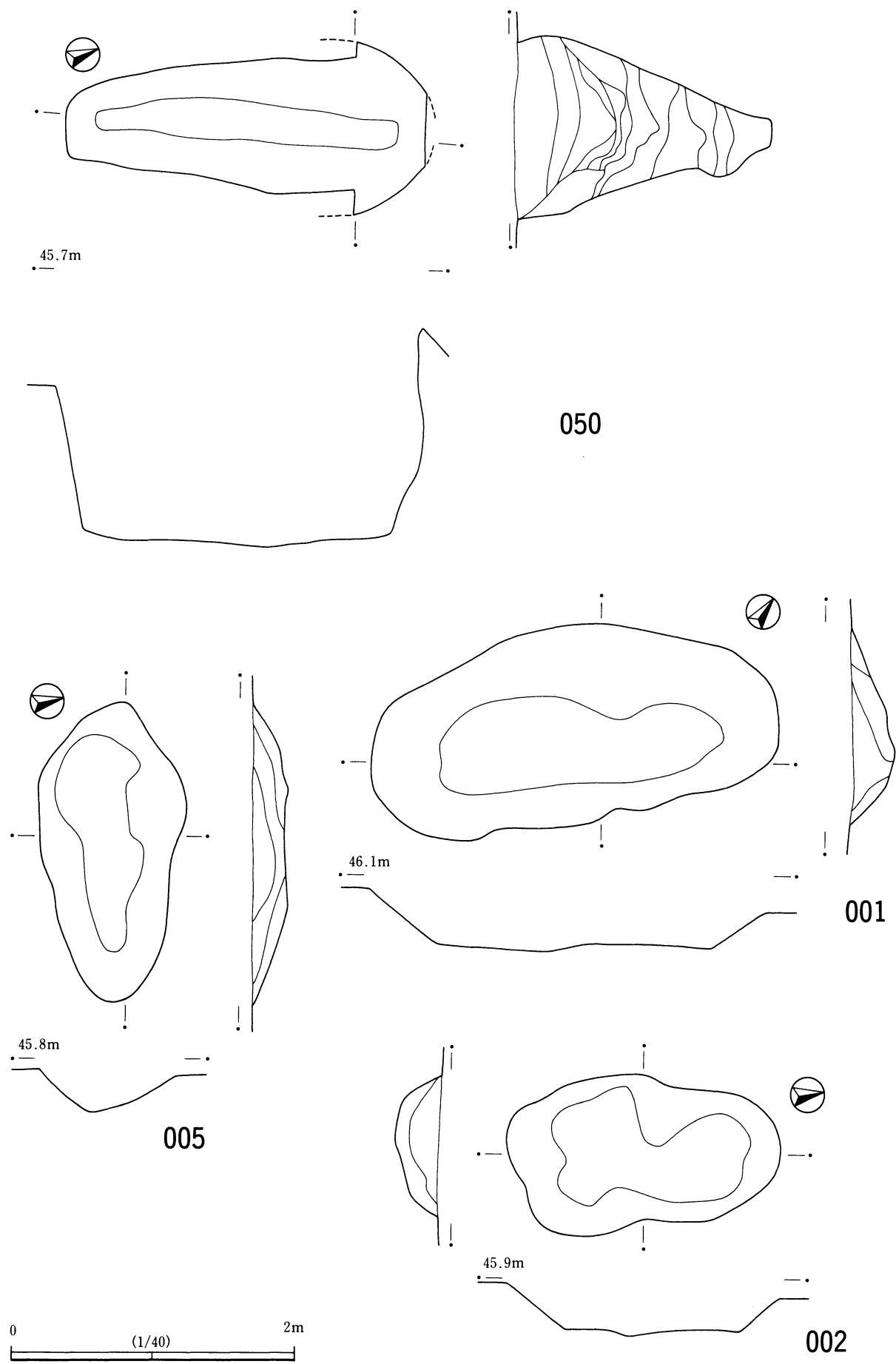
047



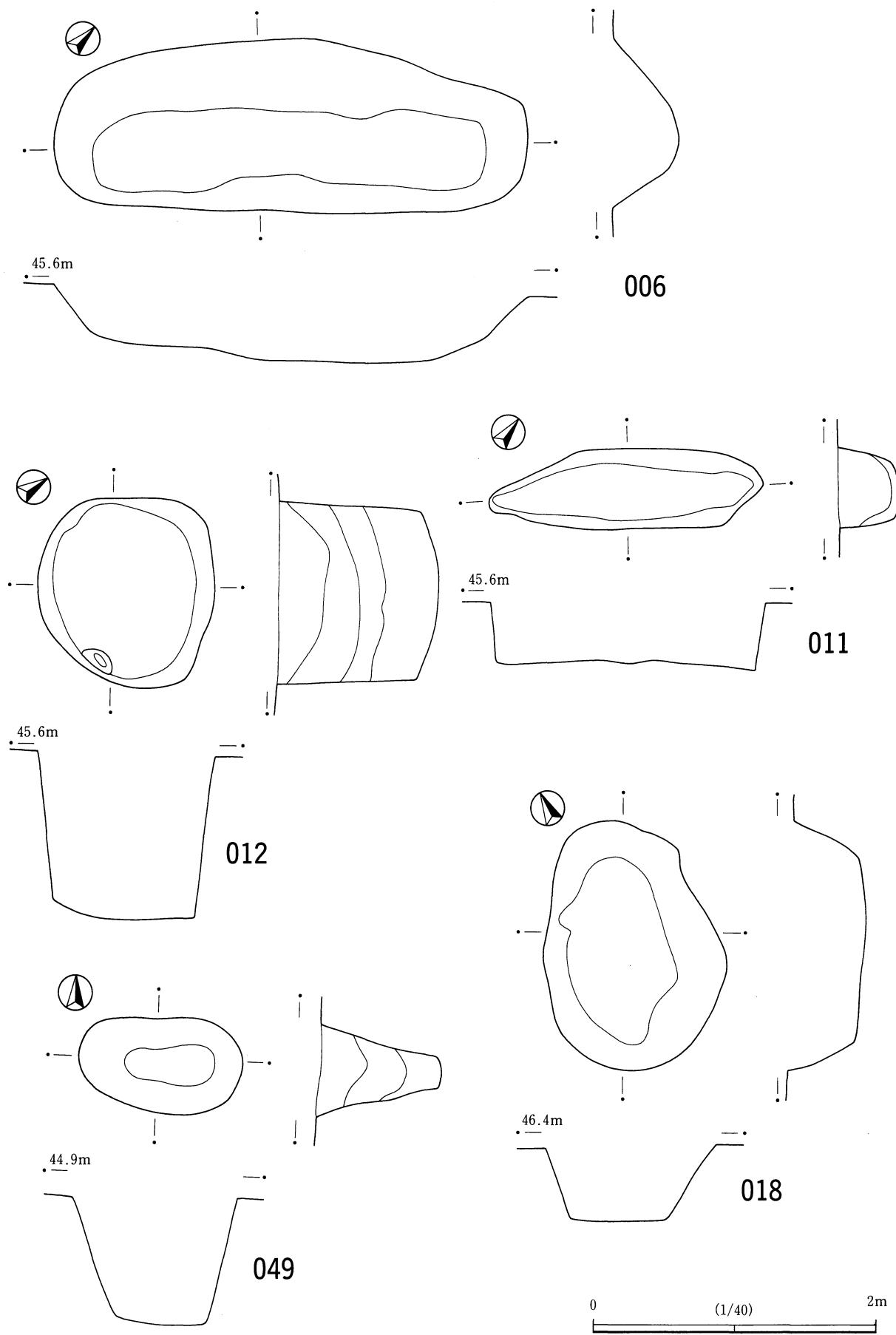
048



第46図 陥穴(3)



第47図 陥穴・土坑



第48図 土坑

m×1.0mで平面形は長楕円形を呈する。長軸方向は北北東を向き、検出面からの深さは、約0.4mとやや浅い。遺物は検出されず、形状からみて土坑とした。

#### 005号跡土坑（第47図、図版7）

調査区北部の中央やや東寄り6H-72グリッドに位置している。規模は約2.1m×1.1mであり、平面形は長楕円形を呈する。長軸方向は東南東を向き、検出面からの深さは約0.3mとやや浅い。覆土は全体的にややしまり、上層の部分にわずかに炭化物が確認されたが、形状からみて土坑とした。

#### 006号跡土坑（第48図、図版7）

調査区北部の中央やや東寄り6H-62グリッドに位置している。規模は約3.4m×1.2mであり、平面形は長楕円形を呈している。長軸方向はほぼ北東を向き、検出面からの深さは最大約0.6mであり、底面も約2.3m×0.5mの長楕円形を呈する。遺物は検出されなかつたが、形状から土坑とした。

#### 012号跡土坑（第48図、図版7）

調査区北部の中央やや西寄り6G-66グリッドに位置している。規模は約1.4m×1.3mで、平面形は楕円形を呈する。長軸方向は北西を向き、検出面からの深さは約1.1mで、全体がほぼ垂直に落ち込んでいる。覆土は下層ほどしまっており、遺物は検出されていない。形状からみて土坑とした。

#### 018号跡土坑（第48図、図版7）

調査区北部の東寄り7H-33グリッド付近に位置する。規模は約1.7m×1.3mで、平面形は楕円形を呈している。長軸方向はほぼ北を向く。検出面からの深さは約0.5mとやや浅い。覆土は全体的に軟弱であり、遺物も検出されていない。形状からみて土坑とした。

#### 049号跡土坑（第48図）

調査区北部のやや西寄り6G-47グリッドに位置する。規模は約1.2m×0.7mで、平面形は楕円形を呈する。長軸方向はほぼ東西を向き、検出面からの深さは約0.9mである。覆土は中層が固くしまり、上下層が軟弱であるが、人為的な埋め戻しの様子は見られず、遺物も検出されていない。形状から考えて土坑とした。

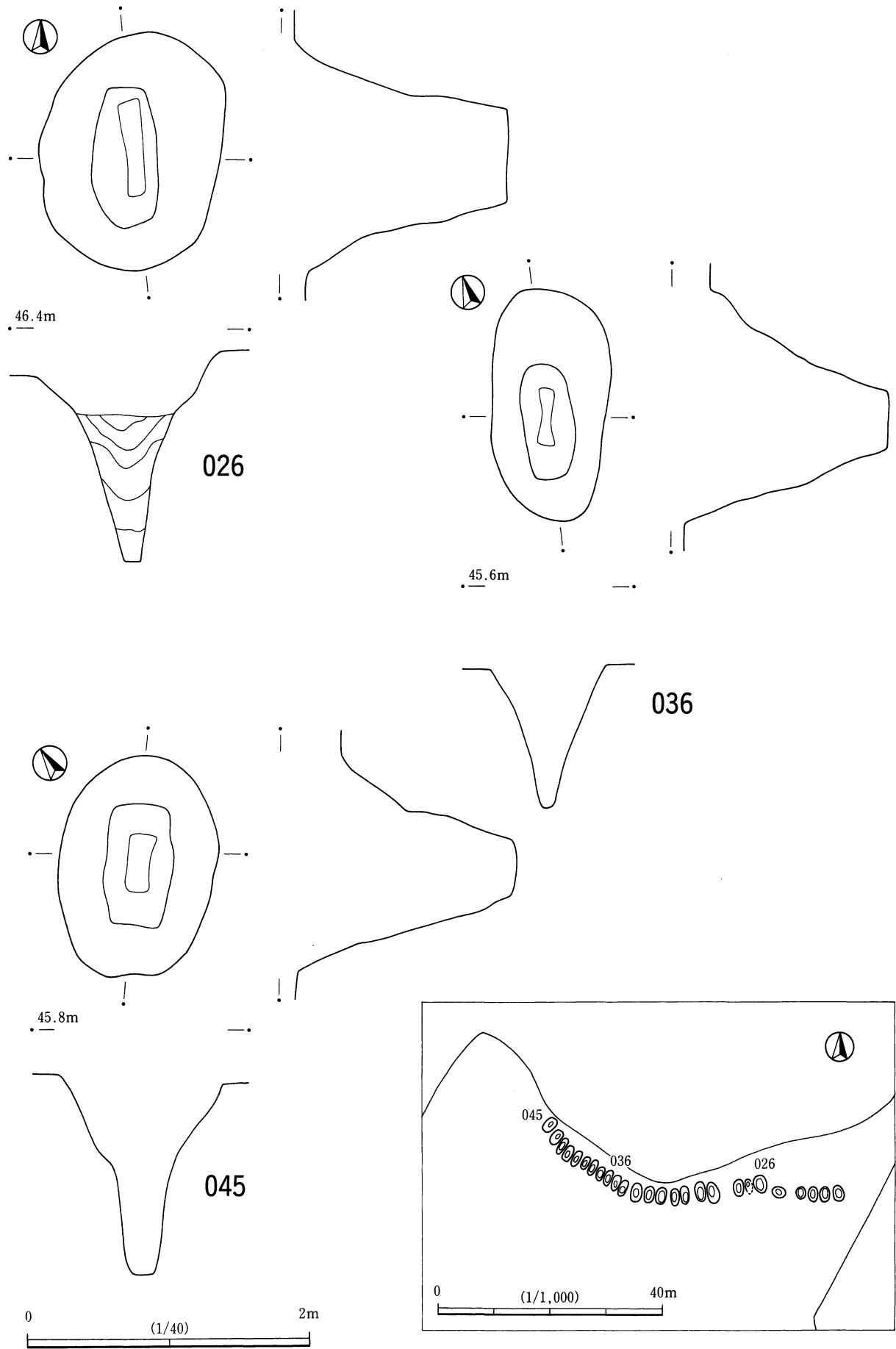
#### 021～045・052シシ穴群（第49図、図版7・8）

調査区北端の斜面の上に、北に向かって東から西へとゆるい弧を描くように列状に土坑状の遺構が並んでおり、事前に確認できたものについては調査を行った。確認できた遺構は合わせて26基であった。平面形はすべて楕円形を呈しており、規模は長軸方向からみて最大3.5mから最小2.1m、短軸方向からみて最大2.6mから最小1.2mであった。検出面からの深さは3mを越えるものもあった。覆土は軟弱であり、遺構の位置、形状から近世のシシ穴と考える。034号と035号の間から古墳時代後期の遺物が検出されたが、直接これらの遺構との関連はないと考える。それ以外に遺物の検出はなかった。ここでは、026号（6H-48グリッド付近）・036号（6H-42グリッド付近）・045号（6G-19グリッド）の3例の実測図をあげておく。

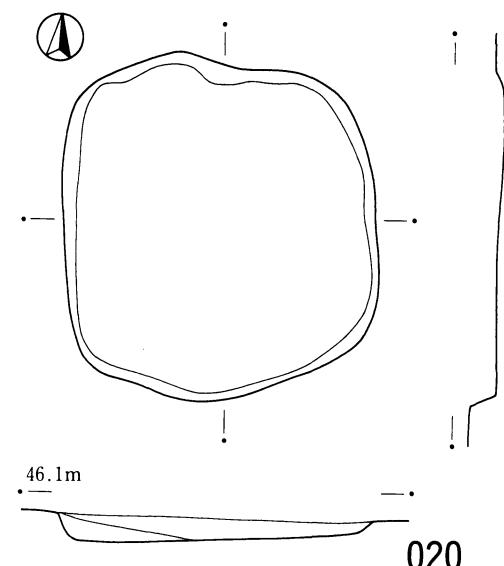
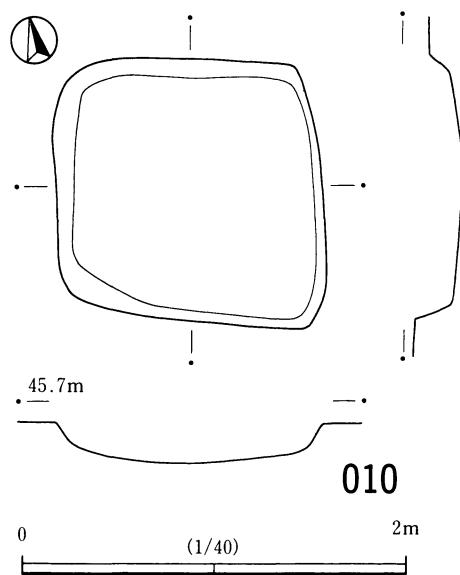
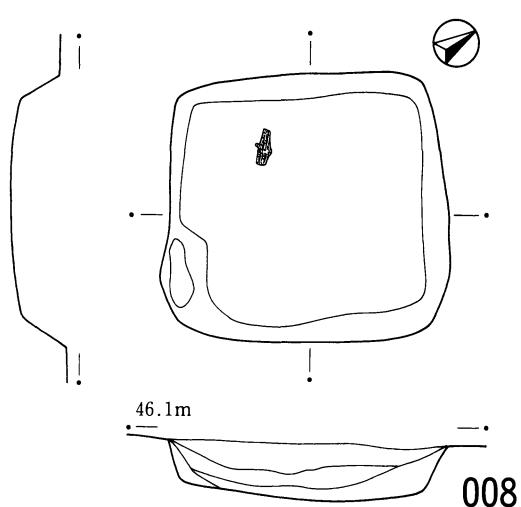
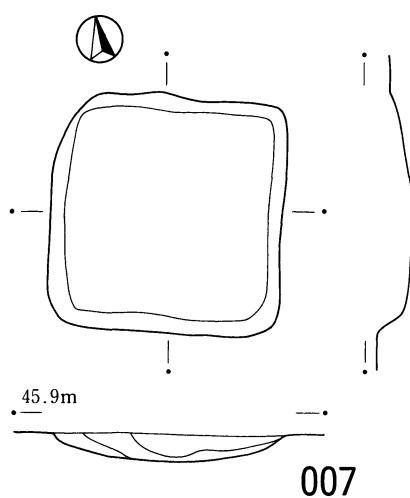
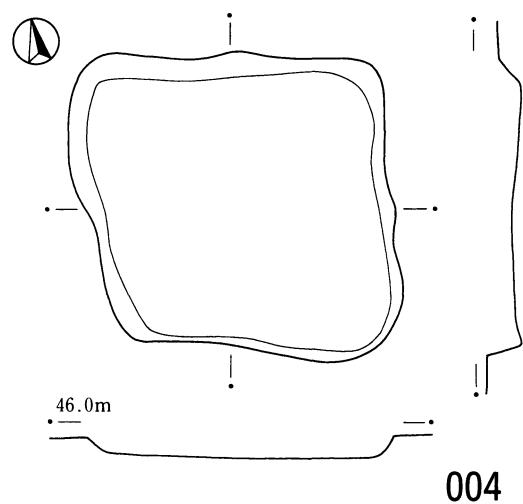
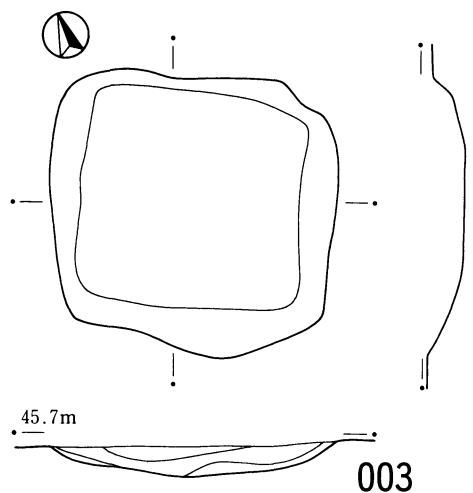
#### 003号跡炭焼窯（第50図）

調査区北部の中央やや東寄り6H-73グリッドに位置している。規模は約1.5m×1.4mで平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は北東よりやや北に傾いてる。検出面からの深さは約0.16mと浅い。覆土に炭化物を多量に含んでおり、形状と考え合わせて炭焼窯とした。

#### 004号跡炭焼窯（第50図）



第49図 シシ穴



第50図 炭焼窯

調査区北部の中央やや東寄り 6 H-82 グリッド付近に位置し、003号炭焼窯の南にある。規模は約1.6m×1.5mで、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は北北東を向く。検出面からの深さは約0.12mと浅い。覆土はしまりがなく、炭化物を多量に含み、形状と考え合わせ炭焼窯とした。

#### 007号跡炭焼窯（第50図、図版8）

調査区北部ほぼ中央 6 H-70 グリッド付近に位置している。平面形は隅丸のほぼ正方形で、規模は約1.2m×1.2mである。軸方向は北北東に傾き、検出面からの深さは約0.15mである。覆土は軟弱で炭化物を多量に含み、形状と考え合わせて炭焼窯とした。

#### 008号跡炭焼窯（第50図、図版8）

調査区北部ほぼ中央 6 G-77 グリッド付近に位置する。規模は約1.5m×1.3mで平面形は隅丸の長方形を呈している。長軸方向は北東よりやや北に傾き、検出面からの深さは約0.2mと浅く、床面も平らである。覆土は炭化物を多量に含み、形状と考え合わせて炭焼窯とした。

#### 010号跡炭焼窯（第50図）

調査区北部のほぼ中央 6 H-00 グリッドに位置し、008号炭焼窯の北北西にあたる。規模は約1.4m×1.3m 平面形は隅丸の長方形を呈している。長軸方向は西北西を向き、検出面からの深さは約0.2mと浅い。形状から炭焼窯と考える。

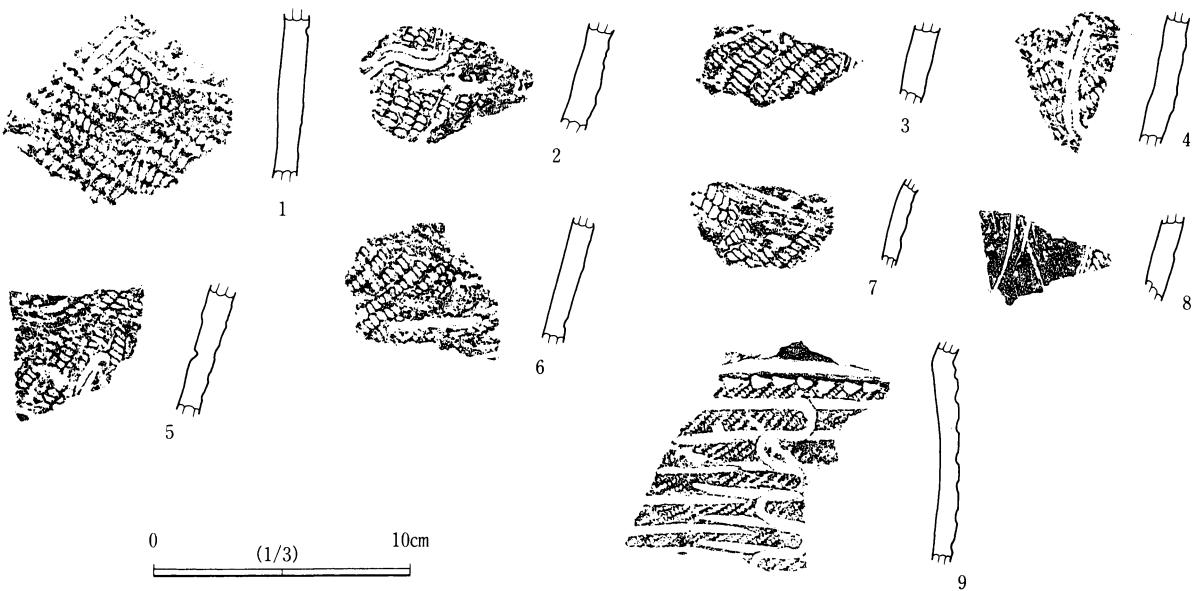
#### 020炭焼窯（第50図、図版8）

調査区北部のやや東寄り 7 H-12 グリッド付近に位置する。規模は約1.8m×1.7mで、平面形は隅丸の長方形を呈している。長軸方向はほぼ北を向く。検出面からの深さは約0.15mと浅く、覆土に多量の炭化物が含まれており、形状と考え合わせて炭焼窯とした。

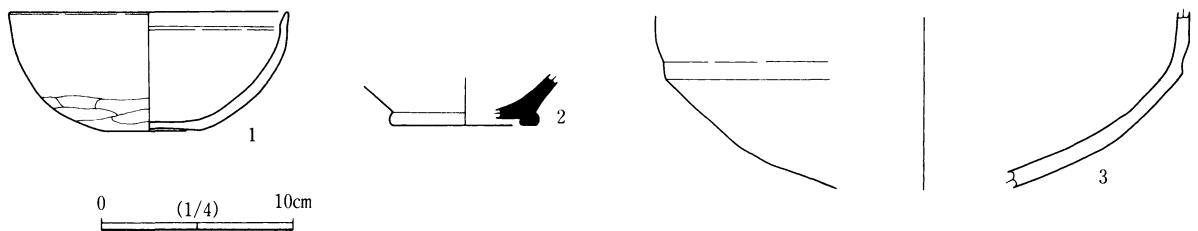
### 遺構外出土遺物

#### 縄文時代（第51図、図版20）

1～7は同一トレンチ（T 4）から出土した。そのうち1～6は同一個体と思われ、胎土に纖維を含む。単節R Lの縄文が斜走し、半截竹管によると思われる沈線が波状に巡らされている。7は胎土に纖維を含



第51図 縄文土器



第52図 古墳時代遺物

むものの、珪素を含む粒子の割合が少ないとことなどから別個体と考える。RLの原体を回転方向を変えることによつた羽状縄文が施されている。両方とも前期黒浜式に属するものと考えられる。8・9は第4トレンチから出土した。8は右側が1本、左側が2本（内側の1本は途中で切れている）の平行した沈線の間を無文とし、両脇にRLの単節縄文を施すが、左側がほとんど削られて見えない。時期は特定できない。9は、キャリバー形の深鉢の胴部である。細かなLRの単節縄文を施した後、横位の沈線を何本も巡らし、さらに上下方向に波状の沈線を1本施している。くびれの部分のすぐ下に刺突文を一周させている。後期加曾利B式に属するものと思われる。

#### 古墳時代（第52図、図版20）

1は、6H—43グリッドから出土した土師器の杯である。口径14.7cm、底部5.0cm、器高6.2cm。外面の上部2/3程はヨコナデ、下部は横ヘラケズリをしたあと赤彩を施す。内面はヘラケズリのあとヨコナデを施し、底の部分を残して赤彩を施す。底部はヘラケズリ。口縁部にわずかにすぼまった部分があり、内面は逆にその部分が稜をなす。胎土はやや粒子が粗く、0.2mm～0.5mm程の砂粒を多量に含んでいる。2は、第9トレンチから出土した、須恵器の壺もしくは瓶の底部である。底面は9.8cm。色調は灰色で、焼成は良好である。ロクロ成形で、内面は横ナデ、外面は底部を切り離したあと高台をつけヨコナデしている。内面底部に焼成時に降下した自然釉が付着している。3は、第6トレンチから出土した、土師器の浅鉢もしくは大型の杯である。口径28.0cm。外面上部はヨコナデ、ミガキをかけ、その下は横ヘラケズリの後、ヨコナデ。内面はきれいに研磨を施している。口縁と胴部の間を高さ2mmほどの稜が走る。焼成は比較的良好でわずかに砂粒を含む。

### 3 まとめ

#### 旧石器時代

上人塚遺跡では、A区、B区という2地点から合計12箇所のブロック（遺物単独出土を含む）が検出されている。地点は2地点ということであるが、共通石材の存在から第1ブロック～第11ブロックについては同時期に形成されたブロックである可能性が高い。石器・石材の分布状況から8ブロックを中心に環状に巡っている様子が窺われる。しかし石材分布状況は一様ではなく、大まかにみても安山岩Aが西側、珪質凝灰岩が東側に偏在して検出されている。これらの事柄が時間的経過の中で形成された違いか、もしくは係わったグループによる違いかは判明しない。また、点数が比較的多くないブロックで形成されているブロック群の割には、石材の種類の多さは注目される点であろう。

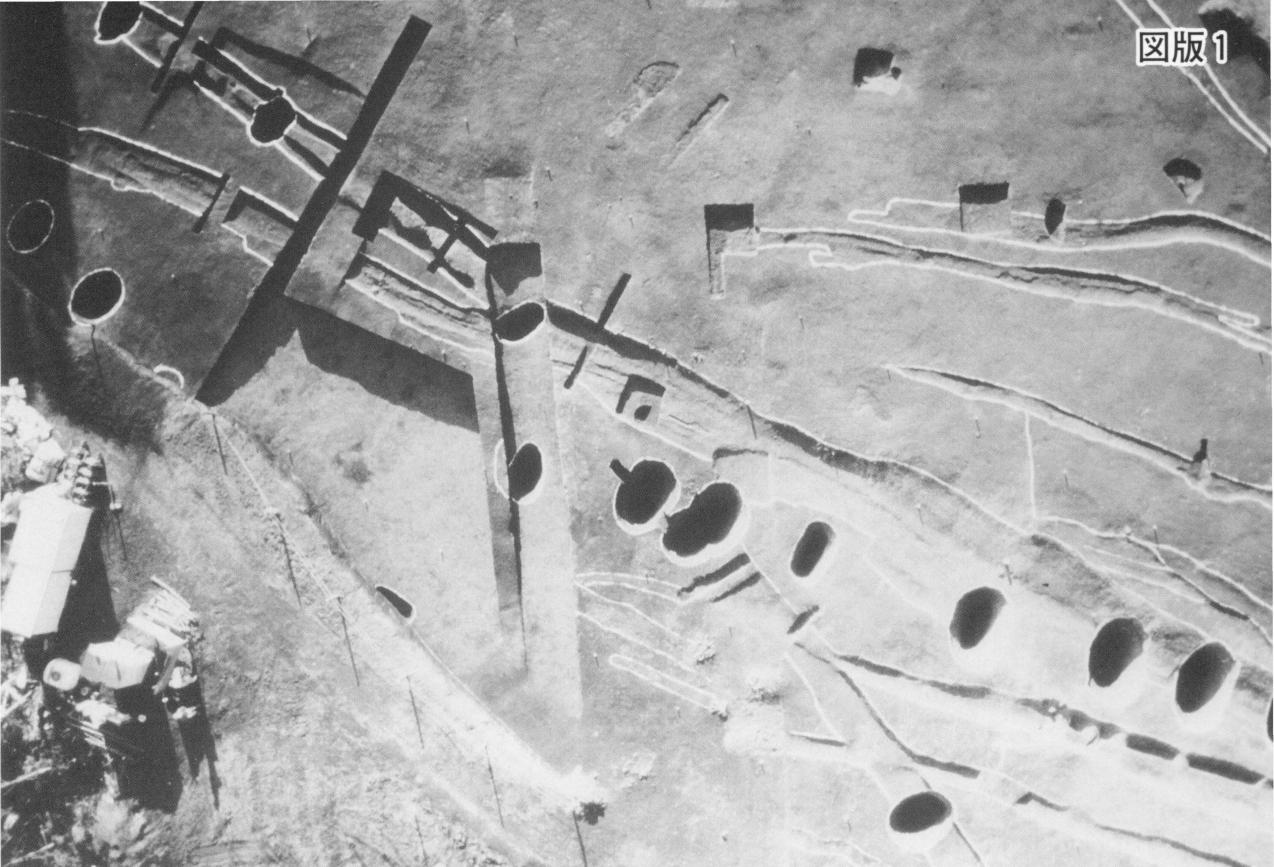
A区のやや南よりで検出された炭化材及び焼土集中地点については、非常に注目すべき遺構になると思われる。住居跡などが明確に検出困難な時期の遺構としては、炉址という程の明確さはなくともそれに匹

敵するものと現時点では考えられる。

### 縄文時代以降

調査区内から検出された遺構は、陥穴、土坑、炭窯、シシ穴である。これらの遺構からは、上人塚遺跡が、集落の中心とは離れた生活の場であったことがうかがえる。集落を形成するには平坦部分が少なすぎるという地形的な条件が、こうした性格をもった遺構をここに形成させたといえよう。この遺構の構成状態は、時代が下っても、この地域に大きな変化が見られなかつたということを示している。

# 写 真 図 版



ヲフサ野遺跡  
西側調査区空撮



ヲフサ野遺跡  
西側調査区近景



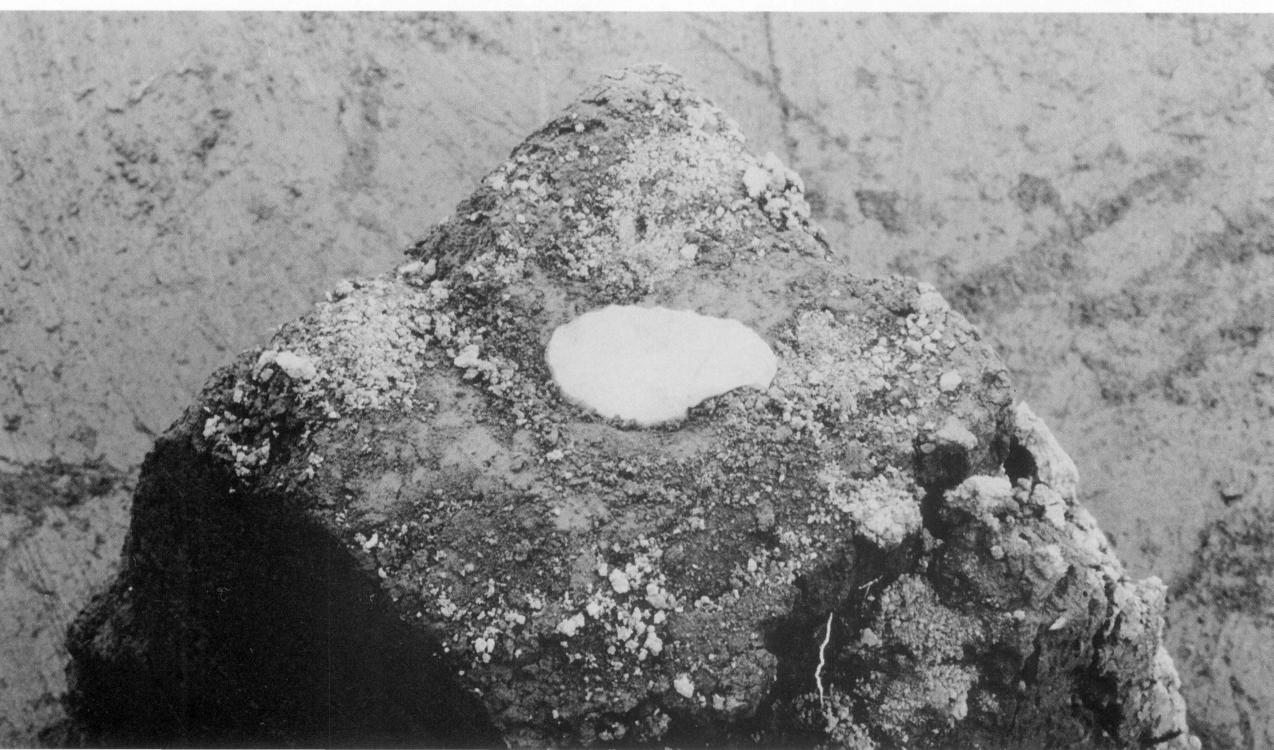
ヲフサ野遺跡  
北側調査区近景



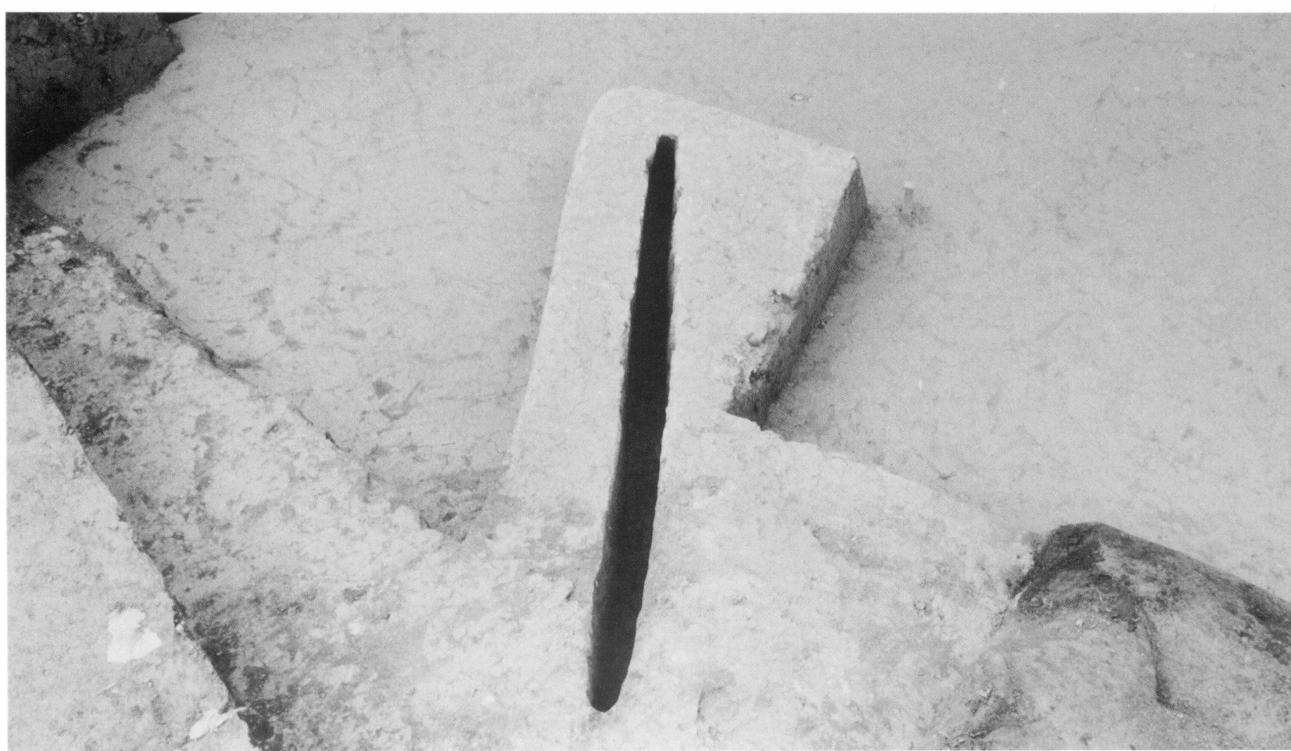
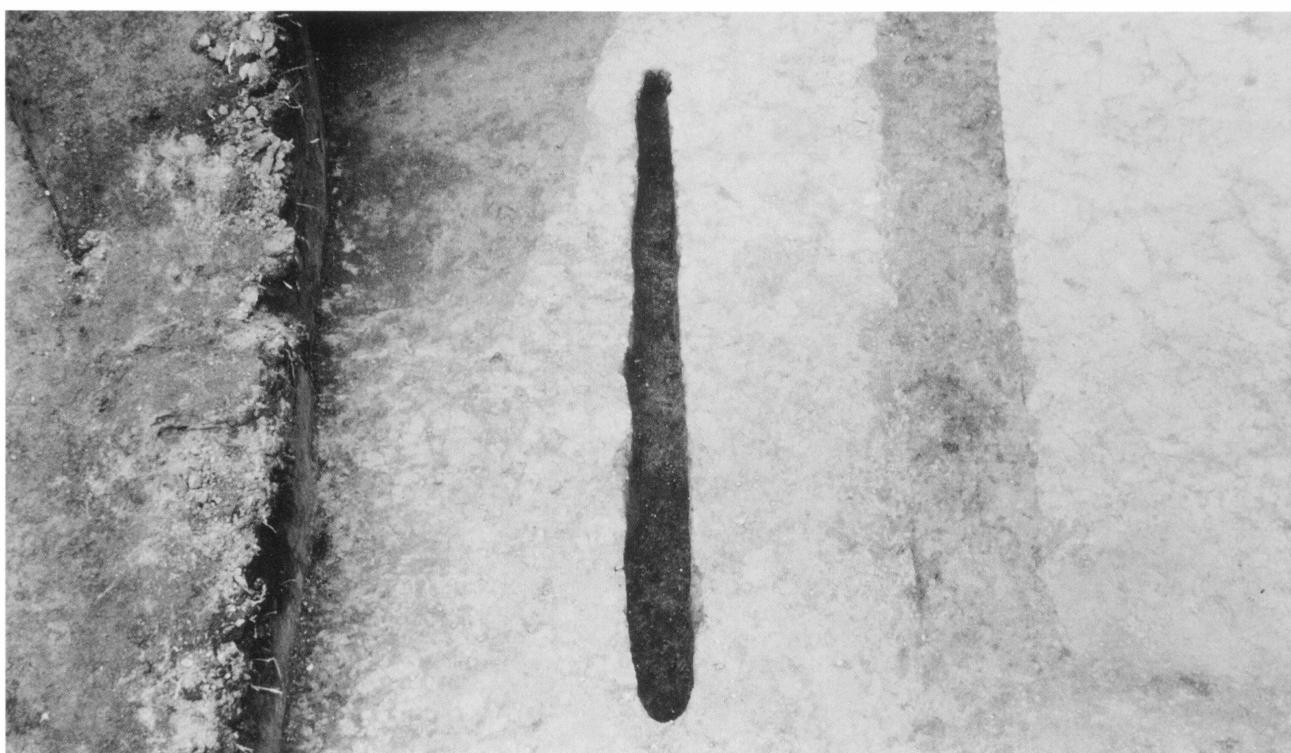
タフサ野遺跡  
第1ブロック



タフサ野遺跡  
第3ブロック



タフサ野遺跡  
第3ブロック出土石器





ヲフサ野遺跡  
009号跡住居



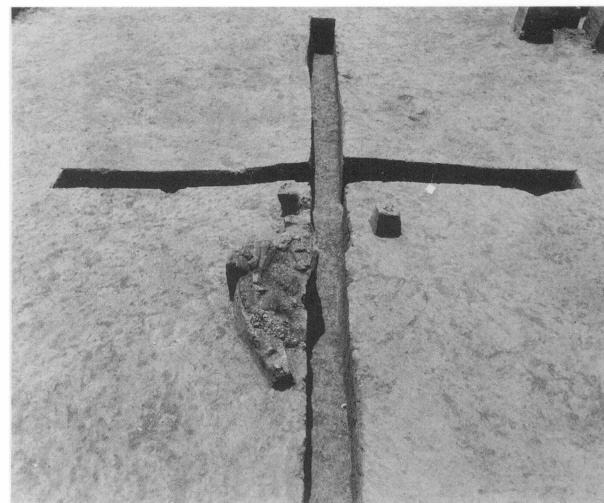
ヲフサ野遺跡  
009号跡住居



ヲフサ野遺跡  
009号跡住居  
カマド



上人塚遺跡 旧石器時代ブロック



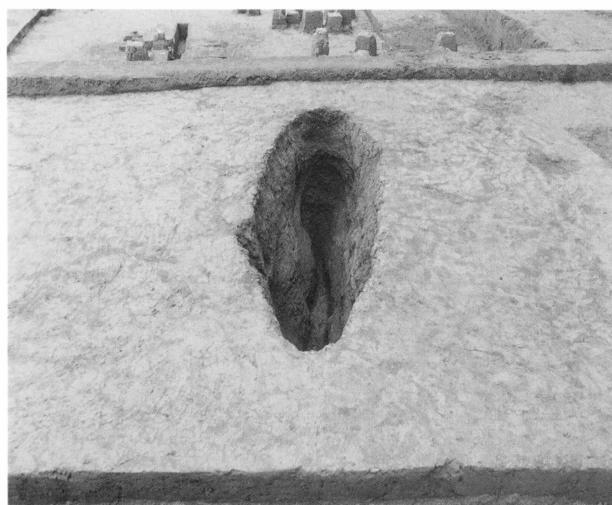
上人塚遺跡 石器時代焼土ブロック



上人塚遺跡 009号跡陷穴



上人塚遺跡 014号跡陷穴



上人塚遺跡 015号跡陷穴



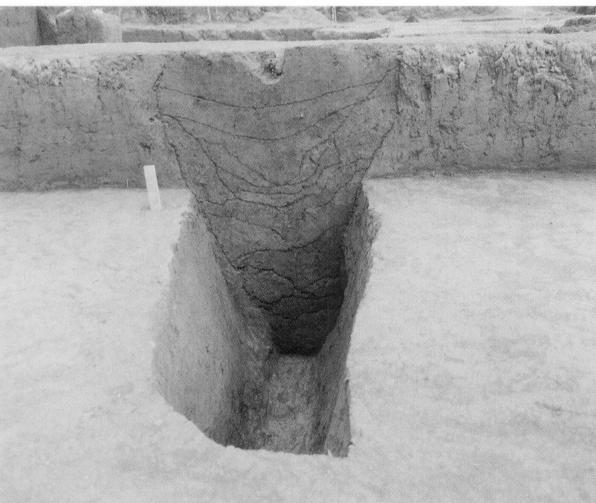
上人塚遺跡 016号跡陷穴



上人塚遺跡 019号跡陷穴



上人塚遺跡 047号跡陷穴



上人塚遺跡 050号跡陷穴土層



上人塚遺跡 050号跡陷穴



上人塚遺跡 001号跡土坑



上人塚遺跡 002号跡土坑



上人塚遺跡 005号跡土坑



上人塚遺跡 006号跡土坑



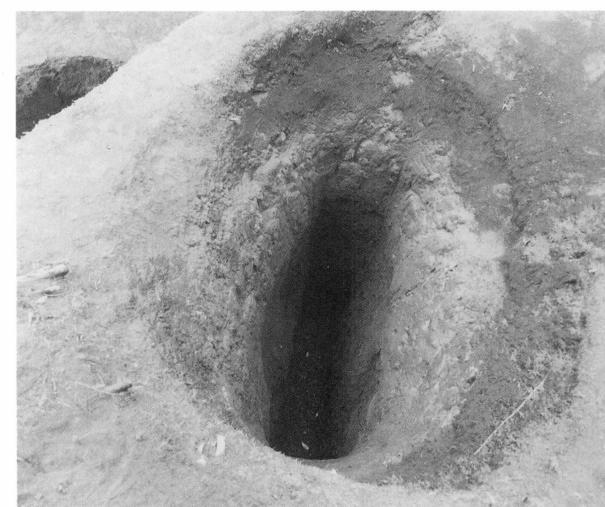
上人塚遺跡 012号跡土坑



上人塚遺跡 018号跡土坑



上人塚遺跡 シシ穴群



上人塚遺跡 026号跡シシ穴



上人塚遺跡 035・036・037号跡シシ穴



上人塚遺跡 007号跡炭焼窯



上人塚遺跡 008号跡炭焼窯



上人塚遺跡 020号跡炭焼窯



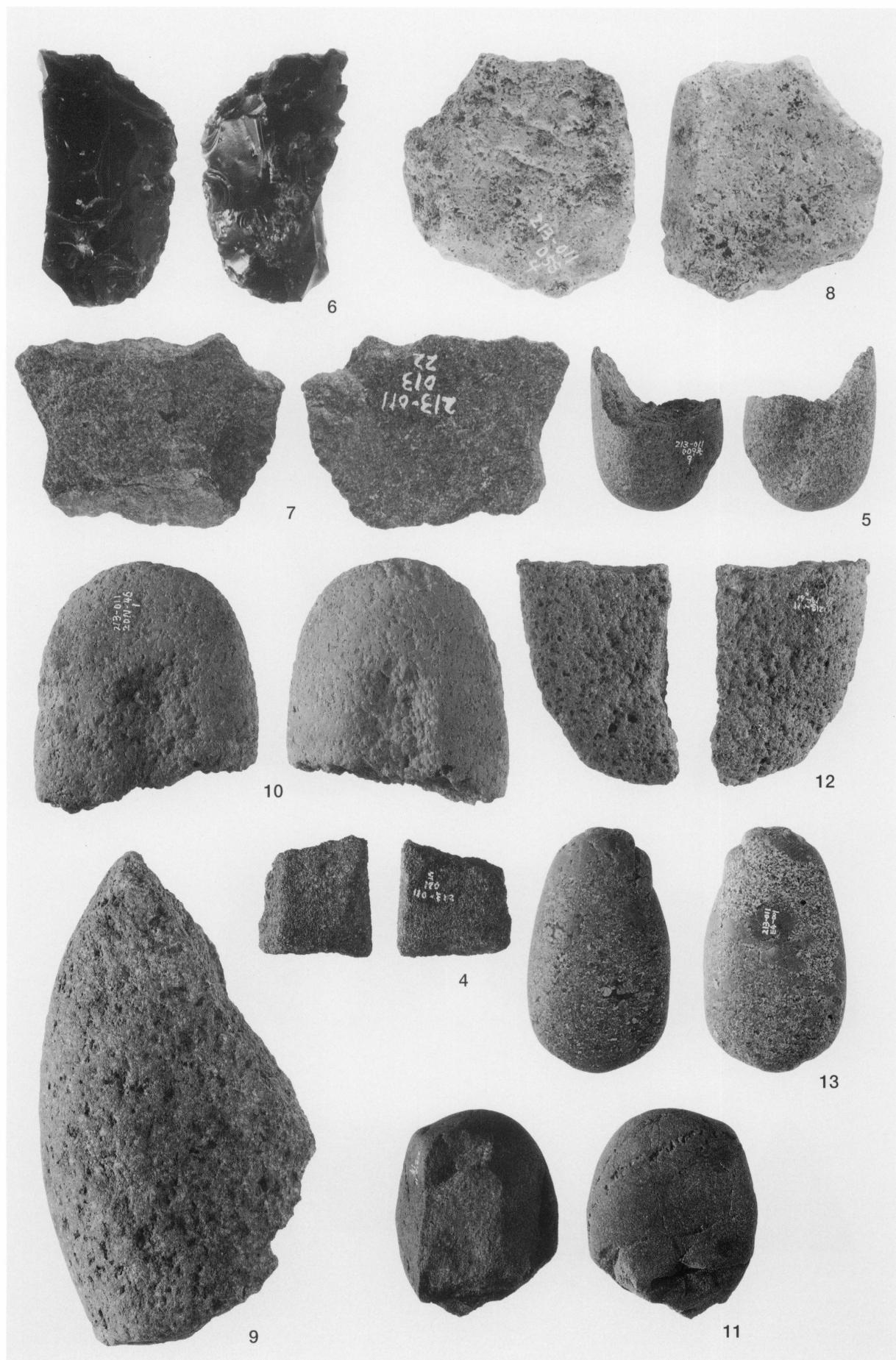
上人塚遺跡 調査風景



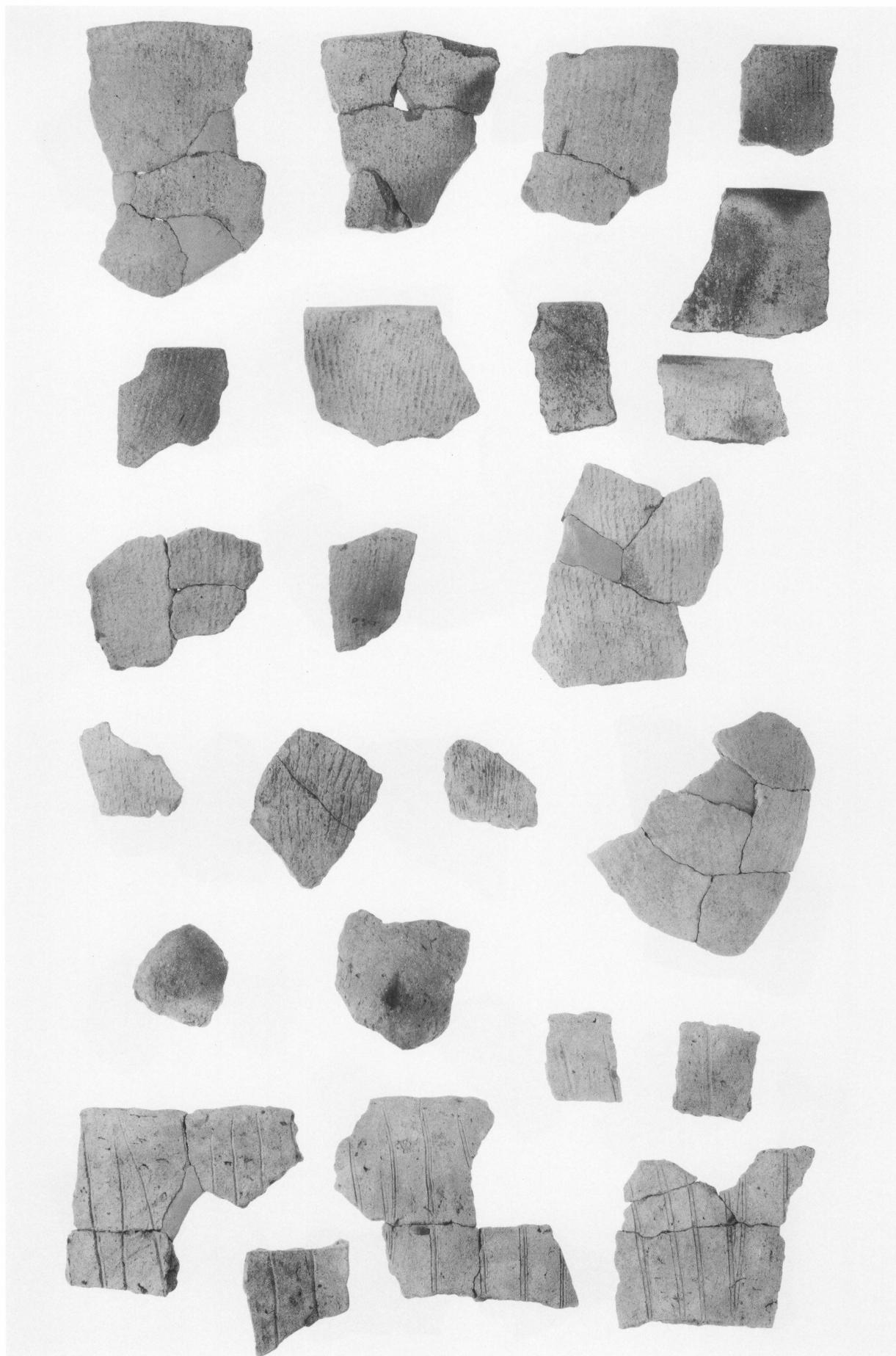
上人塚遺跡 遺物出土状況



ヨフサ野遺跡 旧石器時代石器・縄文時代石器



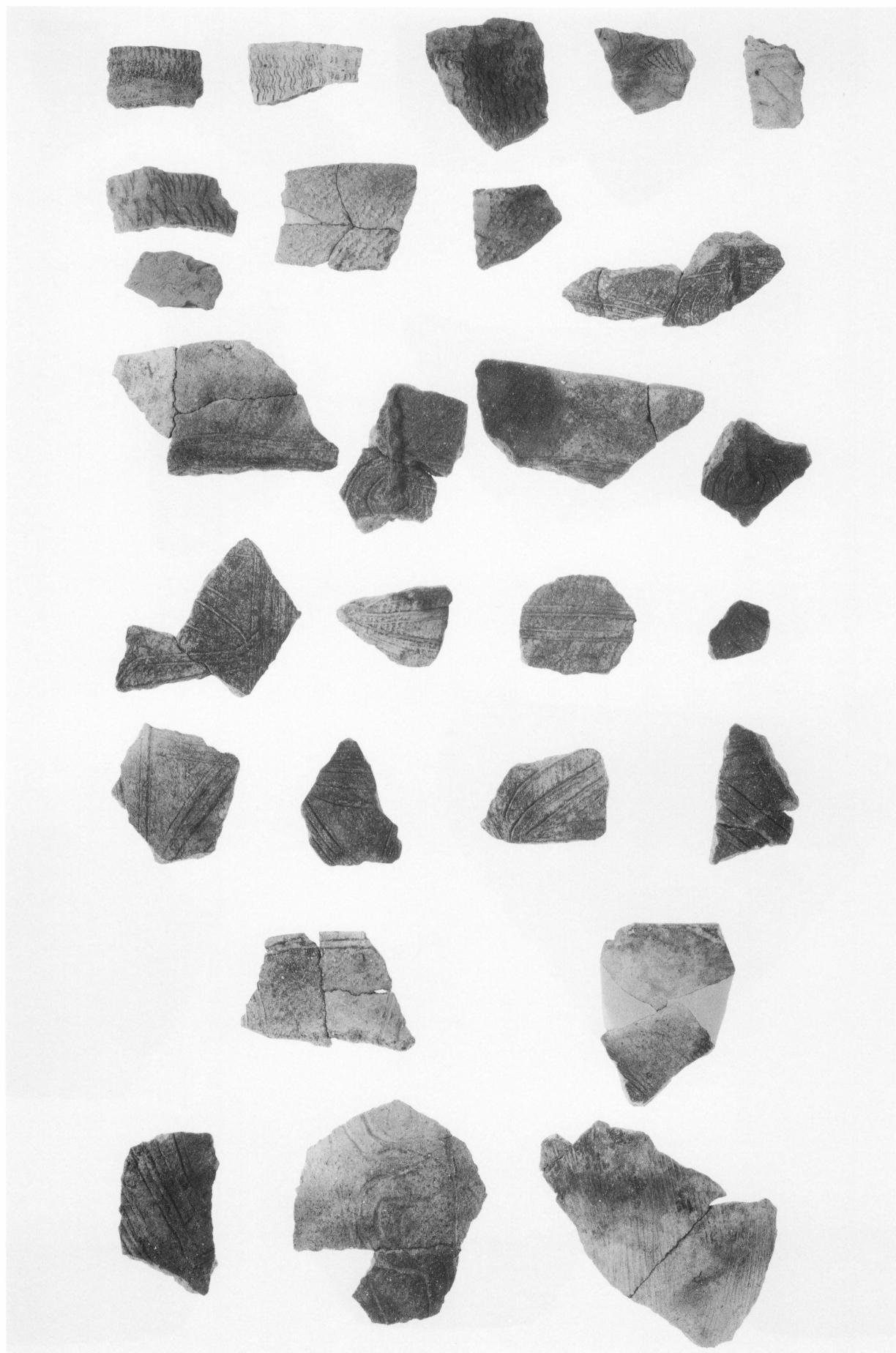
トフサ野遺跡 繩文時代石器



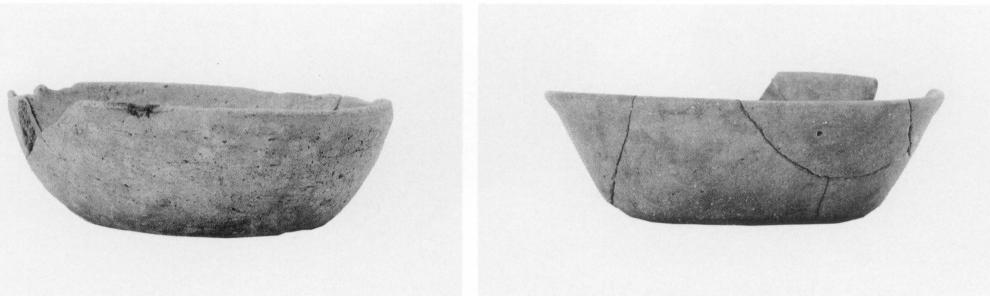
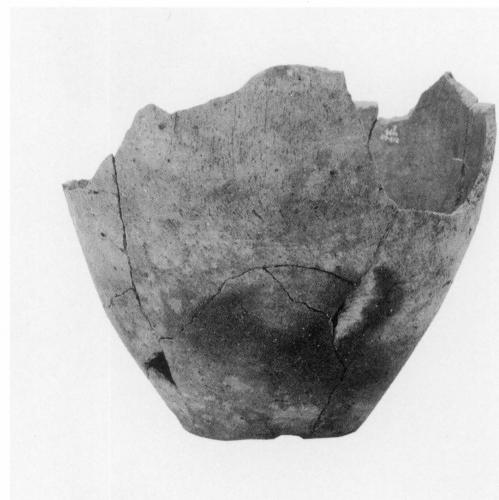
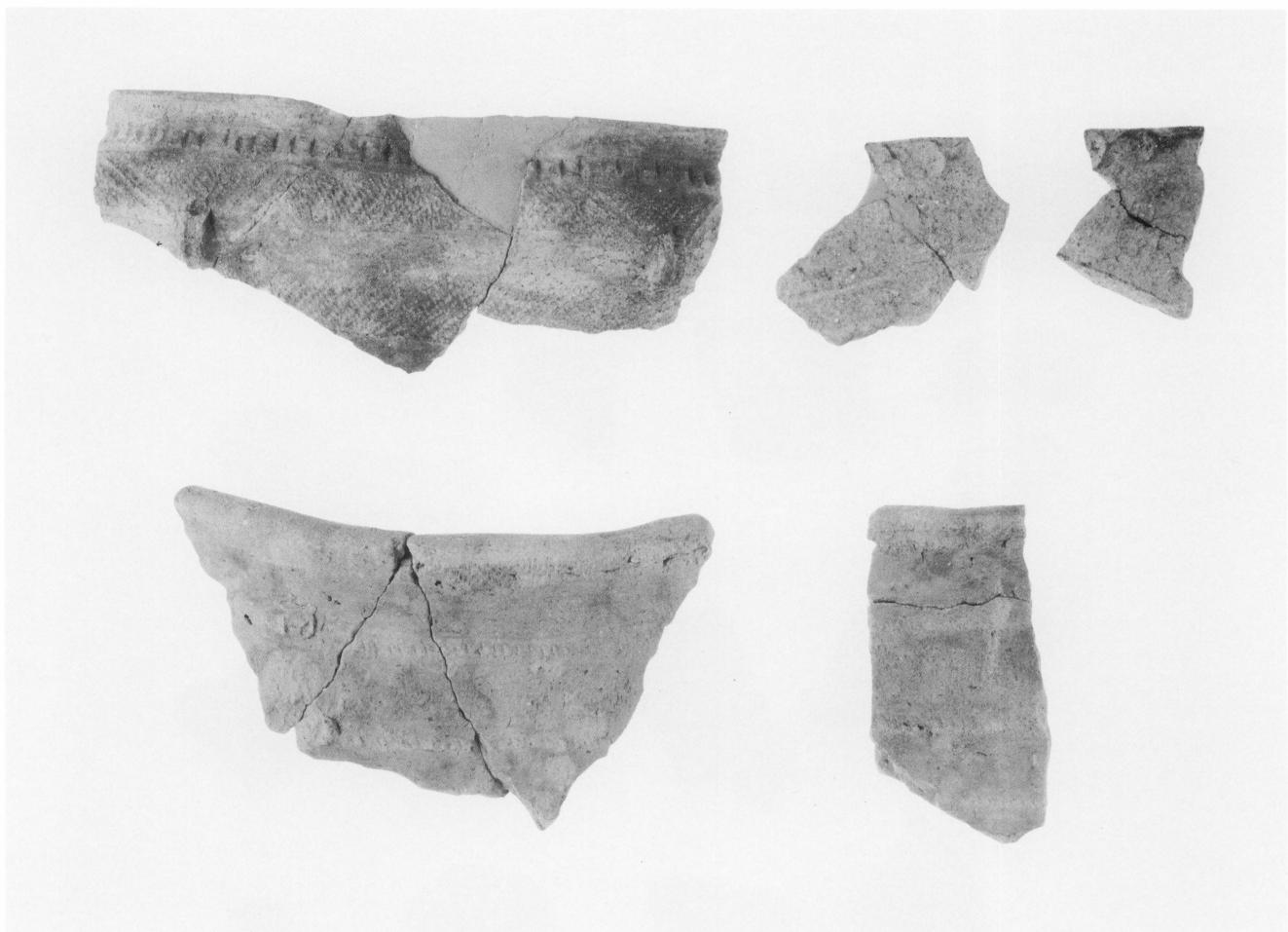
ヲフサ野遺跡 繩文土器



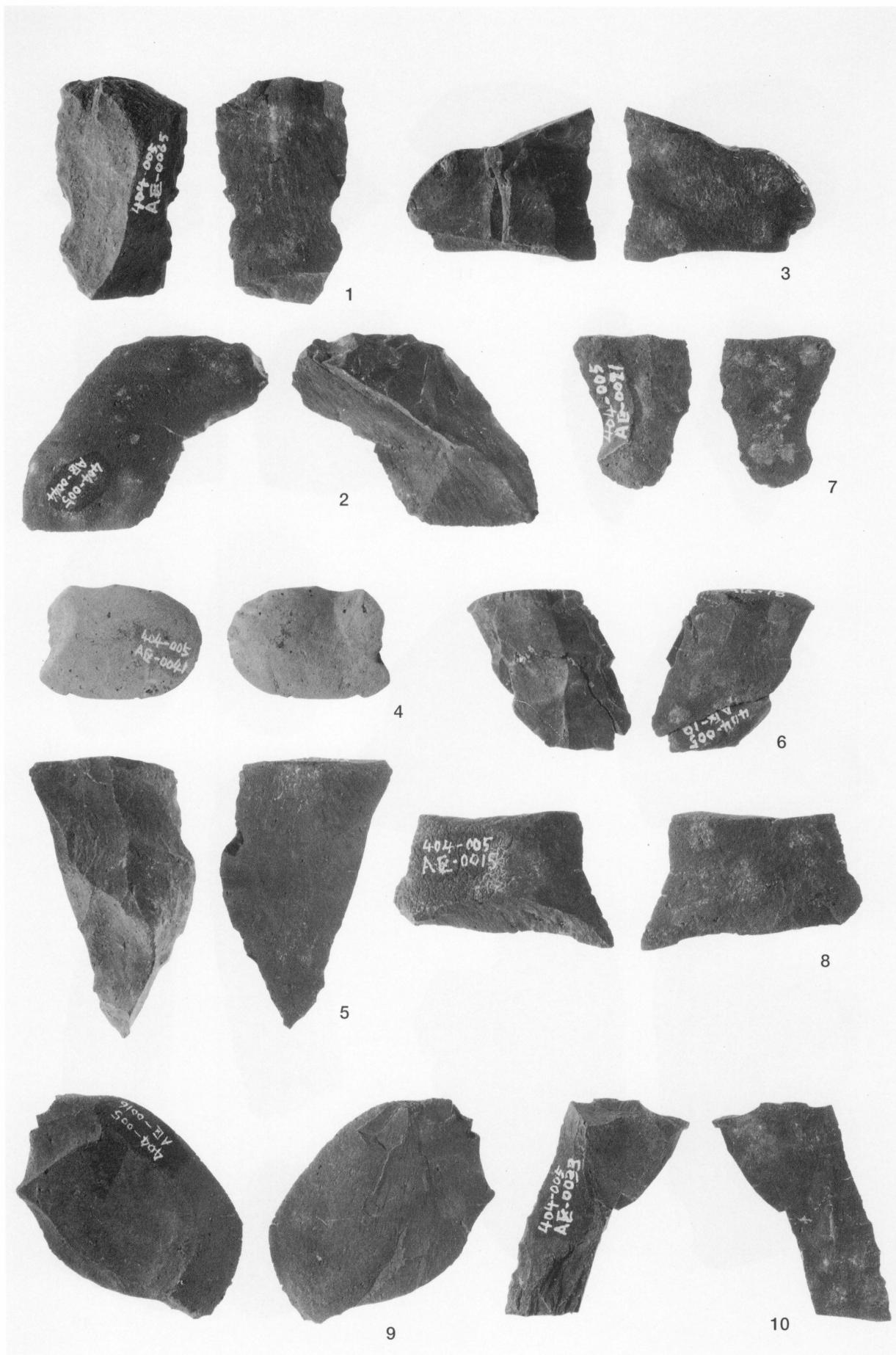
ヲフサ野遺跡 繩文土器



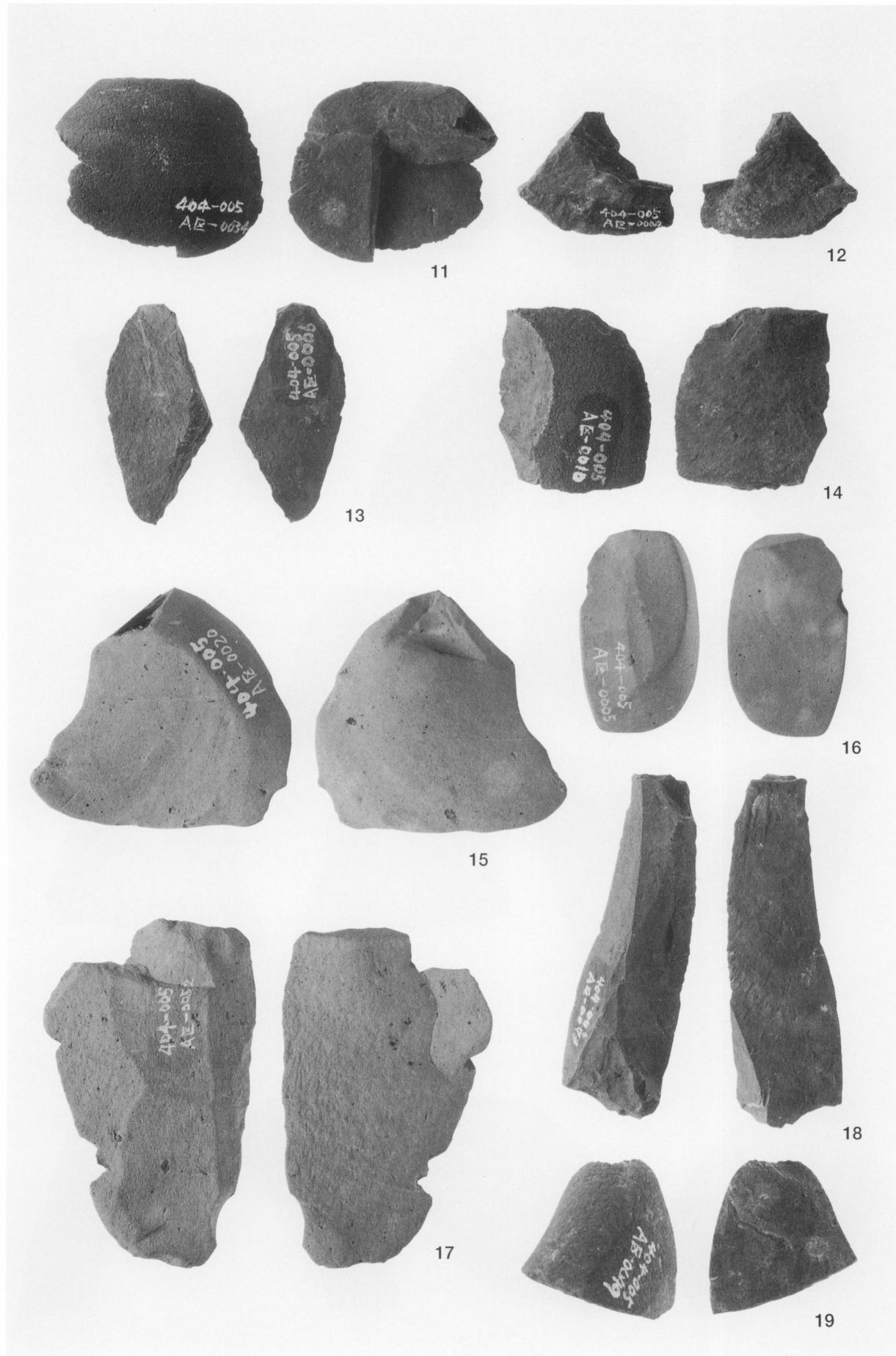
ヲフサ野遺跡 繩文土器



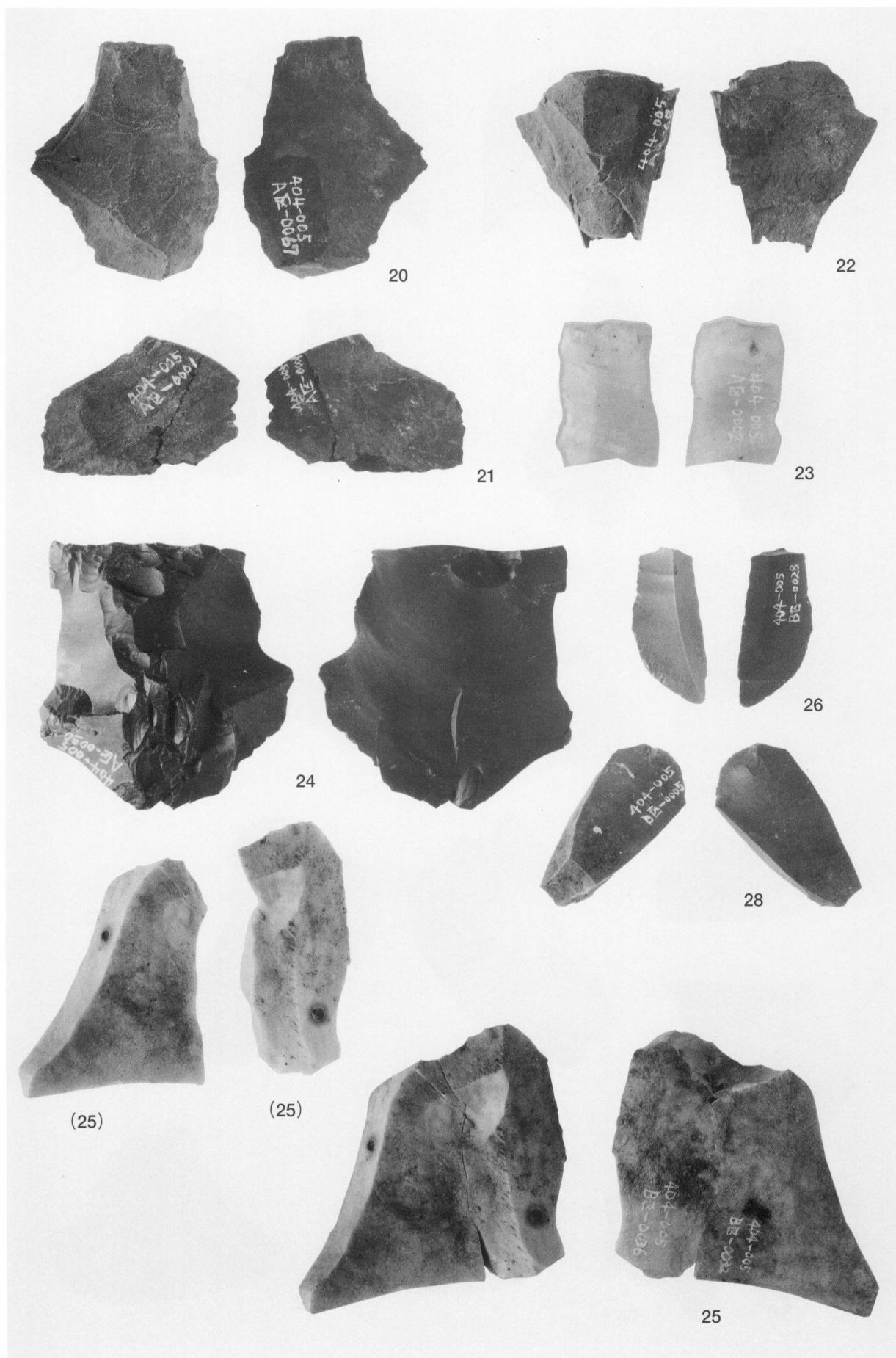
ヲフサ野遺跡 繩文土器、奈良・平安時代土師器



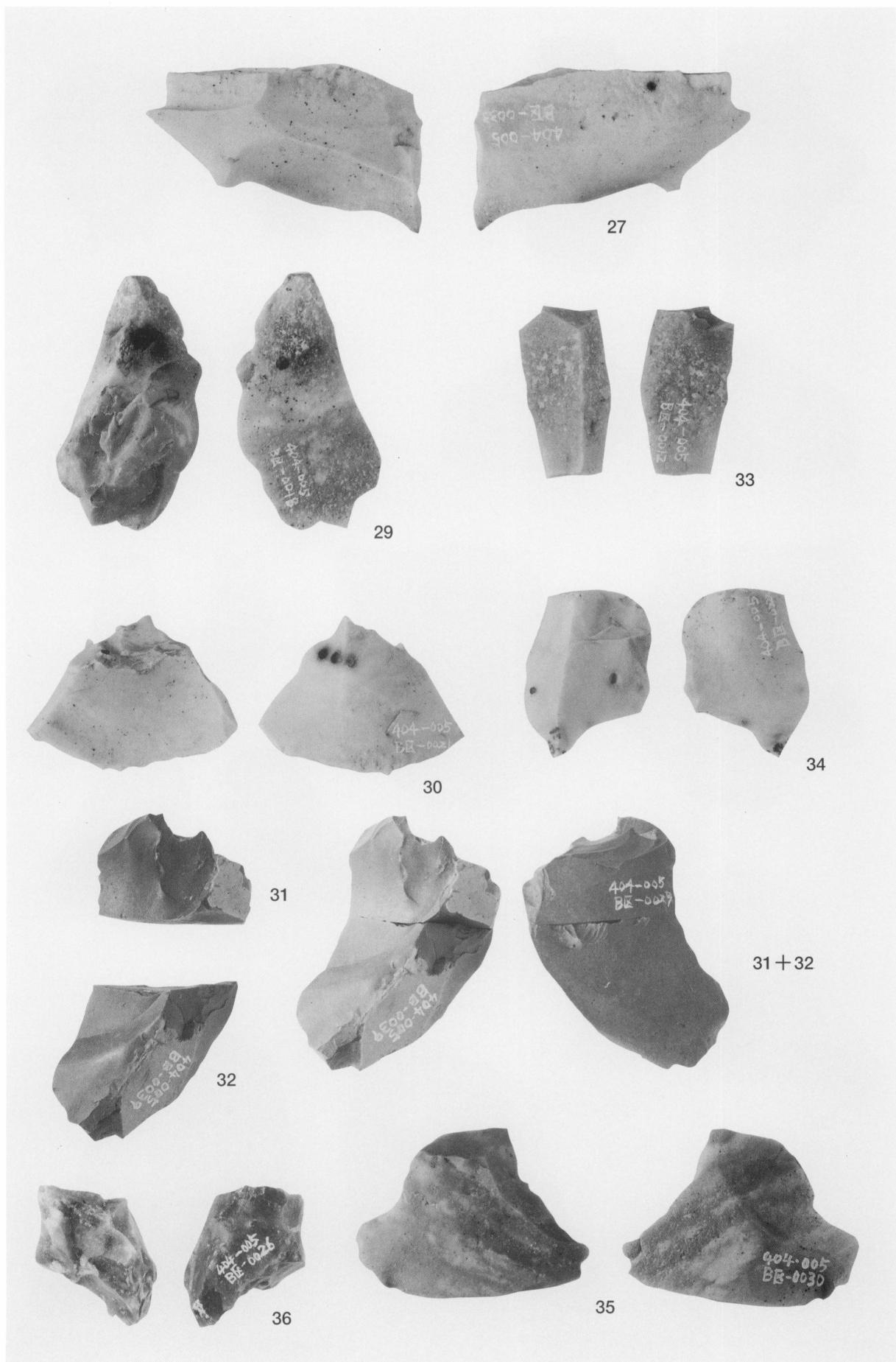
上人塚遺跡 旧石器時代石器



上人塚遺跡 旧石器時代石器



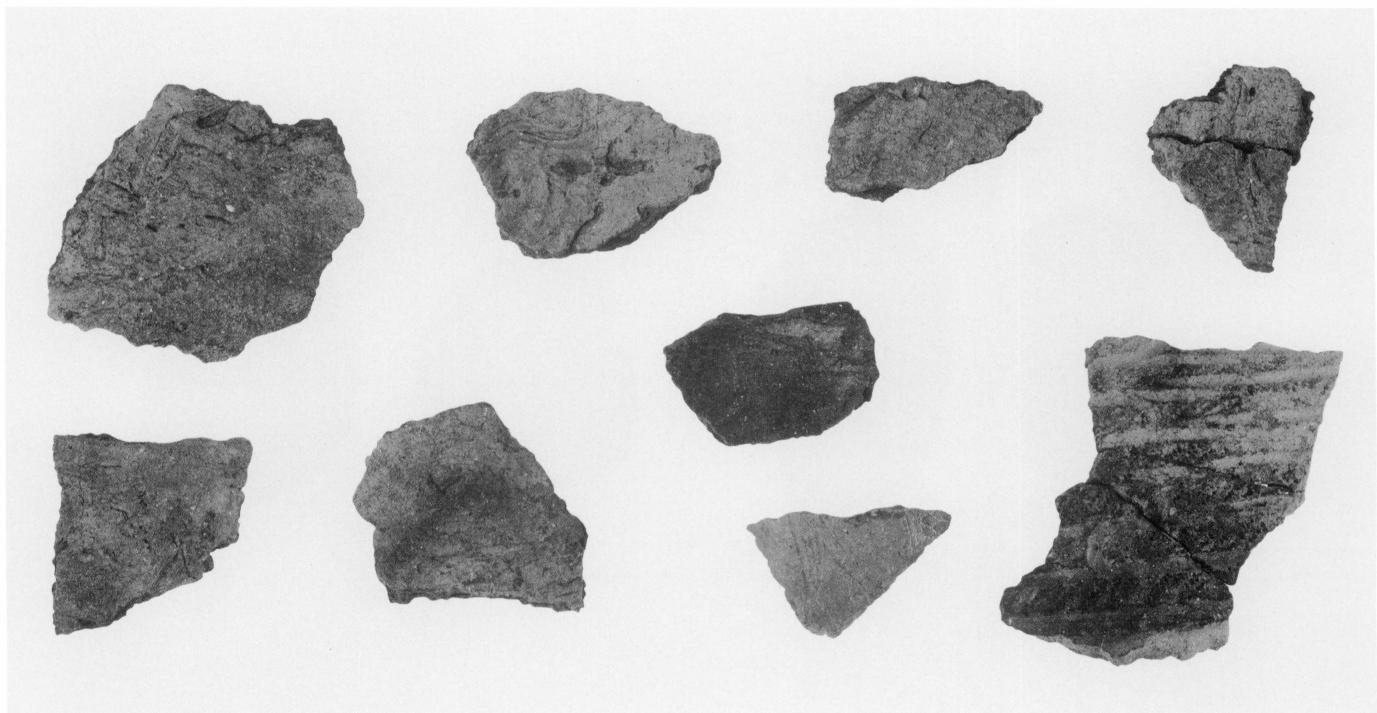
上人塚遺跡 旧石器時代石器



上人塚遺跡 旧石器時代石器



上人塚遺跡 繩文時代石器



上人塚遺跡 繩文土器



上人塚遺跡 古墳時代土師器・須恵器

## 報告書抄録

ふりがな	ちばとうがねどうろ（にき）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書						
副書名	東金市ヲフサ野遺跡・成東町上人塚遺跡						
巻次	6						
シリーズ名	財団法人 千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第389集						
編著者名	猪股昭喜 土屋潤一郎						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2				Tel 043-422-8811		
発行年月日	西暦2000年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうにんづか 上人塚	ちばけんさんぶぐん 千葉県山武郡 なるとうまちかわさきあざ 成東町川崎字 しょうにんづか 上人塚225ほか	12404	005	35° 37' 33"	140° 23' 36"	19930809～ 19931029 19940401～ 19940712 19940822～ 19950330	5,700m <sup>2</sup>	千葉東金道路 (二期)建設事 業に伴う事前 調査
をふさの ヲフサ野	ちばけんとうがねし 千葉県東金市 しゆぞうあざをふさの 酒蔵字ヲフサ野 192ほか	12213	011	35° 36' 16"	140° 21' 13"	19930816～ 19930916	15,100m <sup>2</sup>	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上人塚	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点 9か所 焼土遺構 1基	剥片	
		縄文時代 近世	陥穴 12基 炭焼窯 8基 シシ穴 26基 土坑 7基	縄文土器(前・後期) 土師器、須恵器	
ヲフサ野	集落跡	旧石器時代	石器集中地点 3か所	礫、剥片	
		縄文時代	陥穴 6基	縄文土器(早期～後期) 石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 1軒	土師器	
		近世	シシ穴 22基 炭焼窯 6基 道路跡 10条		

千葉県文化財センター調査報告第389集

**千葉東金道跡（二期）埋蔵文化財調査報告書 6**

— 東金市ヲフサ野遺跡・成東町上人塚遺跡 —

---

平成12年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地2

発 行 日 本 道 路 公 団  
東京建設局 千葉工事事務所  
千葉市美浜区若葉二丁目9番3号

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 弘 文 社  
市川市市川南2丁目7番2号

---